異世界からの不死身の侵略者を撃破し、
剣の勇者・天木錬をなんとか改心させた盾の勇者の尚文。
平和な日常を取り戻し、奴隷たちの修行のためコロシアムに行くと、
信じられないものを目撃する。
それは偽名を使い、己の正義を貫くため、
一心不乱にファイトマネーを稼ぐ弓の勇者の姿だった!?
「正義とは力。正しい事の証明。弱きを助け、強きを挫く!」
悪女ヴィッチに翻弄され、
カースに浸食された弓の勇者を尚文は更生させることはできるのか!?
ついに勇者更生編(?)完結!?　異世界リベンジファンタジー第十二弾ここに登場!!

イラスト:弥南せいら
デザイン:ragtime





9784040677873
1920093012003
ISBN978-4-04-067787-3
C0093 ¥1200E
定価:本体1200円(税別)
発行:株式会社KADOKAWA
KADOKAWA
メディアファクトリー

MFブックス

著者プロフィール

アネコユサギ
Aneko Yusagi

神奈川県出身。ゲームと読書好きが高じて、小説を書き始める。
『盾の勇者の成り上がり』を執筆し、ネット上に作品を公開。
作品発表後、連日欠かすことなく更新することで病み付きとなる読者が続出し話題となる。2013年8月MFブックスから商業デビュー。
「書籍化によって頂いている期待に応えられるよう頑張ります!」と語る。

勇者更生編(?)
まさかの展開!?

シリーズ累計
30万部
突破!!

オトナのエンターテインメントノベル MFブックス　毎月25日発売

勇者更生編（？）完結!?

アネコユサギ
Aneko Yusagi

MEDIA FACTORY

「大丈夫だろう。俺の防御力を舐めるな」

奴隷たちの修行のためコロシアムに行くと、尚文は信じられないものを目撃する。
それは偽名を使い、己の正義を貫くため、
一心不乱にファイトマネーを稼ぐ弓の勇者の姿だった!?
「正義とは力。正しい事の証明。弱きを助け、強きを挫く!」
悪女ヴィッチに翻弄され、カースに浸食された弓の勇者を
尚文は更生させることはできるのか!?
異世界リベンジファンタジー第十二弾ここに登場!!



巻末の奥付からアンケートページへアクセス!

モバイルアンケートに答えて
著者書き下ろし
「こぼれ話」を読もう!

より良い本作りのため、ご協力をお願いします。

本書の巻末、奥付掲載の二次元コード
またはURLにお手持ちの携帯電話でアクセス。
▼
アンケートページが開きます。
▼
最後まで回答してくださった貴方に、
著者書き下ろしの「こぼれ話」をプレゼント。
▼
「こぼれ話」はあとがきだったり
ショートストーリーだったり。お楽しみに。

150930　盾の勇者の成り上がり 12

盾の勇者の成り上がり 12

アネコユサギ
Aneko Yusagi

MFブックス

MFブックス
盾の勇者の成り上がり 12
アネコユサギ
Aneko Yusagi

MEDIA FACTORY

MFブックス


かわすみ いつき
川澄 樹
リーシア
あまき れん
天木 錬
フィーロ


「GURUUUUUUUUU……」
「流星盾！
エアストシールド！」



人物紹介
盾の勇者の成り上がり 12
ラトティル
ラフタリア
岩谷(いわたに) 尚文(なおふみ)
ガエリオン


盾の勇者の成り上がり 12
アネコユサギ
Aneko Yusagi

目次

プロローグ　盾の勇者の朝

突然だが俺の朝は早い。奴隷達が起きるよりも早く起床する。

夜遅くまで薬作りや雑務をしていたらその限りではないがな。

俺の名前は岩谷尚文。元々は現代日本で大学生をしていたが、図書館で四聖武器書という本を読んでいたら運悪く異世界に盾の勇者として召喚されてしまった。

勇者としての使命は世界を滅ぼすと言われた『波』――後に判明する世界融合現象の解決をすることだった。最初は異世界召喚というシチュエーションに夢一杯だったが、酷い陰謀に巻き込まれて濡れ衣を着せられ、俺は無一文で放り出された。

その所為か、自分でもわかるほどに人間不信……人格が歪んでしまった。

まあ、濡れ衣については陰謀を暴いて責任者に責任は取らせたから、ある程度は解消している。

その後も色々と事件が続き、勇者同士の友好を築くのに失敗したり、霊亀関連の問題が発生したりした。

で、霊亀関連の問題を解決した結果、次の波の到来時間が大きく伸びることとなった。

俺はこの伸びた期間を利用して霊亀関連で行った別の異世界で見た風山絆の仲間達を参考に、波へ挑む私兵の育成をすることにした。そのために俺の右腕であり親代わりをしているラフタリアの故郷の村の復興も兼ねて、奴隷となっていた村の住民を呼び戻し訓練を始めたわけだ。まあ、その後も色々と問題が付きまとったんだけどさ。

村に関する問題はある程度解決していて、復興も順調だ。

「さてと」

家の窓から朝日……まだ薄暗いけど外を見る。

「ホッ！　ハッ！　トッ！」

錬が剣を持って熱心に素振りをしている。

ああ、そうだった。錬は既に村に滞在しているんだった。

錬は俺とは異なる日本……ＶＲＭＭＯ、ネットの世界に入ることのできる技術がある日本から召喚された剣の勇者だ。

召喚当時はクールを気取った奴だったが色々とあって今は真面目に事に取り組む姿勢を見せている。

もしも呑気に寝ていたら耳元で嫌がらせの一つでも言っていたところだが、心を入れ替えるという先日の話は嘘ではなかったようだ。

俺は家から出て錬に声をかける。

「朝から鍛錬か？」

「尚文か。おはよう。もっと強くなれるようにがんばらないといけないからな」

霊亀に敗北し、俺が保護した後に行方知れずとなった俺以外の四聖勇者達。

最初は槍の勇者である元康の仲間だったエレナという女の協力のもと、元康を保護しようとしたのだが失敗。その帰りに錬と遭遇してこれも保護しようとしたのだが……錬は俺を冤罪に陥れた諸悪の根源の一人、ヴィッチに言葉巧みに騙されて逃げてしまった。

が、代わりにそのヴィッチの本性を知ることになった元康を保護できた。

そこまでは良かったんだが、落ち込んでいた元康をフィーロが励ました所為で元康は変な方向に歪み、フィーロのストーカーになった。

事実をそのまま言っているだけなのに、自分でも何を言っているのかわからなくなるな。

ともかく元康はおかしくなった。

それから俺達は元康から逃げるようにポータルで帰還した。

しばらくは概ね問題もなく日々が過ぎたのだが、今度は俺の領地で盗賊が暴れ出した。

当然の如く討伐に出ると、ヴィッチに騙されカースに侵食された錬が、盗賊の元締めとして暴れている事態に遭遇したのだ。

その後は……まあ、あんまり思い出したくないが、同様に何かおかしい元康を使って、困っている俺とフィーロのためと称し、錬をおびき出させた。

当初、錬の抵抗で保護はもう無理かと思ったのだが、エクレールが錬と、剣と剣でぶつかり合って説得を成功させた。

その後、世界を救うという使命に目覚めた錬はエクレールの指導のもと、俺の領地に留まることになった。

ただ……元康の方には逃げられてしまった。

見た感じ俺が教えた強化方法の実践はできたみたいだから、ある程度大丈夫だと思いたい。

しかし……これからもっと戦闘はきつくなっていくだろう。

そう考えた俺は、錬に勝てるほどの技術をエクレールに授けた変幻無双流の顧問……行商中に薬を飲ませたら重病が治った元気すぎるババアの指導を受けることを決めていた。

だが、ババアに俺にピッタリの修行法があると言われ、錬達とは別で行うことになっている。
「確か尚文は俺やエクレールとは修行法が異なるんだったか」
「まあな」
「尚文、お前もがんばれよ」
「なんでがんばらなきゃいけないのか……というかお前も……いや、悪かったな」
錬は保護する時……代償を支払う必要のあるスキル、強欲のカースを何度も使用した。
強欲の代償は運の低下と財産の所持ができなくなるというものだ。これには装備とかも含まれるらしく、錬が着用していた安物の鎧の類は全部ボロボロになって使い物にならなくなった。
俺のブラッドサクリファイスも大ダメージ&ステータスダウンの代償が掛かる。
錬にも似たように代償と継続的な呪いが体に染みついているということか。
確か、錬が放ったカーススキル、ゴールドリベリオンを発動させる代償は所持している金銭だ。
継続的な呪いは触れたものを劣化させることとドロップ品を粗悪品にさせることだとか。
保護はできたが厄介な状態での仲間への加入だ。
で、エクレールと戦った時に発露した暴食の代償もすぐに判明した。
錬ってエクレールに負ける前にはＬｖ95だったらしいのだが、現在は85にまで低下している。
どうやら、発動に必要な代償はＬｖだった……らしい。
本人はやる気があるみたいだが、そんな状態では安易に戦わせるわけにもいかない。
「じゃあ、またな」
「ああ」

ということで素振りを再開した錬に手を振って俺は歩き始める。
それから俺は魔物舎に顔を出し、備え付けの餌箱から魔物共に餌を配って、軽く運動——という名の遊びをする。
魔物共の面倒を村の奴隷達に任せてはいるけど、朝は俺が自発的にやっている。
「さーてお前等、今朝は何をする？」
魔物共が挙って楽しげな声を上げる。
木の枝を投げて取りに行かせる遊びや、鬼ごっこのような追いかけっこなどだ。
この遊びに参加したい奴隷共も朝早くから準備を終えて待っている。
もちろん行商に出ていない連中だけだけどさ。
ミミズのような魔物であるデューンは土壌整備用の魔物だから、毎回参加している。
ルーモ種の奴隷共と仲が良い魔物だ。
「ワンワン！　兄ちゃん！　もっと！」
キールが俺の投げた木の棒を咥えて戻ってきた。
……うん。コイツは完全に犬だ。文字通りの意味で。
本来はラフタリアと同じく親を亡くした亜人の奴隷だったのだが、獣人に変身できる資質があるらしく、サディナに教わってからは獣人の姿……獣化した状態でいることが多い。
その造形はシベリアンハスキーっぽい子犬だ。
最近、キールの犬化が加速しているような気がしてならない。
それから、気が向いた時は朝食を作る。

今回は下ごしらえが済んでいたので料理担当の奴隷と一緒に朝食を作り、村の連中に配る。
そういえば村の子供奴隷が増えたな。
俺の留守中に奴隷商の関係者が立ち寄って、奴隷を預けていった。
この村出身ではないが、今後のことを考えたら人手が全く足りない。
村としての体制も含めて、今は開拓も軌道に乗っているところだ。波に備えて少しでも戦力を整えたい今こそ、選ばずにもっと人員を集めないとな。
奴隷紋を刻んだ後はキール達に一任する。
もはや俺が直接管理しなくても、奴隷共が後輩の奴隷に色々とルールを叩きこんでくれる。
全体の統率はラフタリアを筆頭にキールや最初に管理した奴隷が行っている。
叱るのも含めて奴隷共がちゃんとやってくれているから楽だ。
「ナオフミ様、おはようございます」
「ラフー」
「おお、ラフタリアとラフちゃん、おはよう」
ラフタリアが奴隷達を連れて朝食を食いに来た。
ラフタリアは俺の頼れる相棒だ。
元々は奴隷だったが、今は異世界で刀の眷属器に選ばれた勇者だ。
この世界で俺のことを最初に信じてくれた子で、俺が親代わりをしている。
俺が間違った時とかには的確に指摘してくれる……親子のような関係だな。
「ラフー」

ラフちゃんは異世界で行方知れずとなったラフタリアを見つける際に、ラフタリアの毛髪をもとに作りだした式神……こっちの世界では使い魔だな。

タヌキのようなアライグマのような可愛らしい容姿をしていて、性格はノリが良い。

可愛がりたいんだけど、あまり構うとラフタリアが嫌がる。

何かむずがゆい気持ちになるらしい。

「尚文様、おはようございます」

そこへアトラもやってくる。

アトラは、この前ゼルトブルで新しく奴隷を購入した際、メインの兄の……おまけとして一緒に買うことになった病弱な妹の方の奴隷だ。

ラフタリア同様亜人で、種族はハクコ種というそうだ。

このハクコ種というのは盾の勇者を信仰する国、シルトヴェルトでも有名な種族で亜人の中でも相当上位に位置するとか。

そんなハクコ種であるはずなのだが、アトラは先天的な病で余命幾ばくもなかった。

だが、俺が手に入れたイグドラシル薬剤を服用させるとみるみる快方に向かい、歩いたことすらなかったのに歩けるようになったのだ。

皮膚も爛れて全身に包帯が巻かれていたのだが、薬のお陰でそれも治り、村でも有数の美……幼女になった。

目も見えず歩けず、しかも死にかけというところから立ち直るとか凄いよな。

「ああ、アトラか……サディナはどこだ？」

サディナは……酔いどれのシャチ女だ。
変身能力を持っており、普段は獣人の姿をしている。村の連中の頼れる姉役である。
戦闘経験が豊富で、コロシアムで対戦した時には苦戦させられた。
なんでも自分よりも酒が強い相手が好みらしく、俺が酒に酔わない体質だからか事あるごとにセクハラをしてくる。
で、アトラとサディナは俺のことが気に入った者同士、よく一緒にいるのだ。
「存じませんわ。ささ、お兄様、私の手を離してサディナさんを捜してきてください」
「ダメだ！　アトラ！　手を離したらアイツの所へ行くだろ！」
で、アトラの手を握って俺の元へ来られないようにしてくれているのが、アトラの兄にして購入時には戦力という意味では本命であったフォウルだ。
シスコンでアルプス……いや、妹想いの奴なのだが、アトラの行動に翻弄されているな。
一応、村の奴隷達の中では年齢は高い方に分類される。
「お兄様、あっちの空を見てください」
「ん？」
突然アトラがありきたりな言葉でフォウルの意識を別の方向に向ける。
直後、アトラは実の兄の腹を指で突く。
「てい！」
「ぐあっ……！」
不意を衝かれてフォウルが腹を押さえて悶絶している。

アトラの方が戦闘面の資質が高いように見えるのは、きっと俺の気の所為じゃないよな。
変幻無双流のババアに聞くと、目が見えないからこそ周囲の気や魔力、音などに敏感になり、相手の急所を的確に分析する力を得たそうだ。
結果、突く能力に特化してしまったらしい。
「……だが、俺は手を離さん！」
「お兄様、しぶといですわ！」
いろんな意味で変な兄妹だ。
「いつまでも遊んでないで飯を食って出かけろ。アトラ、稽古は飯を食い終わってからだからな」
「楽しみにしていますわ！」
「ああはいはい。フォウルも負けずにLv上げと修行をしろよ。じゃなきゃ妹に負けるぞ」
「く……わかった！」
フォウルは俺を睨みながら頷いた。
この前、この兄妹……というかフォウルが元康の放ったスキルの影響を受けて、アトラに襲いかかったのは記憶に新しい。まあ、抱きついて逃げられないようにしていただけどさ。
どちらにしても、フォウルがアトラに対して兄として以上の感情を持っているのは確実だ。
「……」
他にフィーロがいるのだが、アイツはメルティの所へ遊びに行って帰ってこない。
フィーロは俺の二人目の仲間であり、フィロリアルという鳥の……人化する魔物だ。
人型時の外見は背中に羽の生えた金髪碧眼の幼女。

馬車を引くことを何よりも喜びにしている魔物で、勇者が育てると特別な成長をする。戦闘センスが高く、俺達が次々と窮地を乗り越えてきたのに一役買ってくれた。
天真爛漫な食いしん坊だ。
で、そのフィーロだが、元康を励ました所為で元康に恋愛対象として狙われる羽目になった。しかも大切にしていた馬車を奪われたから、最近は落ちつきがない。
「さーて、お前等、飯を食ったら今日の業務に取り掛かれ。以上だ」
と指示していると寝惚け眼でやってくる奴が一人……と二体。
「ん――」
名前をセインという……この世界ともグラスの世界とも違う世界からやってきた眷属器の持ち主だ。確か裁縫道具の眷属器だったか。糸玉やハサミを武器として使える。
最初はゼルトブルのコロシアムでマーダーピエロというリングネームで俺達と対戦した。
が、何の因果かここで面倒を見る羽目になった。
銀髪の……パッと見だと一五歳くらいの女だな。背は低め。
可愛い方だとは思うが、意識するような間柄じゃないな。
元々いた世界は滅んでしまったらしく、その因縁の相手がこの世界で四聖勇者の命を狙っているらしい。現在は俺のボディガードのようなことをしている。
「おはようございます。イワタニさん」
セインが連れているぬいぐるみがセインの代弁を始める。
眠そうにしているのはこのぬいぐるみを作っていたからか？

どうやらぬいぐるみを使い魔として使役することができるらしい。
特技が裁縫だからかもしれないが、セインの作るぬいぐるみの仕上がりに関しては色々と問題がある。
最初、何を血迷ったのかラフちゃんを模したぬいぐるみを喋らせようとしたのだ。
ラフちゃんは「ラフー」としか鳴けないからこそ可愛らしいのだ。
にもかかわらずぺらぺらと喋らせたらその魅力が半減する。
それを指摘したらぬいぐるみを喋らないようにした。
今ではラフちゃんのぬいぐるみは俺の枕元に置いてある。
で、ニューデザインのぬいぐるみは獣人形態のキールを模したものだ。
仮にキール二号と命名しよう。
「おはよ――」
で、セインの使う眷属器は世界が滅んでしまっている影響か翻訳機能が破損していて、喋ると雑音が混じる。
「ああ、おはよう。だが……お前のぬいぐるみはずいぶんと流暢に話せるようになったな」
「そのことですが、代弁します」
ぬいぐるみであるキール二号が、そう言いながら首輪にぶら下がっているアクセサリーを指差す。
「イワタニさんが倒した我が主の宿敵の仲間の死体から、翻訳機能を宿したアクセサリーを取り上げ、利用させていただきました」
さっきも説明したが、四聖勇者殺しをしようとする異世界からの侵入者が、どうやらいる。

で、この前、俺達に襲いかかってきた。
奴等は他世界を滅ぼすことで多大な利益を得ることができるようで、奴等とはグラスや絆のように和解など成立しない。
その利益として得られるのがどうやらゲーム用語でいうところの『死に戻り』で、死んでもどこかで生き返ることができる能力だ。戦闘技術もなかなかあって、苦戦を強いられた。
幸いにして、死に戻りができないようにする条件のようなものがあって、仕留めることができた。
この道具は、その時に奴等の死体を漁って手に入れたモノだ。
「分析に回したいところだが……」
「お望みでしたら渡しますが？」
独占する気はないようだが……これがないとセインとは上手く話ができない。
その点でいえば、この使い魔が間に入ってくれれば話もしやすくなる。
今はまだ絆の世界で手に入れたアクセサリー類の解析を優先している。
確かに翻訳機能の解析が進めば便利だとは思うが、俺の場合は盾が翻訳してくれるし使う相手がセインだけだから……優先度は低いな。
「必要になったら要請を出すからそれまでは持ってろ」
「了解しました。では引き続き使わせていただきます」
「セインは使えないのか？」
「眷属器と反発してしまい。辛うじて私が使える段階です」
うわ……セイン自体は使えないと……？　便利なようで使いづらいなぁ。

俺も多分使えないんだろうな。
「なるほど、まあいい。セイン、お前も飯を食うだろ」
と、俺が尋ねるとセインはコクリと頷いて食器を差し出してきた。
盛り付けてやるとテーブルに座って黙々と食べ始めた。
ま、こんな感じで村は賑(にぎ)やかだな。

一話　即席開花

さて、飯を食べ終わると、奴隷達は各々の仕事を始める。
鍛錬をする者、魔法の勉学を始める者、行商に出る者、復興の手伝いをする者と様々だ。
俺は日によって色々とやるが、朝飯を食い終わった後はアトラと稽古することになっている。
フォウルはLv上げに狩りに出かけた。アトラのやっていた見張りはラフタリアが交代する。
なんでアトラと稽古をしているのかというと、色々と事情がある。
変幻無双流のババアを村に呼んだ時のことだ。
「おいババア。俺も修行をしたいのだが」
リーシアやエクレールが目に見えて成果を上げているので、俺も真面目に修行に取り組みたいと頼んだ。
まあ、いきなりババアは失礼だろうが、その呼び方が定着してるんだからしょうがない。

「わかりましたですじゃ。ですが気を感じ取ることを覚えないと始まりませんのですじゃ」
「ああ……やっぱりそこからか……」
「私は少しわかるようになってきました」
「おお、ラフタリア門下生はわかってきているようじゃな」
ババアもラフタリアを見て理解しているようだ。
「ならば後ほど、ラフタリア門下生にはワンランク上の修行をしてもらうのですじゃ！」
「俺はまた山奥で座禅をしろと？　もしくは命力水辺りを服用するしかないのか……」
地道に修行しなくちゃいけないのはわかっているが……。
ここ最近厄介な事件が立て続けに起こっているし、すぐに覚えたい……そんな美味(うま)い話はないか。
「いや、少々荒療治になりますが、聖人様には良い方法があるかもしれませんのですじゃ」
「そういうのがあるなら早く言え。少しくらい痛くても問題ない」
どっちかっていうと早く強くなる方が重要だ。
「ワシよりも適任な、気を理解する目を持つ者がいるのですじゃ。その者と組み手をしていれば聖人様ならきっと理解できると思いますのじゃ」
「ああ、確かアトラが才能があると言っていたとか聞いたな」
エクレールからアトラのことを聞いたんだった。ババアが教える必要がないとか。
「そうですじゃ」
一緒にいたフォウルがババアに見られて警戒しながらアトラを見る。
「あら？　なんでございましょうか？」

「そなたならば聖人様に気を理解させられるであろう」
「まあ、前回狩りに行った時にはフォウルよりも強く見えたしなぁ」
「なんだと!? 俺の方が強いに決まってる!」
「お兄様、尚文様の前で私を低く評価するのはやめてくださいませ」
アトラがフォウルの脇腹をツンと突く。
「ぐは!?」
アトラに突かれてフォウルは仰け反った。
「く……」
「というわけだフォウル。今のお前はアトラよりも弱い。それを挽回したいならそこのババアの元で修行してこい」
「お兄様、今までありがとうございました」
今まで育ててくれた礼を一言で済ませたアトラに俺は絶句する。
「あ、アトラ!? く……わかった。俺は絶対に強くなってみせる!」
とか言いながらフォウルは強くなる意志を表情に滾らせた。
アトラはフォウルの成長を促してくれる。
そういう意味ではアトラの態度も悪くはないのか。
「私、尚文様と共に鍛錬をしてみせますわ!」
アトラが俺に腕をからませてくる。
あんまり絡んでこないでほしいが、修行相手になるのだから多少は大目に見るしかないのか?

「ということだ。ラフタリア、先にババアと修行に――」

「嫌です！」

なぜかラフタリアが異議を唱えた。

なんでだ？　修行に対してやる気を見せていたのに？

「ふむ……まあラフタリア門下生も共に競えば効果的に修行ができるかもしれん。ライバルの存在は向上心を生むものじゃ」

なんかババアも妥協してる。

そういうものか？　まあ俺が読んだことのあるマンガでもそんな感じの話はあったが。

「それで聖人様、命力水の発注をお願いしますのじゃ。あと、本格的な修行にはやはり山に行かなければなりませぬ。その許可も近々お願いしますじゃ」

本来だったら山奥に修行に行かねばならないところを、命力水の存在を知ってからは村はもとより、町でも修行をするようになった。そのお陰でエクレールやリーシアもマメに鍛錬できるわけだしな。

錬もエクレールと一緒にババアの元で修行するつもりみたいだし、命力水がどれだけ必要になるかわからない。ババア曰く、俺と一緒でもいいと思っていたが、錬は楽して強くなりたいわけではなさそうなので、エクレールと一緒に高め合うのもいいだろうということである。

そんなわけで俺とラフタリアはアトラと組み手をすることになった。

まずは気が目で見えるようにならねば始まらないらしい。

「さてアトラ、今回は俺が頼んだ攻撃を強めに、そして素早く放ってくれ」

「わかりましたわ！」
アトラの突きを受け止める。するとバシンといい音がして、体の中に何かが入ってきて弾ける。
ババアが俺に放ったことのある技そのものに感じた。
訓練用に弱めの盾にしていてよかった。下手に強化した盾で打たれたら痛いじゃ済まなかったな。
「ぐ……」
体の中に入ってくる異物を自身の魔力に乗せて強引に外へと出す。
が、ババア曰く間違った逃がし方だったんだったか？
「で、できなくはないが難しいな。さ、もっと組み手をしていくぞ」
「では行きますわ！　ていていてい！」
ババアには訓練のやり方を色々と注意されている。
ただ俺が受け止めるだけではなく、アトラを相手にした実戦形式の訓練の方がより鍛錬になるというのだ。
で、ラフタリアも同様にアトラとスパーリングをしていけとの話だ。
「ナオフミ様……」
「ババアの話じゃアトラの攻撃を受けている間に気が見えてくるようになるはずだっていうんだ。やるしかないだろ」
そんなこんなで受け続け、疲労で座り込むくらいになって休憩となる。
「次はラフタリアさんですわ」
アトラがクイクイとラフタリアを手招きした。



なんでそんなに挑発的なんだ?
ラフタリアはラフタリアで、木刀のはずなんだが真剣な表情で応じる。
「やりますわ」
「やらせませんよ?」
じり……じり……っとどうもこの二人が稽古をしていると、実戦なのではと思えるほどの気迫を感じる。
これは真剣勝負の間違いじゃないのか? それとも俺も同じくらい真剣にやらないといけないんだろうか。
「はぁ!」
ラフタリアが素早くアトラの懐に入り込み木刀を振り下ろすと、アトラはそれを紙一重で避けながら鋭い突きをラフタリア目掛けて放つ。
それを同じく仰け反って避けたラフタリアが返す刀で横に薙ぐ、するとアトラは屈みこみ隙を衝く……ラフタリアが木刀で受け止めると素早くドシンと何かをぶつけるような音が響く。
「行きますわ!」
アトラの鋭い突きをラフタリアは腕を薙いで逸らし、反撃とばかりに木刀を振り下ろす。
「ちぃ! しぶといですわね」
舌打ちをしながらアトラはバク転をして距離を取った。
「私の一撃を受ければ勝負はつきますわ。もちろんその後、尚文様との訓練は私が受け持ちますのでラフタリアさんはしばらくじっとしていればいいのですわ」

「させません！　アトラさんこそ私の刀を受けて、ナオフミ様と私の訓練風景を見ていればいいんです！」

で、ラフタリアは木刀の反りの部分に手を添えて……何かを流しているのか？　気が見えないとわからないぞ。

「やる気ですわね」

「あなたこそ！」

両者共に見合ってから……素早く突進し、ぶつかり火花を散らせる。

模擬戦だよな？　本気じゃないのによくやる。

「相変わらずやりますね」

「あなたほどじゃありませんよ」

こんな感じで妙に気迫の籠った試合を見せつけられている。

そういえば二人の戦闘を観察するのが俺の修行だともババアは言っていたな。

などと考えながら俺は二人の接戦を眺めた。

そんなこんなで昼になり昼飯を作る。一日中修行をできる余裕があればいいんだがな。

「今日も盾の兄ちゃんが作った飯はうめー！」

興奮してキールが犬化した。尻尾をフリフリしている。

そんなに嬉しいのか。ふんどし犬め。

まあいいか。やる気があるに越したことはない。

「さて、飯を食ったし、今日は武器屋の親父の所にでも顔を出しに行くか」
「はい」
「わかりましたわ！」
俺達は修行をやめ、ポータルを使って城下町へと移動したのだった。

二話　錬金術師

武器屋に入ると……イミアの叔父が店番をしていた。
「あ、盾の勇者様」
「よ。調子はどうだ？」
「作っても作っても売れていく状況です。売り上げの一部を盾の勇者様の装備代に充てますね」
おお！　それは素晴らしいな。
なんだかんだで金欠状態が続いている。装備に金を払うにしても、まだ懐に余裕がない。
そんな状態なので、イミアの叔父が働いてくれているお陰で装備代が安く済むなら良いことだ。
「助かる。イミアをはじめ、お前等器用な連中には色々苦労を掛けているな」
「何を言うのですか。やりがいのある仕事をくださって、こちらこそ感謝しきれません」
イミアの叔父はルーモ種というモグラに似た獣人だ。
元々は奴隷商からイミアを購入したら手先が器用だったので、同族の奴隷を追加で購入したのだ

が、その中にイミアの血縁者、叔父のコイツがいたので俺の中ではイミアの叔父と呼んでいる。
本名は別にあるんだが、何だったかな。長いんだコイツ等の名前は。
イミアの叔父と武器屋の親父は過去に修行仲間だったらしく親しい間柄だ。
村で武具作りをしてもらうために武器屋の親父に弟子入りさせようと紹介したのだが、二人は顔見知りだったのだ。
「日夜あの山の素材の特色を検討して言い争っている段階でして、昨夜は殴り合いにまで発展したくらいなんですよ」
「それはそれで凄いな」
親父と言い争いの末に殴り合い……で、ありながら翌日にはその雰囲気を微塵も感じさせずに店番をやっているとは……信頼し合っているのを感じるな。
「どうしたー？」
親父が店の奥からやってきた。作業中だったらしくハンマーを片手に持っている。
「お？　アンちゃんじゃねえか。どうよ、最近は」
「ボチボチ……色々と修行とかをやってるところだな。そっちこそ装備品の方はどうなんだ？」
「そんな数日で進展するほどじゃねえな。今日、顔出したのはそれだけか？」
気さくに尋ねられて俺はしばし考える。
それからついてきているラフタリアとアトラに徐に目を向けた。
「うーん……」
金は無いがイミアの叔父が手伝ってくれているお陰でツケ的なことはできるはず。

ならばちょっと気になっていたことを頼むとするか。

「なあ親父、前に俺に隕鉄の盾を見せてくれたよな」

「ん？　何かあるのか？　アレでアンちゃんがもっと強くなるとか」

「いや、そういうわけじゃない。流星盾はかなり優秀だし」

正直、流星盾を習得してからは戦闘ではいつも世話になっている。

長く使える万能スキルなのは今までの戦闘で十分に感じているところだ。

アクセサリーを付けることで更なる効果も望めるしな。

「隕鉄の盾に何か思い入れがあって大切にしているのか気になってな」

「ん――……単純に素材が希少で売りたくないから倉庫にしまってるだけだが、どうしたんだ？」

「そうなのか？　なら頼めるかもしれないか」

「なんだ？　アンちゃんは何が言いたいんだ？」

俺はラフタリアに視線を移しながら親父に提案する。

「あの隕鉄の盾を熔かして刀……隕鉄の刀とかにできないか？」

そこで親父とラフタリアが同時に納得したように頷く。

「前々から見ちゃいたが、もしかして嬢ちゃんの刀はアンちゃんの盾と似た武器なのか？」

ああ、そういえば武器屋の親父にラフタリアの刀に関して説明していなかったな。

異世界の眷属器、七星武器と思われる武器だと。

ラフタリアは刀を抜いて親父に見せる。

「異世界の……眷属器という武器で、おそらくこの世界でいうところの七星武器だ」

「なるほどな。つまり隕鉄の盾を刀に打ち直せば、嬢ちゃんも強い力が使えるようになるっていう寸法か」
「そうなる。頼めないか？」
「尚文様に武器を発注してもらえる。羨ましいですわ。私も何か武器が欲しいですわね」
アトラの嫉妬を無視する。素手で戦える奴に武器は要らない。
「できなくはねえな」
「やってくれるか？」
「ああ、どうせ処分に困ってる珍しいだけの品だ。アンちゃん達のためになるんだったらいいぜ」
「では後で炉の方に移動させておくか？」
イミアの叔父が親父にそう尋ねると親父は頷く。
「しかし刀か……」
親父がなにやら物想いに耽るかのような遠い目をし始める。
「何かあるのか？」
すると親父とイミアの叔父は揃って思い出に浸るかのように答えた。
「盾の勇者様、自分達の師匠は刀を作るのが得意でした」
「まあ、師匠の本業は刀鍛冶で、他もできるってやつだったぜ」
「へー」
そういや鍛冶って作る武器とかによって特化しているとか耳にした気がする。
ヨーロッパでは……俺の世界の大昔には利権やらなにやらで細かく定められていたらしい。

まあ、ここは異世界だから制度が違うみたいだが。
俺の場合は武器屋の親父が割と何でもできそうだから頼んでいるんだが、それって親父とイミアの叔父がそれだけ万能だってことなのかもしれない。
「なんだかんだで俺は師匠からは免許皆伝を授かりはした。だが、未だに師匠の腕を超えてるとは、正直思えねえな」
「ふーん……」
師匠というのは女絡みで問題を起こす名工とか、この前言ってたのを覚えている。
人格に問題があるが腕は良いってタイプなんだろう。
そんな名工が得意なのが刀だったわけね。
「元から素材は揃ってるし、時間もそこまで掛からねえだろ。二、三日したらまた来てくれ」
「わかった。料金に関しては……」
「どうせ買い取るわけじゃねえだろ？　練習も兼ねてるから持つだけならタダでいいぜ」
ここが親父さんのいいところだな。すごく気前がよくて助かる。
「助かる。今度、大口で村の連中用の装備を発注しよう」
「あいよ」
だからこそ、こっちも報いたいと思えるんだよな。
「ついでに何か珍しい鉱石とか欲しいものがあったら言ってくれ。じゃあ……またな」
「それでは」
「またですわ」

「あいよ。アンちゃんの周りも大分騒がしくなってきたみたいで、俺も楽しくなってくるぜ」
親父と別れて俺達は村へと足早に帰還した。

「ごしゅじんさま、ラフタリアお姉ちゃん達、おかえりー」
お？　フィーロが村に帰ってきてるな。フィロリアル形態でトコトコと俺の方へ駆けよってきた。
「あ、盾の勇者。おかえり」
魔物に興味を持っている魔物好きの奴隷が俺を出迎える。
珍しいな。
「盾の勇者、外から来た人がしつこくて困ってる」
「は？」
魔物好きの奴隷の後にエクレールと錬がやってきた。
エクレールも少々困った様子だ。何があったんだ？
「まてまて、そんなに焦らなくても見張りはしている」
「でも何回か逃げられそうになった！」
「どうしたんだ？」
俺は錬の方に視線を向ける。
「俺もよくわからないが、尚文に来客みたいだぞ」
「……錬が応対くらいしてもいいだろ」
「まあ……そうなんだがな」

錬も曖昧な態度だな……。
「ちょっと変わり者の来客なんだ。早くイワタニ殿に面会したいとな」
「はぁ……一体誰なんだ？」
「フォーブレイで色々と問題を起こしたといわれる錬金術師だ」
……はい？　フォーブレイって四聖勇者を称えている大国の名前だったはず。
そこから錬金術師が来た？
「私も先日女王から聞いたのだが、フォーブレイで異端と判断されて追放された錬金術師がメルロマルクにやってきたそうだ」
どういう人物だよ。
「そこまで怪しげな奴は問答無用で追い出せ！」
「女王の話では毒も上手く使えば薬になる、とか。だからまずは尚文に聞いておくべきだと思ってな」
ふむ、一理あるか。
「なんでもイワタニ殿が管理している魔物を見て、ぜひとも調べさせてくれと――」
「ほー……これが噂の神鳥ね」
いつの間にか見知らぬ女がフィーロの体をべたべたと触っていた。
「な、なになに!?」
「うわ！」
「い、一体いつの間に!?　気付きませんでしたよ！」

「なんという早業……血迷ったお兄様の接近術に匹敵しますわ」
「ご、ごしゅじんさまー！」
フィーロが悲鳴を上げる。元康の時と似た反応だ。
「お、人語を解するのね。伝承で聞いたことのあるフィロリアルの女王種という変異体とはこの子のことね」
髪の色はプラチナブロンド、ロングヘアーで肌は褐色。見た感じ人間。年齢は二十代半ばっぽい。出るところは出ていて、引っこむところは引っこんでいる、俺の世界基準でいうところのお色気お姉さんが白衣を着ている感じだ。だが、姉キャラだとサディナと被るぞ。
「羽毛が深いわね。内臓はどうなっているのかしら？」
錬金術師？が、フィーロの口を無理やりガバッと開いて舌を掴む。抵抗するフィーロだけど容易くあしらわれているというか、赤子の手を捻るように押さえつけられた。
「むー！」
で、口の奥にまで頭を入れるが……バサバサと暴れるフィーロはペッと錬金術師？を、吐く。
「暴れちゃ診れないわ。大人しくして」
突き飛ばされる直前、どこからともなく注射器を取り出してフィーロに投げる。
フィーロは避けきれずにプスッと口に注射器が刺さった。
「ふにゃ……」
ドサッとフィーロがへたり込む。
「ち、力が入らない……」

「お、おい……」
「ちょっと待ってなさいよ。今調べてる最中なんだから」
「いや、勝手なことをされると持ち主の俺が困るんだが」
「あら……？」
錬金術師？は俺の言葉を聞いてフィーロから関心を移す。
「貴方が盾の勇者様かしら？」
「そ、そうだが……お前は？」
「私？　私はラトティル＝アンスレイア。親しい人はラトと呼ぶわね」
「そ、そうか。俺の名前は岩谷尚文、尚文が名前だ」
「ナオフミさんね。よろしく」
ぐったりしているフィーロに視線を釘付けのままラトは答える。
「で、ちょっとこの子調べさせてもらっていい？」
「ご、ごしゅじんさま！　やー！」
ふむ……ここで了承したらフィーロの謎が解明されそうな気がするけど、その代償にフィーロが大変なことになりそうな気もする。
「はぁ……とりあえずダメだ」
「あら残念」
フィーロが立ち直ったのかゆっくりと起き上がる。
「あらら、これはもっと強力な薬を使わないと調べるのは無理そうね」



「やー！　助けてメルちゃーん！」
フィーロが走り去っていった。ありゃあしばらく帰ってこないな。
「で、お前が俺に面会したがっていた奴か。何の用だ？」
「そうよ。色々と見せてもらったわ。とある村の植物とか、この村にいる魔物とかね」
「はぁ……」
「で、凄く興味を惹かれたわ。ぜひ、色々と弄らせてほしいのよ」
「弄らせてと言われてもな……」
こいつは一体何をするつもりなんだ？
バイオプラントのことまで知っているみたいだし、裏は取られていると見ていいだろう。
「フォーブレイで色々と問題を起こした錬金術師だったか？」
「問題？　違うわ。あいつ等が自分の無能を棚に上げて、私の研究を理解できなかっただけよ」
狂気の研究者キャラってこういう奴のことをいうんだよな。
「あいつ等、私の研究をこともあろうに神をも恐れぬ所業とかいって追放処分にしたのよ。その神って四聖勇者と七星勇者でしょ？」
「で、その四聖勇者に自分を認めてもらおうとやってきたと？」
俺は錬を見るが、錬は首を振る。
「違うわ」
「……じゃあなんでここに来た」
「当初は霊亀を調べに来たのよ。けど、私の興味は既に移りつつあるわ」

なんか情熱的な態度でラトは俺の手を握ろうと手を伸ばしてきた。
俺はその手をかわして答える。
「触るな。俺はお前みたいな女は嫌いだ」
「あっそ。じゃあ触らないから魔物達を弄らせてほしいわ」
魔物共ね……そこまで増やしちゃいないはずなんだがな。
「どれも見たことのない成長をしているのよ。ぜひとも観察したいところなの」
確かに、管理している魔物共は揃って成長がおかしくなってきている。
平均Lvは25、普通の魔物よりも大きいそうだ。
奴隷達と一緒にいる三匹の芋虫の魔物、キャタピランドが、増えすぎたバイオプラントの幹をなぎ倒している。
……あれ？　三匹？　俺が購入したキャタピランドは二匹だぞ？
一匹、二匹、三匹!?　何度数えても一匹多い！
おかしいぞ！　朝は二匹だった！
「誰だ！　勝手にキャタピランドを増やした奴は！」
「やば！」
先ほどまで俺達と一緒にいた奴隷がハッとしたようにキャタピランドの一匹を隠す。
「もうおせえよ！」
お前も犯人一味か。しかも隠したやつが一番大きい。
朝にはいなかったということは、どこかに隠して育てていたと考えるのが妥当だな。

拡張して森みたいになりつつあるバイオプラントの畑辺りにでも隠していたのだろうか？
しかもステータス画面を確認できるってことは、俺が管理していることになっているじゃないか！
魔物好きの奴隷が全身を使って隠そうとするが隠れていない。後ろにはバイオプラント。
どこかで見たような光景だ。なんとなくセピア色に見えるのはきっと俺の幻想だな。
「な、なんか古いアニメで見たような光景が……」
ああ、錬の世界にもあるのか。ってそこはいいんだよ。
「いないわ！　そんな子いないわ」
「でけえんだよ！　隠しきれてねえよ！」
なにが、いないわだ。どこの谷の少女だお前は！
後ろのキャタピランド、他のやつよりもでかくて、あの蟲みたいだよ！
「ほら、反省！」
俺が指示すると奴隷共が俯いた。するとなぜかアトラが前に出た。
なんでお前が前に出るんだよ。
「では罰ですわ。一人一人、尚文様の命できつい罰があるのですわ。まずは――」
「あのな……アトラ、お前は黙っていろよ。俺が事情を聞く」
アトラはコイツ等に何をさせようとしたのか？
なんか俺が考えているよりも酷い罰とか与えそう。
「さて、経緯を聞こうか」

「あのな……別に兄ちゃんを怒らせようとしたわけじゃないんだ」
キールが前に出て、魔物好きの奴隷を庇う。
「というか……どうやって俺の登録を掻い潜った！」
「奴隷を売ってくれる人が内緒でしてくれた」
「奴隷商ー！」
いつの間にやりやがった！
「なんで奴隷商が……」
「みんなで最初に見つけた卵だったの！」
「は？」
話を聞くとこうだ。
みんなでＬｖ上げをしに狩りに行ったところ、魔物の巣があって、そこから卵を拝借したそうだ。
で、村に持ち帰ったのはいいが、どうやって育てようかという話になった。
「ラフタリアは知っていたのか？」
「知りません！」
「ラフタリアちゃんに話したら兄ちゃんに報告するだろ」
「当然です！　キールくん、何やってるんですか……」
キールの話は続く……魔物の親として魔物紋を登録していない卵を孵化させるのは危険だと、さすがにみんな知っていたからどうするか悩んでいると、ちょうど奴隷商がやってきた。
それで、行商中に俺から小遣いとしてもらった小銭を集めて奴隷商に登録を頼んだそうだ。

すると奴隷商の奴、この中の者が登録するよりも俺の管轄にした方が丈夫で優秀に育つと囁き、結果……こうなった。

うん。意図的に大きくなりすぎないようにLv調整させたキャタピランドのはずなのに、このキャタピランドはでかい。他の個体の一・五倍だ。どうしようか。

「殺さないでー！」

「そこの谷っぽい奴！　うるさいだまれ！」

「谷ってなんだよ兄ちゃん！」

「あのな、多分、尚文の世界にある物語で似たような行動をしている人物がいるんだ」

錬が俺の突っ込みを冷静に解説している。まあ、説明するのが面倒だったからいいか。

ああもう……こいつ等勝手なことやりやがって。

谷の姫っぽい台詞を連呼する奴隷がヒシッとキャタピランドを庇う。

「あのな、勝手なことされるとみんなはもとより俺が困るの！　どうしても育てたい場合はちゃんと報告しろ！」

元々奴隷商に依頼している分もあるし、二度手間になりかねない。

「あと、ちゃんと面倒見るんだぞ。他の奴に任せているのを見たら、速攻で売るからな」

「う、うん！」

まったく……次から次へと問題を起こしやがって。

「尚文、保父みたいだな」

「なんだと!?」

錬の野郎、とんでもないことを言い放ちやがった！
俺が保父!?　誤解もいいところだ！
錬を思い切り睨んで詰問しようとしたところでキールが騒ぐ。
「ほら言っただろ！　兄ちゃんは許してくれるって」
「え、でもキールちゃんが、盾の兄ちゃんにバレたら売られるって言ってたよ。金の亡者だから絶対売る、だから内緒にしないとダメだって」
「俺をちゃん付けで呼ぶな！」
「お前等……」
どいつもこいつも……待て、コイツ等『最初に見つけた卵』って言わなかったか？
「卵はコイツだけなのか？」
「ううん」
「ううん!?」
奴隷共が首を横に振る。
魔物の巣を見つけるのが上手いのか、みんなが寝ている奴隷用の家の床下から魔物の卵が出るわ出るわ。
「お金が貯まったら奴隷商が加工してくれるんだ」
「多いな……勝手に孵化したらどうするつもりなんだ！」
それだけで大災害だぞ。いや、生まれたばかりの魔物なんて駆除は簡単か。
「そうだけど……」

というか……野生の卵ってあるんだな。

使わないのは料理の材料とかにするのも手だな。言ったら怒られそうだけど。

「全部キャタピランドか？」

「さあ？　いろんな所から拾ってきたからわからない」

そこでラトが俺の肩にポンと手を乗せる。

「……なんだ？　こっちは忙しいんだ。話は後に……」

「私がタダで鑑定して管理してあげるから、ここで研究させてくれない？」

む……タダとは俺の損得勘定を刺激するいい台詞だな。

だが、タダより高いものはないともいうぞ。どうしたものか。

「ダメ！」

魔物好き奴隷改め、谷子が勝手に拒否する。

コイツは魔物のことになると妙に突っかかってくるみたいだな。

「まてまて……少し考えさせてくれ」

場合によっては抱き込むのもいい手だ。魔物の専門家だからな。使い道は沢山ある。

少々期待しすぎかもしれないが、錬金術師ってくらいだし俺の代わりにバイオプラントや魔物共の改造を任せられるかもしれない。

とはいえ、タイミングが良すぎるような気もするが……。

「お前等、共謀して演技とかしてないよな？　俺の了承を得るために」

「してねえよ！」

「尚文、できすぎた状況だと俺も思うが、違うんじゃないか？」
ふむ……できすぎた状況だが、文句を言っても変わらないか。なら別のアプローチを図る。
「ラト、お前の目的はなんだ？　返答しだいでは考えてやってもいい」
「私の目的？　強い魔物を創造することよ」
「ほう……」
強い魔物を創造する、か。極めてシンプルな目的だな。
ゲームなんかでは合成や配合といったシステムが出てくるから、理解できないわけじゃない。
まあ実際の生物でそれをやるとなるとフォーブレイの連中と同じく、反感が生じるんだろう。
「そのためには魔物を分析し、様々な錬金術や魔術を組み合わせる必要があるの。なのにあいつ等、神が絶対に許しはしない悪魔の研究だとかいって研究所を破壊するわ、研究対象を殺すわで大変だったわ」
「えっと……つまり、お前は錬金術を使って魔物を強くする研究をしていた魔物使いだと思えばいいのか？」
「……概ね間違っていないわ」
む、否定されるのを前提に言ったのに魔物使いの扱いでいいとか。
狂気的と思ったが、客観的視点も持っているようだな。そこに目的が絡むと暴走するタイプか。
「基本的常識から聞いていいか？　エクレール、お前にも聞きたい」
「ん？　私もか？」
警戒していたエクレールが不思議そうに言った。

「コイツの研究ってヤバいか？」
「私個人でいうのなら詳しくはわからない。だが、フィーロ殿を見ている限りでは魔物も戦力とカウントすべきであると思う」
素直な返答ではあるな。だが答えになってないぞ。
公に認められないものである可能性が高いが……どうしたものか。
「ラト、お前の研究とやらは霊亀の複製体みたいなものを作って戦力にしようとかそういうものか？」
「確かに考えつきそうな発想よね。盾の勇者……貴族としての地位はなんだったかしら？」
「イワタニ殿か？　伯爵だ」
「じゃあ伯爵、伯爵の発想は確かに面白いとは思うわ。それも一考かしら？」
「でだ。お前も噂で俺達が別の異世界へ行ったという話を耳にしたんじゃないか？」
「そうね。敵を追いかけて見事倒して帰ってきたと聞いたわ」
「その異世界で、霊亀に匹敵する生き物の複製品を作っていた錬金術師がいたんだ」
だからそんな研究を、俺達の世界でしようとする奴がいたら信用できない。
だから誘導してみる。頷いたらアウトだ。
「……なんだ。別の誰かがやった研究なんて興味ないわ」
ラトは自分の髪を梳きながら本心からのように言い放つ。
「興味深くはあったけどね。誰かがやったことがあるなら、参考にする程度ね」
ふむ、頭がおかしい奴かと思ったが信念はあるみたいだ。

誰かの物真似をする気はないと。

「俺はよくわからないんだが？　ゲームだった頃のモンスターテイミングみたいなものか？」

錬がゲーム知識を参考に俺とラトに聞いてくる。

「私の目的を一つ挙げるならフィロリアルね」

普通のフィロリアルってそこまで強くはないと思うんだが……フィトリアのような存在のことを言っているのかもしれない。

アイツは化け物並みに強いからな。

霊亀を相手にした時も水際で防衛したのはアイツだ。伝説と言われていたが、あの件で存在が証明されたな。

「私独自で調べた話なのだけど、勇者が作り出したという説があるわ。かのドラゴンと双璧を成すほどの能力を備えた神たる鳥。私はあの魔物のように後の世にも称えられる魔物を作りたい。人々に力を貸す生き物をね」

……なるほど、つまり伝承にある魔物を自身が作り出したいという目的があるわけだ。

「フィロリアルは人の足として各地に生息している。私は、人々の役に立つ魔物を作り出したいの」

「考えはわからなくもない」

魔物を育成するゲームとかを俺もやりこんでいた。

……実はラフタリアには内緒でラフちゃんを更に強力に改良できないかと悩んでいたところだったし。

ある程度泳がせて信用できるようなら相談してみるのも悪くない。

「俺は嘘をつく奴が嫌いなんだ。嘘がつけないように俺の奴隷になるのなら協力してやるが、それでもやりたいか？」
「奴隷って……尚文は相変わらずだな」
「それが確実だ」
「ええ、その程度でいいのなら喜んで人の尊厳を差し出すわ」
ものすごくアッサリとラトは了承した。
しかし……嫌な言い方だ。
だが……少しは信用できそうだ。
奴隷になれば、嘘をついた時に罰するのも簡単だからな。
「ふむ……」
つまりこいつを招き入れたら魔物関係を色々と強化できるようになるということか。
人材としては悪くない。
奴隷紋を刻めば、後々問題を起こしても無理やりコキ使うことも可能だ。
キール達が拾ってきた卵の管理以外にも、上手く運用できれば悪い手ではない。
ラトの方も研究がはかどるし、俺も波に備えて戦力が増える。
「俺は魔物をコキ使うがいいか？　まさしく奴隷のように。お前を含めてな」
「人間だって亜人だって奴隷はいるわよ。可哀想だからと優遇するのも差別よ」
む……優遇も差別。面白い考えだ。
そういえば俺の世界で海外の女性が男女平等を謳う際、優遇されるのも嫌うという話を聞いたこ

とがある。日本の都心に存在する女性専用車両などは、そういった本当の平等を望む人間には嫌われるそうだ。その考えに近いのかもしれない。

「一部の生き物だけを保護して、他の生き物を蔑ろにするって考えは嫌いよ」

「ほう……」

「私はね、魔物は波から生まれたなんて仮説を否定する。魔物だって勇者のように波とだって戦えるはずなんだもの！」

谷子がムッとラトを睨む。魔物好きといっても自分とはどこかが違うのがわかっているんだろうな。

「お前のやりたいことは理解した。魔物も大きな戦力、波で戦わせたいと」

「ええ！」

「じゃあ仮に──」

俺はバイオプラントの種をラトの前に出す。

「これは植物だが、改造しだいで魔物のようになる。だが、改良して役に立つ薬草を作るような行いはお前にとって、どうなんだ？」

「私の手にかかればその程度造作もないわ」

ふむ……コイツの考えは、俺がやりたいことと方向性が近いな。

「ナオフミ様？　まさかこの方を受け入れるんですか？」

ラフタリアはどうも懐疑的なようだ。

ま、胡散臭いのは確かだもんな。その胡散臭さと手段を選ばずに俺の信用を得ようとする行動力

は評価に値する。

「試験期間を設けて様子を見るということでいいだろう」

ちょうど、村には技術者が足りていない。

それにセインという前例がある。セインが良くてこいつはダメ、というのはおかしな話だ。

俺はラトと握手を交わした。

「これからよろしく頼むわ」

そこにエクレールが声を掛けてくる。

「すまない。話がまとまったのならぜひ見てほしいモノがある」

「なんだ？　まだあるのか？　もう話は終わったんじゃないのか？」

「あ、そうだ！　盾の勇者！　他にも問題があったの！」

更に谷子が俺達に向かって新たに何かを告げようとする。

またお前か。

「尚文の留守中に見つかったものがあってな」

まだあるのかよ……エクレールに連れられて俺は奴隷共を置いて村の外へやってきた。

ラトも首を傾げて付いてくる。谷子も……勝手に付いてくる。

三話　フィロリアルとドラゴン

で、村の外には木箱が山積みになっている。
なんだこれ？　昨日はこんなものなかったよな。
「まずは中を見てくれ」
俺は木箱を開けて中を確認する。
中には……それぞれ色々な武具と物資、そして魔物の卵が入っている。
「なんだ？　預けていた金で勝手に物を買ったのか？　それをここに置いていかれたとか？　もしくは錬が強奪していた資材か？」
ちょっと前まで盗賊王だったもんな。俺が錬の方に視線を向けると錬は首を振る。
「いや、こんなものを俺は調達した覚えはない」
ふむ……錬も心当たりがないと。
……元康か？　フィーロへのプレゼントとかのつもりで置いていったとか。
ありそう。
「これを読んでくれ」
「なに？」
俺は開いている木箱の蓋を見る。よく見たら周りの木箱全てに書かれているようだ。
なにやら凄くへたくそな文字で『盾の勇者様へ、恵まれない奴隷達にプレゼントしてください』と、でかでかと書かれている。
「なんだこれ？」
「一応、寄付の物資ということなのだろうな。武具の方はそれなりに高価なものが混じっている。

物資も珍しい薬草や鉱石、材木がかなりある」
「……一体誰だ？　こんな真似をしたのは」
「おそらくシルトヴェルトやシルドフリーデンの連中だろう。文字の癖やインクの質から間違いない」
「受け取っていいのか？」
「身元を特定するのは困難なものばかりだ。念には念を入れて銘まで潰されているし。仮に犯人を見つけても処罰するのが難しい」
奴隷狩りをシルトヴェルトに売り付けた辺りからその匂いはあった。
ゼルトブルの奴隷市場にも似たような奴がいたしな。
つまり、俺のご機嫌取りのための寄付か。見返りとか求められないよな。
「尚文様を困らせる輩は万死に値しますわ。即刻処刑に行きましょう」
「過激すぎるだろ。別に困るほどじゃねえよ」
知らん顔で受け取ればいい。
「面倒なものを置いてかれたものだ」
「そうだな。で、卵の方はなんなんだ？　ラト、わかるか？」
「ウサピルから変わり種まで色々とあるわね。あとは……」
おお、一目で見抜いたぞ。
「問題なのはこれね」
木箱の中に一回り大きな卵がある。

なんだろうか？　霊亀クラスの怪獣の卵とかか？
「なんだ？」
「飛竜の卵よ。ご丁寧に高くて強くて珍しいやつ」
なんともまあ……もらって困る品を寄越したもんだ。
「ドラゴンか。それはカッコいいな」
「うん！　あ――」
谷子(たにこ)が錬の言葉に同意しながらもアッと声を漏らして不機嫌そうに顔を逸(そ)らした。
なんだ？
だが、谷子はすぐに顔をほころばせる。
ラトは機嫌が悪いな。ドラゴン嫌いか？
「ドラゴンがこの村にいるって素敵！」
「ラトとは逆に谷子はドラゴンが好きなのか」
「谷子!?」
「また尚文様の素晴らしい名前の付け方ですわね。羨(うらや)ましいですわ」
アトラがなんかボケたことを言っているな。
無視しよう。というか黙らせていたのだが、また喋(しゃべ)り始めた。
谷子と呼ばれて谷子が俺の顔を見て言う。
「何よそれ」
「だってお前の名前知らないし」

「名前の由来はアニメかなにかだな」
「ああ、正解だ」
芋虫をいないと言い張るというところからの名付けだ。感謝してほしいところだな。
「本名を名乗らないときっと、ずっとナオフミ様の心の中で呼ばれますよ。早く名乗って！」
なんかラフタリアが焦って谷子に説明してる。
「……ウィンディア」
「ああそう。谷子でいいだろ？」
「イヤ！」
「さすがにそれはないだろ尚文。かわいそうじゃないか」
錬が呆れてるが、擁護する錬を谷子改めウィンディアが睨んでいる。
「しょうがないな……」
「みんなにちゃんと自己紹介させておかないと……ナオフミ様になんて呼ばれるかわかったものじゃありません」
「そんなに警戒することか？」
別にニックネームくらいいいと思うんだがなぁ。
「脱線したな。話を戻そう」
「気を付けてください……そうですね。どうしますか？」
ラフタリアが困ったように答える。
ドラゴンか……フィーロが嫌がりそうだな。

お中元とかじゃないんだし、受け取ったら余計な騒動に巻き込まれる可能性だってある。
高いものを贈られると余計な心配が増える。
だが、返すのも無理となると、捨てるのはもったいないし、素直に受け取るしかあるまい。
「とりあえず受け取っておこう。文句を言われてもシラを切る。ところで飛竜は魔物紋の登録とかどうなんだ？」
「高度魔物紋を施す必要があるわね。ご丁寧に儀式用の道具まで置いてあるようだし……伯爵が望むのならやるわよ……」
「頼む……ところで、なんでそんなにドラゴンを嫌うんだ？」
俺が尋ねるとラトは若干面倒そうに答える。
「上位のドラゴンってね、一度発情すると節操がないのよ」
「はい？」
「知らないの？　多くのドラゴンが生息する地域は汚染地域よ。色々な意味で危ないから」
「そうなのか？」
俺の知るドラゴンが生息していた地域って……錬が倒した東の村と盗賊退治の時に行った山奥だけだ。
あそこはドラゴンの死体が病原菌をバラまいていたな。
汚染地域といわれれば納得がいく。
「ドラゴンはね、節操がないの。だからその地域は簡単にドラゴンが混ざった生物が増えるのよ」
「結構、やばそうな話だな」

ファンタジーのゲームとかだと、ドラゴンハーフとかドラゴンが混ざった亜種とか出てくるけど、実際は困ったことなのか？

「まあ、縄張りがあってそこからは出てこないけど、生態系が簡単に狂うから私は嫌い。飛竜もぶっちゃけ、弱い魔物との混血だし」

ふむ……日本でいうところの外来種による生態系への侵食みたいなものか。

湖にブラックバスを放流した所為で日本の固有種が絶滅寸前になるってやつと同じような問題があるんだろう。他にも交雑による固有種の絶滅や駆逐などの問題か。

「厄介なのは、竜帝を名乗る純血種ね。あれは本当に種族選ばないし、人間だって犯そうとするのよ」

厄介な生物だな。

ん？　ウィンディアがムッとなっている。

「品はあるもん！」

なぜお前がドラゴンを語る。というかコイツ、魔物のことになるとうるさいな。

「亜人種には既に種として確立しちゃったのもいるのよ。アオタツ種とか有名ね」

アオタツ……青、辰……は竜にも変換できるから……青龍か？

ハクコで白虎なのだからありえなくはない。きっとどこかの勇者が名付けたんだろう。

「ま、純血種は発情しなきゃ品もあるし大人しいけどね」

「で、この卵はそのドラゴンだから嫌いだと？」

「まあね。ドラゴン用の高度魔物紋には繁殖行為を抑制する命令があるから絶対にチェックを入れ

ておきなさいよ。じゃなきゃこの村の魔物は汚染されるわ」

なんだかなぁ。

狩人なゲームで夫婦のドラゴンを狩りまくった俺からすると、そこまで繁殖する生態を持っていて、なんで人間や亜人を滅ぼせないのか不思議だ。

「そんな真似は竜帝様が許さないもん！」

ウィンディアが怒鳴る。

竜帝ね。フィトリアをはじめ、いろんなところで聞く名前だ。

絆の世界でも聞いた名前だな。

「はいはい。伝承の竜の王様ね。フィロリアルの女王と争ったって話の」

「別の異世界でも聞いたが、こっちにもあるのか」

「あくまで伝説よ。まあ、どっちも実在が怪しまれる……ああ、霊亀の進軍を止めたんだっけ？」

つまり、伝承にはドラゴンが人間や亜人の生活圏を脅かすと、フィロリアルの女王がドラゴンを殺しに来るとかそんな話があるのだろう。

「しかし……そんな生態を持っているのに俺はほとんど会ったことがないな。せいぜいタイラントドラゴンレックスか？」

「アレは凄かったですね。他にコロシアムで一回戦いましたよ？」

ああ、秒殺したから覚えてなかった。

「ドラゴンがいるのは基本的に人の入らない辺境よ。伯爵は行ったことあるの？」

俺が行ったことがあるのは行商用の道だけ……そういや山とか洞窟とかほとんど行ったことがな

い。

錬を捕まえる少し前の狩りで行ったくらいだな。

確かにあの時はドラゴン混じりの魔物と戦った。

「錬は……あるよな」

「ああ……ゲーム知識で倒して……とんでもない被害を出してしまった。どう償えばいいのか……」

本気で反省しているのか錬のテンションが下がった。責任感は無駄にある奴だもんな。

「世界を救うために真摯にがんばればいいだろ」

「……わかってるが、それでも俺は……」

「お前が死ぬことで償えるわけじゃないことを知れよ？」

四聖勇者が死ぬと波が起きた時に俺への負担が大きくなる。

フィトリアからもそう聞いているし、絆の世界でもある程度わかったことだな。

錬は死なせるわけにいかないんだ。

「……」

ウィンディアは錬のことを睨みっぱなしだ。

「まあ縄張りがあるし、そこから出ないから狙ってそこに行かないと会えないわね」

「そうか。とはいえ、使えるものは使う主義だから、一応孵化して育てるか」

「復興が進むごとに、どんどん私の知る村から遠ざかっているような気がします！」

魔物と植物の世話……牧場とか連想していたらラトが牧場の管理人にしか見えなくなってきた。

ついでに牧場管理をしてくれるとなると……バイオプラントですぐに収穫できる植物……魔物で何か収益を出せば……完全に俺の知るのどかな牧場ゲームだぞ。

「竜の育成って大変なんだな。竜騎士の苦労がわかる」

「ああ、霊亀の時にもいたな、そういう連中。あんまり強くなかったぞ」

霊亀の使い魔の攻撃を受けて悲鳴を上げながら墜落していった光景が思い出される。

「伯爵が育てるとどうなるかわからないわよ。フィロリアルの例もあるし」

「む……そうだな気を付けよう」

こうして飛竜の卵を孵化させることになった。

とはいえ、儀式が終わってから孵化まで、少し時間が掛かるそうだ。

仕上げは俺がしなくてはいけないらしい。ラトが不機嫌そうに仕事をしてくれている。

が――。

「なんで卵を俺が背負わねばならない！」

なぜか飛竜の卵を俺が背負って温めることになった。

「錬でもいいだろ！」

そう言って錬を睨む。

「いや……俺が触ったら腐りそうだし」

そういや錬には呪いがあったな。忘れてたわけじゃないが、カーススキルの代償として錬は触れた物を劣化させる呪いに掛かっている。そのためむやみやたら触らないようにしている。

「ダメ！　剣の勇者は絶対にダメ！　それなら盾の勇者がやって！」

ウィンディアが錬にだけはさせないでと頼みこんできた。

どうしてそんなにも錬に敵愾心を持っているのか聞きたくもあるが……しょうがないか。

これも高価なドラゴンを育成するための試練だと思うしかない。

「ラフちゃんはどこだ！」

「どうしてここでラフちゃんが出てくるんですか」

「ストレス解消に撫でまわす」

やはりこういう時にはラフちゃんが一番だろ。

なぜいない！　ちなみに、ラフちゃんは村の方で昼寝をしていた。

キールなんて俺を指差して爆笑しやがった。

「あはははは！　兄ちゃんおもしれー！」

「このやろ！　くそ！　やっぱヤメだ！　登録だけしとけばいいだろ！」

「そうしないと親の登録ができないの。こういう下地をちゃんとしておかないと命令無視をよくするようになるから我慢しなさい！」

ラトがうんざりした口調で答える。

飛竜とはこんなにも面倒なのか？　速攻で破棄したくなるぞ。

「そういうものなのか？」

「ええ！　研究者の私が言うんだから信じなさい」

「お前が言うから信じられないのだが……」

「なんですって？」

「はいはい。わかったよ」
ああもう、面倒くさい。
そこにフィーロの奴が……メルティを連れてきて帰ってきた。
すっげー嫌なタイミングだ。なんていうかクラスの嫌な奴に醜態を見られた感じ。
「アハハハハハハハハ！　ナオフミ、何それー」
「うるせえ、第二王女！」
「第二王女って呼ばないって約束したでしょ！」
「なら笑うな馬鹿！」
「馬鹿!?　わたしを馬鹿ですって!?」
「あのー……」
ラフタリアが言葉に困っている。変な同情が余計に痛い。
アトラが横から口を挟む。
「どんな姿なのかわかりませんが、尚文様を困らせるのなら破壊すべきですわ」
「買えば高いから却下だ！」
まったく……どうしてこうなったんだろうな。
「それで伯爵、このドラゴンの性別はどっちにする？」
「は？」
「卵を温める時の温度を調整することで、ある程度はできるのよ。伯爵の好みで性別が決められるわ」

そういや爬虫類って卵の温度で性別が決まる種類がいるんだったか。
ドラゴンも結局はその性質なわけか。
「伯爵なら……雌かしら？　フィロリアルの変種のように人化するかもしれないから」
「どういう基準だ？　キールの前例があるんだが、俺が女を囲っているとでも？」
徐にフィーロの方に目を向ける。
「なーに？」
俺が育てたことで特別な成長をした場合はどうするべきか？
仮に人化したとして、フィーロのような奴が出てくると、発情した場合、色々と厄介そうだな。
その場合のことを想定して俺が被害に遭わないためには。
「雄だな」
「なんでフィーロちゃんを見て決めたのかナオフミを問い詰めたいわね」
メルティが不快そうに言う。
決まってるだろ。俺が無事である可能性を高めるためだ。
「わかったわ。じゃあそうなるようにしておくから、安心して背負ってなさい。ま、二、三日背負ってれば孵化するから」
「ああ、はいはい。くっそ！　笑いものじゃねえか！」
「というわけでよろしく頼むわね。伯爵」
こうして村に錬金術師が住みつくことになったのだった。

イレギュラーがあったが、その後は時間に余裕があるなら狩りへと出かける。
まあ、今日は城下町の方に顔を出したりラトや贈り物等で、そこまで時間はなかった。
夕方頃になると晩飯を作り、村の連中に食わせる。
「兄ちゃん兄ちゃん！　おかわり！」
「余ったらな」
「余るわけねえだろ！　おかわり作ってくれよー！」
キールやその他の育ち盛りの食いしん坊共が満足する分の飯を作るのはかなりの肉体労働だ。
そんなこんなで晩飯を食べ終えた頃にはもう外は真っ暗だった。
「ああ、お兄様！　離してください」
「ダメだ」
「というわけでフォウル、アトラを任せたぞ。今日こそ逃がさずにな」
「あ、ああ……」
訓練を終えて帰ってきたフォウルにアトラを預ける。
「尚文様ー！　お兄様、絶対に逃げ切ってみせますわ！」
「絶対に逃がさん！」
この兄妹、仲が良いのか悪いのか……。
で、アトラ達とは入れ違いにラフちゃんを肩に乗せたサディナがやってくる。
「ナオフミちゃーん！　遊びに来たわよ」
「来たな酔いどれ女」

「サディナ姉さん。こんばんは」
「あらー、ラフタリアちゃんはそろそろ寝なきゃダメな時間よー」
「まあ、そうだな。子供は寝た方がいいかもしれないな」
「子供扱いしないでください！」
なんかこの問答を毎晩してるような気がする。
ラフタリアとサディナはこの後、寝るのを怖がる奴隷達が寝入るまで一緒にいてやる仕事が残っている。
「じゃあ子供達が寝入ったのを確認してから、ナオフミちゃんはお姉さんと楽しいことしましょう」
「するか！」
「いいじゃないのー」
とか言いながらチョッキを脱ごうとするサディナの肩をラフタリアが殺気を放ちながら掴む。
「サディナ姉さん？」
「あらあら」
くすくすと笑うサディナだが、本気でやめてくれないか？
「残念、でもいつでも相手してあげるわよー」
「さっさと寝ろ！」
まったく……そういやサディナの奴もその後も地味にLv上げをしていて、もう62まで上がっている。フィーロのパワーレベリングよりも効率よく戦っているんじゃないか？
同日にLvリセットしたフォウルなんてまだ39だぞ。

「さあ、サディナ姉さん。行きますよ」
「はーい。じゃあまたね。ナオフミちゃん」
「ああ、はいはい」
今朝も朝早くから魔物の世話に始まり、忙しい一日だったな。Ｌｖ上げに行く暇もありゃしない。
……悪魔に魂を売る選択かもしれないが、Ｌｖアップが恐ろしく早いサディナの狩りに同行すべきか悩むな。
錬は泳げないが、今度生贄に行かせてみるか？
なんて考えながら寝ようかと思っていたら、家の扉をノックする音が響く。
「尚文、いるか？」
ラフタリア達とはすれ違いに錬がやってきた。
「どうした？」
「ああ……昼間の一件の後、エクレールと村の奴隷達と出かけて暴食の呪いが何かわかった」
「ん？　わかったのか？」
暴食の呪いがなんなのか、パッとステータスを確認しても錬はよくわからなかった。
ありそうなものを何個か順番に試す……結果、究明に時間が掛かった。
「やっぱり暴食の呪いは……経験値が入らない、だ」
「うげ……」
確か経験値を犠牲にして放ったのだから、代償に経験値がしばらく入らないことくらいはありそうだとは思っていた。

「俺の近くで戦ったから、とかじゃないよな？」
「ああ」
ずいぶん前に絆と一緒に四聖勇者が共闘することによるペナルティを調べた。
勇者同士が近くにいることによって起こる、経験値が入らない現象の適応範囲は半径一キロ前後。
地味に狭くもあり、広くもある。この範囲で戦われると経験値が入らない。
その範囲外まで出て、錬が経験値を得ることができなかったというのなら、呪いの可能性が高いだろう。
まったく、成長に関する呪いにばかり侵されやがって、錬も大概だな。
本気で強くなるには少し呪いが解けないと。このままでは何もできないに等しいな。
「その報告に来たってことか」
「ああ、ついでに尚文には文字の採点をしてほしいんだが……」
今後のことを考えてこの世界の文字を錬に教えている。魔法書を読んで魔法を覚えてもらいたいからな。テストは日本語を理解している俺じゃないとできないのがネックか。
リーシア辺りに教えれば覚えるか？　アイツ、異世界言語を割と早く覚えたし。
「明日も早いからそろそろ寝る。テストの返答は明日でいいよな？」
「問題ない。尚文も疲れただろ？　ゆっくり休め」
「……はぁ」
いい加減、治療のためにカルミラ島にある呪いに効く温泉にでも誰かと行かせてみるか？
俺やラフタリア、フィーロはそういったものでは完治しない呪いらしいが、錬の場合は強化され

た呪いの武器じゃないから大丈夫だろう。
スケジュール調整でもしてエクレール辺りとカルミラ島に強制的に行かせよう。
活性化も終わってるだろうからポータルも使えるだろうし、使えなくてもラフタリアに水中神殿の位置を記録させて帰路の龍脈で近くまで行けるようにすればいいか。
「まあ、近々療養も兼ねてエクレールやババア達と行ってこい」
どうせ船で一日だ。エクレールやババアと一緒に行けば無駄もない。その修行とやらもな。
言語の習得や魔法の理解も一日程度やらなくても遅れるわけじゃない。
俺が教えているんだ、順調に行けば俺が覚えたよりも短い期間で覚えられる。
「わかった。尚文がそう言うなら、行く」
「強化法をちゃんと実践すれば戦えはするだろうしな」
今の錬は修行をしちゃあいるが、並行して俺が教えた強化法も実践してる。
呪いの反動も戦闘に直接関わるところじゃないし、仮に勇者の命を狙っているような連中が現れても負けはしない……だろう。念には念をでババアとかエクレールが護衛にいれば十分だ。
「後日行かせるから覚悟しておけ」
「じゃあな、尚文」
こうして錬が帰った後、俺はベッドに入って就寝した。
これが……俺の村での一日だ。
日ごとにやることは異なるが、大体こんな感じで忙しい一日を過ごしているな。
あー……そろそろＬｖ上げに行かないとな。背中に卵があってすごく寝づらい。

そんなふうに二日ほど経過した昼のこと。

「ナオフミ様」

ラフタリアが若干恨みがましい目を向けてくる。

俺もちょっとやりすぎたかなぁ、とは思う。

「大分上手くできているな」

「そうね。僅か二日でこれだけできるなんて、やっぱり私って天才だわ」

ラトと一緒にバイオプラントの改造を行った。

その成果には目を見張るものがあった。やはり専門家を引き入れたのは大きかったな。

なお、既にラトは俺の奴隷と化している。俺に嘘をついていないことをちゃんと確認した。

使った奴隷紋も高度なものだ。けして逃がしはしない。裏切りは死だ。

ラトへの警戒は怠らないが、今のところ研究に没頭していて、今の待遇で満足しているように見える。

本題はここからだ。

今回の研究で作りたかったのは簡易的な家になるバイオプラントだ。

新しく奴隷がやってくることを視野に入れて増築を行いたかった。

だからそんな面白植物が作れないかと考えたわけだ。

で、実験は成功。指示さえすれば家の形になる便利なバイオプラントが完成した。

その名もキャンピングプラント。

　色々とツッコミたい衝動に駆られるが、名前の通りの性能なんで否定しようがない。
　陽の光で光合成し、夜までに魔力を蓄え、夜になると花の部分に明かりを灯せるというオプション付きだ。
　奴隷共の適応力は高く、一見危なそうなこのキャンピングプラントで作られた家に簡単に住み着いた。
　長所は家が邪魔な場合、除草剤を撒けば枯れること。
　要するに非常に便利で簡易的な住環境が整ったのだ。
　で……村が緑の家で溢れ返ったのでラフタリアは俺を非難しているわけである。
「悪いな」
「何がですか？」
「お前の村が人外魔境化してきていることを怒っているんだろ？」
「まあ……それはしょうがありません……わかってはいますよ」
　こんなラフタリアをよそに、ラトの方は俺のバイオプラントの改造がいたく気に入ったらしい。
　画期的な方法だとか。
　画期的と言われても盾の能力で改造しているだけだがな。
　盾からの影響力も強いし、俺が大雑把に言う通りの比率で改造し、細かな調整をラトが行うというやり方だ。
　目下、依頼しているのは薬草を作り出せるバイオプラントの研究だ。
　薬を作れるバイオプラントでもよかったのだが、難しいと言われた。

もちろん、ここに来るまでには何回も失敗を繰り返している。
ちなみに試作品第一号は人食いハウスだった。
ラトが危険だから入るなと執拗に注意したにもかかわらず『わぁあああ』と目を輝かせたウィンディアとフィーロが勝手に入って食われたが、ラフタリア達と一緒にプラントを殲滅し、フィーロ達を救出して事なきを得た。
その時の村の連中の顔は微妙だったなぁ。
後はラトに魔物の卵の鑑定をしてもらった。
ラトは俺が管理する魔物は伸びがいいことにいち早く気付いて事情を聞いてきた。そして魔物使いの盾にある成長補正という技能について説明すると、これまた大興奮で盾をジロジロ観察していた。
「へー、勇者の育成する魔物は能力が高いなんて話を聞いてたけど、これが原因だったのね」
「おそらくな。というか他の勇者も同様の能力があるのか？」
錬がいるから試させたところ、同様の武器が出現したな。
「私の知る勇者とはそんな話をしたことがないわね」
「そうか」
仲が悪かったらしいからな。
話を聞く限り、フォーブレイの七星勇者は堅物みたいだ。
魔物改造とか、現在の常識から逸脱した研究、それこそラトが専攻する錬金術のようなものを嫌っているらしい。

詳しい話はラトが言いたがらないので、どんな人物なのかは聞いていない。
そもそも、話がしたいと呼びかけているんだからさっさと来いって感じだな。
さて、バイオプラントのバリエーションによる食料生産の研究も軌道に乗っている。
味も折り紙つきだし、後はラトに任せればバリエーションの作成も可能だろう。
魔物の育成も奴隷達にさせているし、近いうちに行商を本格化させられるだろう。
「私も研究所を簡単に建てられたし、いいこと尽くめよね。この種」
ラトの研究所……キャンピングプラントで建造された大きな建物だ。
ラトがどこからか大きな試験管を持ってきて、研究室に設置している。
ゴポゴポと、中に何かの魔物が浮かんでいるあの光景は、ＳＦの化け物を彷彿とさせる。
あれを見た時、迎え入れたのは間違いだったかと少し悩んだ。
ここ二日の出来事だけどな。余りにも早い変化だよな。
二日で研究所が建ったぞ……。
ちなみにウィンディアとラトは魔物に関してはライバルだ。
魔物を戦わせて強くさせるのが一番という考えのウィンディアと、魔物は改造してこそ強くなると主張するラトで意見がぶつかっている。が、双方、強くさせる方法を模索している関係故に憎みきれないといった感じで、一緒になにやら話し合っている。
ま、ウィンディアの学力が足りないから、ラトに遊ばれていることの方が多いようだ。
「じゃあ、飽きるまでバイオプラントの研究をさせてもらうわ。で、援助の目処が立ったら教えてほしいわね」

「ああ、俺も魔物自体の改造を行っていきたいからな」
俺にとってはどうしても配下の戦力が重要になるからな。必要なことだ。
霊亀との戦いを見ても味方の数は多いに越したことはない。更に言えば魔物が強ければなおいい。
パキ……パキ。
背中の方からそんな音がする。どうやら卵がそろそろ孵化するようだ。
「生命の胎動を感じますわ」
「ああ、アトラにはわかるのな」
俺は背負っていた卵を下ろして確認する。
「卵が孵るんですか？」
「みたいだ」
フィーロの時の卵とは違ってずいぶん大きい。
その卵にヒビが入って、徐々に中からドラゴンの雛が出てくる。
「ドラゴンって何を食べるんだ？」
「やはり肉ではありませんか？」
「あったっけな？」
村の倉庫に保存している燻製肉や干し肉が残っていればいいんだが……。
「種類によるけど、今回のは雑食よ」
それはなにより。
最近は採れ過ぎて行商の主力商品になってきているバイオプラントの実を餌に使える。

「キュアアア！」

ドラゴンの雛が卵から顔を出して鳴き出した。

魔物の孵化か。懐かしいな。フィーロもこんな感じで……いや、もっと元気だったか。

ドラゴンの雛の大きさは俺の頭くらい。フィーロと比べると明らかに大きいな。

「なんか変な体型をしているなぁ」

ひょうたんみたいなメタボな体型で、背中に申し訳程度の小さい羽が生えている。

尻尾は太い。角は二つで、まだ鱗は生えていないようだ。

抱き上げてみると、体温が高いのがわかる。

「キュア！」

パチパチと瞬きをして俺と視線が合う。

「キュアア！」

片手を上げて挨拶をするかのように声を出す。

ああ、そうだ。卵の殻を盾に吸わせておくか。俺はドラゴンの卵の殻を盾に吸わせる。

……バチ！

なんだ？　盾がスパークした。

絆の世界にいる時も似たような反応があった覚えがある。

確か魔竜の盾の時だな。あの時も同様の現象が発生した。

「ふふ……なんか、可愛らしいですね。フィーロが雛だった頃を思い出します」

ラフタリアがドラゴンの雛を指で突いている。

ドラゴンの方もラフタリアが突いた指を掴んで甘噛みしていた。
この生き物が性欲の権化になるのか？
「これがドラゴンなのですわね。凄く温かな生命の鼓動が感じられます」
アトラもドラゴンの雛には優しく相手をしているのな。
白虎とドラゴン……龍をイメージすると仲が悪そうに思える。
が、特にそういった問題はなさそうだ。
「じゃあとりあえず、診察するわよ」
ラトはまじまじとドラゴンの雛を観察し、軽く触診した。
「うん。特に問題はないほど健康ね。あと、性別は雄みたいね。上手くいったわね」
「それは良かった」
変に育ててフィーロみたいに人化とかされた場合でも雄なら問題ない。
まあ人化される時点で問題あるんだけどさ。
ラトが放すとドラゴンの雛は俺に飛びついて登り始める。なんだこいつは。
「育て方としては特に問題はないかしら？」
「そうか」
「できれば早いうちに狩りに行くことを勧めるわ。成長の始まったドラゴンの食欲は恐ろしいものがあるから」
「……それを俺に言うのか？」
「ああ、伯爵のところはドラゴンの食欲に勝るとも劣らない子達ばっかりだものねー」

一本取られたと言いながらラトは頷いた。勝手に完結するなよ。むなしくなるだろ。

「このドラゴンはどんな種類なんだ？」

「ウィル種よ。ドラゴンの中でも忠義を重んじる忠誠心の高い種類。純血種とティレラとの間にできる混合種ね」

「ティレラ？」

「ティレラはトカゲ目の大きな魔物よ。飛べないけど乗り物として優秀。ま、珍しいけどね」

「へー……」

知らないな。会ったこともない。そもそもドラゴン自体そう何種類も見たことがないがな。

「メルロマルクには生息していない魔物だから伯爵は知らないかもね。この辺りじゃ飼っている人もいないし」

「そうなのか？」

「どちらかというとフォーブレイやシルドフリーデン、シルトヴェルトで見る魔物よ」

「へー……」

「この子があの卵から孵ったドラゴン!?」

ウィンディアがやってきて興奮した様子で孵ったドラゴンに近寄る。

「キュア！」

人見知りせずドラゴンの雛は愛嬌を振りまく。

「とりあえず後でLv上げに行かせる方向でいいか」

「うん！　だけどフィーロちゃんは嫌がると思う」

ウィンディアがドラゴンの雛をあやしながら、俺の指示に頷く。
なんだかんだで言われたことはしっかりやる。
魔物を殺すことも可哀想だからダメ、とか言わないし。むしろ弱肉強食！　みたいに狩りには乗り気だ。コイツは一体何がしたいんだろうな。
しかし、フィーロは嫌がるか。まあ種族的に宿敵らしいからしょうがないか。
「あなたの名前はガエリオンよー」
「勝手に名付けるな！」
「ナオフミ様、村の子達で決めたみたいですよ？」
「そうですわね。みんなで話し合っていたのを聞きましたわ」
「そうなのか？　それなら……まあ、いいか」
名前を考えるの面倒臭いしな。たぶん、俺だとドランとかその程度の名前になっただろうし。
そう考えるとガエリオンという名前は……まだマシか。
「じゃあみんなに見せてくるー」
そんなこんなでウィンディアはガエリオンの面倒を見ながら、村の連中と一緒にLv上げに出かけた。
ささっと育って戦力になってくれればいい。
「ラフちゃんが恋しいな」
ここ二日ほど、フィーロの頭にラフちゃんがよく乗っかっている。
どうもフィーロの頭の上が気に入ったようで、呼んでも来ないのが若干寂しい。



「ああ、そのことで聞きたかったのよね。あの魔物はどこで見つけたのかしら？」
ラトの問いに俺はラフタリアに目を向ける。
ものすごく渋い顔をされた。
どうしたものかな？　ラフちゃんのことを詳しく説明したらそれはそれで面倒そうだが……。
とはいえラフちゃんは俺のお気に入りだ。役に立ってくれるように、もっと強く改良していきたい。だから説明するとしよう。
「ラフちゃんは異世界で俺が作り出した式神……この世界でいうところの使い魔だ。ラフタリアの毛髪を材料に生み出された」
「ナオフミ様、考えてそれですか！」
もちろん、そうだ。
「盾の技能で色々と能力強化ができるところはバイオプラントと変わらないな。だが、強化には色々と素材や力を消費するみたいでな」
なんだかんだでラフちゃんの能力は常に俺が弄（いじ）っている。
強化には素材が必要で、少しずつ、着実に育成しているのだ。
原理でいえば、この盾に近い性質がある。
「あんな使い魔がいるのね。新種の魔物かと思ったわ」
「新種の魔物として定着させるのが目的だ」
「そんな話は初耳ですよ！　ナオフミ様、どういうことですか！」
あ、しまった。ラフタリアに俺の野望がばれた。

「そんなことを企んでいたんですね」
「ふん。ラフタリア、これだけは譲れない。俺はラフちゃんをあのままで終わらせるつもりはない」
「どうしてそんなに熱意があるのかがわかりません」
どんだけ信頼し合っていたからといって、お互いわからないことも起こるだろう。
だが、それもいいんじゃないかと思う。
ラフタリアに似てるからだけじゃなく、ラフちゃんのノリの良さは気に入ってるしな。
「ラフタリアさん、何を嫌がっているのですか？　尚文様が望んでいるのなら受け入れるのが臣下の役目ですわ」
「受け入れちゃダメな問題だからですよ！　アトラさんもよく考えてください。自分の毛髪で魔物が作られるんですよ？」
「尚文様が可愛がってくださるなら喜んで差し出しますわ」
アトラの毛髪で式神、使い魔を作る？　小さな白虎みたいのがイメージされる。
実在したとして、可愛いとは思うが、ラフちゃんほどかと言われたら微妙だな。
「ナオフミ様、顔に出てます。なんでラフちゃんにこだわるのかわかりません」
む……ラフタリアに考えを読まれてしまった。
「尚文様の考えを察することができませんでしたわ。ですが今度は負けませんわ」
何を張りあっているんだか。
アトラは俺の顔色を読みたいのか？　お前は目が見えないだろ。
「なら伯爵、能力項目の変異性とかを上げてみたらいいんじゃないかしら？」

「バイオプラントの例からそれだけは避けていたんだが……」
「変異は何も悪いことしか起こらないわけじゃないでしょ？　伯爵が信頼しているなら少しくらいやってみるのも手よ？」
ふむ……一理あるな。
「フィロリアルは勇者が作り出したって伝承もあるくらいだし、もしかしたら伯爵のお気に入りの子もいずれ第二のフィロリアルになれるのかもしれないわ」
素晴らしい発想だ。ラトの目的であるフィロリアルのような便利な魔物の創造とも関わっている。まさに一石二鳥。
俺はラフちゃんを強くできる。ラトは第二のフィロリアルの創造ができる。
よし、これからラフちゃんの変異性を少しだけ上げていこう。
使い魔から魔物へと成長させるんだ。
「ナオフミ様、やめてください」
「たとえラフタリアであろうとも、ラフちゃんの将来を閉ざす選択をさせはしないぞ？」
「ああもう……」
俺の強い意志が伝わったのかラフタリアは強くは言ってこない。
「とまあ……この話はここまでにして、今日は武器屋の親父のところへ行かないとな」
話題を逸らして逃げるか。ちょうど頼んでいた刀の作成が終わった頃だろう。
「……わかりました。行きましょう」
ここで引いてくれるのがラフタリアの良いところだな。

そんなわけで俺達はラトと別れてポータルで武器屋の親父のところへと出発したのだった。

四話　スターダストブレイド

「来たなアンちゃん」
武器屋に行くと親父が待っていたとばかりに出迎えてくれる。
相変わらず盛況のようで、品揃えが寂しくなっているように見えるのは気のせいじゃないだろう。
そういや二日前に来た物資のお陰で装備の類はある程度充実してしまったんだよなぁ……。
ま、断る必要はないか。最悪、打ち直してもらえばいい。
「素材が足りないとかあったら言ってくれよ？　村の連中に指示すりゃ力になるから」
「アンちゃんのところにいるのはトーリィの親戚だろ？　悪いじゃねえか」
「なんだかんだで細かい作業ばかり命じてるからな。穴掘りがストレス解消になるかもしれん」
イミアに始まりルーモ種の連中というのは大人しい奴が多いので、溜め込んでしまうタイプと見ている。どこかでストレスの捌け口が必要だ。土を掘る時には楽しげに見えるから、採掘はやりがいのある仕事だと思ってくれる可能性は高い。
「女王に鉱山を手配してもらえば良い仕事をしてくれるだろ」
「勇者様の想いやり、感謝いたします」
イミアの叔父が頭を下げる。ああ、やっぱり鉱山はストレス解消になるのな。

きっと楽しい催しとかそんな認識なんだろう。
「そうか？　まあ、アンちゃんとトーリィがいいっていうなら頼むかもしれねえな」
「物資としてはそろそろ発注した方がいいと思う」
やっぱりそうか。じゃあ後で手筈を整えて行かせるとしよう。
「では指示を出しておく。後で届けさせるとしよう」
フィーロかその配下一号に親父のところへ届けるように命じておけばいい。
「悪いな、アンちゃん。じゃあ後で必要な鉱石一覧を書いて渡すぜ」
「こっちも色々と頼んでいるからな、礼には及ばない」
「そうだったな。物はもうできてるぜ」
と言って親父は店の奥から刀を一本、持ってきた。
かなり武骨なデザインの刀だ。
刃の根元……鍔の辺りはまだ隕石の状態にしか見えない作りをしている。
あえてこういう形にしているのだろうか？
俺がどこを見ているのか察したのか親父は口を開く。
「ここは隕鉄の力を刀身に導くための部位なんだぜ？　ちょっと癖が強いのはしょうがねえよ」
「ああ、やっぱりそうなのか」
できそこないの刀にしか見えないな。
「久々に作ってみたが、やっぱまだ師匠には追いつけてねえな」
「なかなかの名刀に思えますが……」

ラフタリアが刀の刀身を凝視しながら呟く。
どうなんだろうな？　俺も目利きで刀を確認する。

隕鉄の刀　品質　高品質

盾の時よりも質が向上している。
「師匠だったらもっとすげぇのを作れるだろうよ」
ふむ……とはいっても、俺は特に不自由を感じないからあまり同意できないな。
「ないものねだりをする気はないし、たとえそいつがいても俺は親父に頼んだ」
「アンちゃん……そうだな、色々と作っていかねえとな」
「自分も負けずに作っていきましょうかね。切り口はここにありそうです」
「お？　負けねえぞ」
と、イミアの叔父が親父と睨み合いを始める。何か背景に炎が見えた気がした。
仲は良いが、ライバルでもあるということだな。
「アトラはこの刀がわかるか？」
目の見えないアトラは、気とかいう要素で人の気配とかはわかるようだが、それ以外のものも認識しているのか気になっていたので聞いてみる。
「この刃物のことですね。刃物から力が出ているのを感じます。普通の武具とは少々異なると思いますわ」

どうやらある程度はわかるようだ。
まあ、村の中とかをホイホイ歩きまわっているんだから、そうだろうと思っていたけどさ。

「とても良い品だと思います。ラフタリアさんにはもったいないですわ」

「あなたって人は……」

ラフタリアはそれ以上の問答をしたら面倒になるのを察して、アトラの相手をしないことにしたようだ。

「じゃあラフタリアに持たせてもらうとしよう」

「おうよ！　ただ、店で技を撃つんじゃねえぞ」

「わかってる」

店の中で流星盾を展開した時のことだ。親父に見せてやりたかったんだが、迷惑を掛けてしまった。その時のことを気にしてるんだろう。

で、ラフタリアは刀を手に持ってコピーを作動させる。

「あ、はい。コピーができました」

「そうかそうか。スキルはあるか？」

「はい。えっとスキルは——」

おそらく流星刀とかだろう。剣の勇者である錬が隕鉄の剣をコピーして出たスキルが流星剣らしいし、俺同様他の勇者共も似たように持っている武器名に流星を追加したものだったからな。

「スターダストブレイドだそうです」

「なに？」

流星じゃなくてスターダスト？　直訳すると星屑で少し意味合いが異なるんだが……。
まあ、流星も地面に落ちれば星屑か？　元が隕鉄だから似た部分がないわけじゃない。
それよりもカタカナになってるぞ。
考えてみればラフタリアの持っている眷属器は絆の方の世界のものだしな。
規格が違って、覚えるスキルも異なるということなんだろうと思うが、少し残念だ。
「スキル名の毛色が違いますね」
考えてみれば、どういう基準でスキルの名前があるのかよくわからない。
絆やグラス、ラルク達は漢字っぽいスキル名だった。
なのにここでラフタリアの刀にカタカナのスキルが出た。
「流星と付くと思っていた。残念だな」
「なんで残念がっているんですか……」
これでラフタリアも流星馬鹿だな、と言えると思ったんだがな。
ついでに流星仲間とかも。
「ラフタリアさんは本当に尚文様の希望に添えないのですわね」
「どうして私の所為になるんですか！　刀が勝手に決めたことです！」
「アトラ、お前は一言多い。気を付けろ」
「わかりましたわ！」
いや、何がわかったんだよ。
で、コピーを終えたラフタリアが親父に隕鉄の刀を返却する。

「ま、いい練習になったぜ。また何かあったら言ってくれよな」
「わかっている。あまりにも煮詰まっているようだったら俺を呼んでくれ。もしかしたら霊亀の素材の加工に条件があるかもしれないからな」
「あー……その可能性もあるな。わかったぜ。アンちゃん達も新しい武器の力を試したいだろ？　試し切りに行ってきな」
「ああ、じゃあまた来る。今度は頼まれた鉱石とかを持ってくる」
「楽しみに待ってるぜ」
という感じで俺達は村へと足早に戻ったのだった。
ちなみにスターダストブレイドがどんなものだったかというと、名前こそ違えど錬の流星剣とほぼ同じ規格のスキルだった。
SPの消費もクールタイムもバランスが良く使いやすいとのことだ。
なんて感じに、不思議なくらい平和な日々が一週間くらい過ぎた。
その間も変幻無双流の修行でアトラとの組み手を毎日していた。
後は余裕がある時にルーモ種の連中と鉱山に出かけ、鉱石を採掘して親父のところへと届けた。
俺の読みは正しく、ルーモ種の連中は鉱山で生き生きと採掘をしてくれた。
ツメで楽しげに掘るその姿はモグラそのものだったがな。
鉱石を受け取った親父も喜んでいたのが印象深い。
さて、孵ったドラゴンことガエリオンなのだが、ウィンディアとラトが定期的に成長記録を取ってくれている。奴隷共と一緒にLv上げに行ったお陰で随分と早く成長してきている。

サディナも一緒に手伝ってくれたお陰で一週間で38まで上昇した。
外見もかなり大きくなってきている。

そんなこんなで朝、俺は溜息をついた。

「はぁ……」

またか。アトラが最近俺のベッドにもぐりこむようになった。
元々セクハラをしてくる奴だったが、最近は一段とアグレッシブに接近してくる。
俺に気付かれないように侵入できるってかなり器用だぞ。
忍び足とかを覚えてるのか？　気配とかに敏感な俺への対策のつもりだろうか？
その度にフォウルを呼ぶんだが、毎回アトラに出し抜かれている。
最初は寝ているはずだとフォウルは勘違いしていたな。
昨日は睡魔に襲われて熟睡。アトラが用意したおやつの中に睡眠薬が混じっていたと推測される。
入手経路はガエリオンからだとか。睡眠のブレスが使えるようになったらしい。
で、その前は……物理的に寝かされていた。
今日はなんだろうな。
「すいませんナオフミ様！　昨日はみんなと一緒に寝てしまって帰ってこれませんでした」
バアンと扉が開き、事もあろうにラフタリアがタイミング悪く入ってきた。
顔がキョトンとした表情に変わる。
「えっと……何も起こっていないのですよね？」

「何が起こるんだ？」
ベッドにもぐりこまれるのは本当に困っている。
潔癖なラフタリアは怒っているのだろう。
まったく、俺がそんな真似をすると思っているのか？
むしろサディナが怖いぞ。アイツも時々やってくるからな。酔っ払って遊びに来るんだ。
俺は朝が早いから眠いっての！
「はぁ……そうですよね。ナオフミ様はそういう方です」
「何を言ってるんだ。それよりフォウルを呼んでくれ。むしろフォウルの方が心配だ」
本日は簀巻きになって転がされていた。
動くこともできず、家で腹ばいになってもがいていたそうだ。
「ナオフミ様？　どうして拒まないのですか？」
「出ていけと注意して追い出したぞ。外で寝ていた。その前は奴隷紋を起動させてもぐりこんできたら罰するようにしたのに入っていた」
「鬼ですか!?」
追い出したら家の前で寝ていやがった。で、奴隷紋の方は、元々病気で全身痛かったから慣れであんまり効果がないらしい。平然と寝ていた。
有言実行とはこのことだ。
フォウルに滅茶苦茶怒られた。どうすればいいんだよ。
「そうでした。ナオフミ様はそんな方でした」

「本日二回目だな。だから俺も同じことを言う。何を言っているんだ？」
「ん……どうしたのですか尚文様？」
目を覚ましたアトラが白々しく尋ねてくる。
お前のことで悩んでいるんだよ。
「……わからないのか？」
「寝所にご一緒することがそんなに嫌なのですか？」
「正直困る。お前も痛いだろ」
「痛みよりも心が温かいです。なぜ一緒に寝てはダメなのですか？」
「お前の兄がうるさい」
「アトラ！　なんでそんな奴のところへ行こうとするんだ！」
「ほらな」
「お兄様は気にしないでください。私が尚文様をお慕いしているだけなんですから」
ああもう、アトラはどうも騒ぎを起こすなぁ……。
病弱だった時とは性格が違いすぎる……いや、考えられる可能性が一つある。
「ラフタリア、それとフォウル」
「なんです？」
「なんだ!?」
「もしかしたらイグドラシル薬剤の副作用かもしれない」
「は？」

そうだ。そうとしか思えなくなってきた。
「ババアを見てみろ。俺のことを聖人様と慕ってくるじゃないか。きっとイグドラシル薬剤には飲ませた相手を惚れさせる効果があるんだ。それで奴隷紋すら克服してしまっているのかもしれない」
万能の薬にも唯一の欠点があったんだ。うん。
薬の効果が凄いアトラはババアよりも副作用が強いんだろう。
奴隷紋もこれ以上掛けると危ない。最悪死ぬ。
「とりあえず薬の副作用が切れるまで警戒を解けない状況だ」
「そ、そうですね！」
「はぁ!?」
ラフタリアが俺の説に同意するが、フォウルは意外そうな声を出す。
「何か不満なのか？」
「い、いや！　そうだな！　絶対に副作用だ！　アトラを全快させるほどの薬だったわけだし、きっと副作用に違いない！」
「違います尚文様！　私は心から尚文様をお慕いして――」
「さ、アトラ、今日もＬｖ上げに行くぞ！」
「ああ、尚文様ぁあああ……！」
アトラがフォウルに連れられて家を出ていった。
まあ、朝飯を食い終わったらまた修行なんだけどな。
で、家の扉を閉める。するとすぐにノックの音が響いた。

「はい」
ラフタリアが反応して扉を開ける。
が、そこには誰もいない。
「あれ？」
辺りを見渡すラフタリア。それから首を傾げながら扉を閉める。
「誰もいませんでした」
「ああ、どうもここ数日、村の連中の中にいたずらをする奴が出てきたみたいでな」
夜中だろうが朝だろうが、俺が家にいると俗に言うピンポンダッシュをする奴隷がいるらしい。
特に俺が一人でいると発生する。その点で言えばラフタリアがいる時に来たのは珍しい。
「最初は扉の軋みかと思ったんだが、どうも違うみたいでな」
家を補修した兵士に調べさせたのだが、そんな歪みとかはないとの話だった。
ちなみに前日は扉の前で待ち構えて、ノックされた瞬間に開けてみた。
キールだった。
朝方にも同じことがあってアトラが時間通りに来た時のノックだった。
キールは「今日の献立は何？」と言いながら他の奴隷と一緒に来たから犯人ではないだろう。
「朝飯の時にでも村の連中を問い詰めるとしよう」
「そんな悪戯をナオフミ様にする子がいるんでしょうか？」
「実際にいるんだからしょうがないだろ」
「うーん……」

ラフタリアが村の連中を信じたい気持ちはわかる。
だが、事実として存在するのだから躾は必要だ。
「まあいい。そろそろ俺は日課の魔物舎に顔を出しに行くが、ラフタリアも来るか？」
「あ、はい」
ということで俺達は朝の日課をこなしてから朝食の準備をした。

五話　ピンポンダッシュ

朝食時、奴隷共が集まってから俺は奴隷項目にチェックを入れて注意する。
「最近、俺が在宅中にいたずらしてる者は名乗り出ろ」
……誰も手をあげない。しかも奴隷紋も作動しないときたものだ。
奴隷じゃないのか？　じゃあ……と、村に駐在している兵士や錬を睨む。
全員、首を横に振る……一体、誰なんだ？
「むう……」
「ごしゅじんさまどうしたのー？」
「ラフー？」
今日はフィーロがこっちで飯を食っている。
相変わらずラフちゃんはフィーロの頭に乗っかっている。そんなにもフィーロの頭がいいのか？

「俺が一人で家にいる時に扉を叩いて逃げる奴がいてな」

扉を開けるとすでに逃げ去っているということは相当足が速くないと不可能だ。どこかに隠れにしてもな……。

ラフタリアとアトラに見張らせるという手もあるが、この犯人は勘だけは鋭いみたいで見張りがいる時間は来ない。最悪なのは深夜にも来る点だ。

「ふーん。フィーロが見張る？」

「ラフー？」

「見張りがいると来ない。とりあえず泳がせて、絶対に捕まえてやる」

俺のきつめの問いに対して反応しなかったということはフィーロは犯人じゃない。

「わかったー」

「ということでラフタリア、アトラ。今日の昼間は犯人を捕縛するから、昼食後しばらくは離れていてくれ」

「わかりました。ちょうど師匠に気の応用を聞きたいと思っていたので行ってきます」

「ああ、尚文様。私はご一緒したいですわ」

「泳がせるって言ってんだろ。とりあえずお前等、今日は絶対に俺の家の扉を叩くなよ？」

「「はーい！」」

これで犯人がいなかった場合は、コイツ等に容疑がかかるわけだけどな。

まあ、そんなわけで昼前の稽古を終えた後、俺は犯人をおびき出すために家に入ってノックを待つ。

コンコン。
誰も俺のところへは来るなと朝のうちに注意してある。間違いなく犯人だ。
だが、今日は逃がさん。仮に犯人じゃないとしても捕まえてやる！
「シールドプリズン！」
扉を叩いた奴を盾の檻で閉じ込め、俺は扉を開けてこんないたずらをした奴を確認した。
ガツンガツンとプリズンが揺れている。トラップは成功だな。
「どうしたの？　伯爵」
「ラトか、お前こそこんな時間にどうしたんだ？」
「気分転換に散歩。それよりどうしたの？」
「最近、ピンポンダッシュをするいたずら者がいるのを朝、話したろ」
「そうね。じゃあここに？　どんないたずら者かしらね」
プリズンの効果時間が切れるのを待って、中身を確認する。
「キュアアアア!?」
……俺とラトは同じ表情で呆れていたと思う。
うん。奴隷共じゃなかったら魔物を疑うべきだよな。
だけどピンポンダッシュなんて真似を魔物がするとは思わなかった。
ピンポンダッシュ魔ことガエリオンが盾の檻から自由になって空へと逃げる。
俺は迷うことなく魔物紋の項目を出現させて罰を発動させた。
「キュアアアアアア!?」

ガエリオンが落下して暴れ回る。
ちなみにガエリオンは尻尾を含めて全長二メートルちょっと。見た目は完全にドラゴンっぽい生き物になっている。若干尻尾が太いかな。
目が大きく、可愛げが残っている。少しメタボだ。
成長もある程度なだらかになってきていた。思いのほか大きくならなかったなぁ。
ウィンディアがガエリオンの悲鳴を聞きつけて走ってきた。
「ガエリオンがどうかしたの!?」
「朝のいたずら犯だ。現行犯で捕らえた」
「え？　ガエリオンが犯人だったの!?」
さすがのウィンディアもガエリオンを擁護するか迷うように俺を見る。
「庇うなよ。悪さには躾も必要なんだから」
「わかった。ダメだよガエリオン。いたずらは、メッ！」
「キュアア……」
「どうしたのごしゅじんさま？」
フィーロとラフちゃんが騒ぎを聞きつけてやってきた。
メルティとは遊んでいなかったのか？　いや、朝の一件で気になって村にいたのか？
「あー怒られてるー！」
フィーロがガエリオンが怒られているのを見てこれ見よがしに踊って楽しんでいる。
「ガーエリーオンが怒られたーざまあみーろ。ごーしゅじーんさーまを、背中にのせーるのはー

フィーロ」

「ギャアアウウウウウウウウ！」

馬鹿にされてガエリオンが怒りを露わにしている。

「ラフ、ラフラフラフ」

ラフちゃんはそんなフィーロを叱るようにペシペシと手と尻尾でフィーロを軽く叩くが、全くお構いなしにフィーロは踊っている。

フィーロにも罰。

「あきゃあああああああ！　な、なんで？」

「笑うな」

「ご、ごしゅじんさまも笑うのにー」

む……そういえばそうだった。すぐに魔物紋の発動を止める。

「なに論破されてるのよ！」

「俺は他人の失敗を笑う。だから俺には言う資格がない」

「ラフー」

タイミング良くラフちゃんが鳴いたな。

そうだ。俺には言う資格はないのだ。思い切り胸を張ってやろう。

「あのねー……」

ラトが額に手を当てて呆れている。

俺はヴィッチやクズの失敗を笑い、絆に怒られたグラスを笑っていた。

そんな俺が正論を説いたところで説得力がない。

「えっと……ライバルだからってそういうことをしちゃいけません」

「ぶー」

「私を怒らせたらどうなるかわかってる？」

「やー！」

なんだこの茶番？

「まったく、どうしてこんないたずらをしたの？」

ウィンディアがガエリオンの顔を撫でながら尋ねる。するとガエリオンはキュアアアっと弱々しく鳴いた。

「盾の勇者に遊んでもらいたかったんですって」

「はぁ？」

「あんまり遊んであげてないでしょ。そこの鳥は構うのに」

「むー！」

フィーロとウィンディアが睨み合いを始める。

「まてまて……つまり、俺が遊んでやらないと、またこんないたずらをすると？」

「キュア！」

頷きやがった。かまってちゃんかよ。まったく……ラトの方を見る。

「スキンシップは大事よ。どっちもね」

そうですか。面倒くせー。

ラフちゃんはこんなワガママ言わないぞ？
「じゃあフィーロとガエリオン。一日交替で少し遊ぶ時間を作ってやる。ただし、相手の邪魔をしたらなしだからな」
「むー！」
「キュア！」
双方が睨み合いながら抗議する。
「じゃあ両方なしだ」
「わ、わかったー」
「キュアキュア」
両者妥協し、この案で頷いた。
もちろん、ラフちゃんはお前らよりも多めだぞ？　望めば毎日遊んでやる。
「じゃあ、今日はガエリオンからな」
「キュア！」
「えー！」
「お前の方が年上だろうが」
「むー……わかった。じゃあ出かけてくるねー。ウィンディアちゃん、行こうー」
「うん」
フィーロはウィンディアを誘って、Ｌｖ上げに出かける。
「さてガエリオン。何して遊ぶ？　昼休みが終わるまでだぞ」

「キュア！」
犬みたいに尻尾を振って、喜ぶガエリオン。
反応もいいし、とりあえずフリスビーシールドで遊ぶか。
盾をフリスビーに変えて投げる。するとガエリオンが颯爽と追いかけて羽ばたく。
ファンタジーの中で色々と原理を追及しちゃいけないけど、よく飛べるな。
パシッと投げたフリスビーがキャッチされ、いったん消えて手元に戻ってくる。
ご機嫌なガエリオンは俺に向かって飛んできて顔面を思いっきり舐めまわしてくる。
どっかのお喋り鳥と違って純粋でいいな。
などと、少しだけガエリオンと戯れる。
しばらくするとラフタリアとアトラがやってきた。
「ナオフミ様、犯人は見つかりましたか？」
「ああ、コイツだ」
「キュア！」
「え？　ガエリオンだったんですか？」
ラフタリアの問いに俺は頷く。
「構ってやらなかったから寂しくてやっていたんだと」
「まあ、確かにナオフミ様、ウィンディアちゃんとラトさんに任せたままでしたものね」
「気持ちはわかりますわ！」
「キュア！」

ガシッとアトラとガエリオンが握手を交わしている。
何を意気投合してんだ。
「ラフタリア達が来たということは休憩は終わりだな」
「キュア……」
すごく寂しげにガエリオンは鳴く。鳴いたって俺は遊んでやらんぞ。
ラフタリアがそんなガエリオンの頭を撫でて俺に尋ねる。
「稽古には参加させられませんが、見学くらいは許可してもいいのでは？」
「あんまり甘やかすのはどうかと思うぞ？」
「しょうがありませんわね。ではさようならですわ」
「キュア!?」
ガエリオンが裏切られたというような表情をアトラに向けている。
先ほどの握手はどうなったんだ？
「あなたはどうしてそこまで極端なんですか……」
ラフタリアも呆れてるな。俺もそう思う。
それからラフタリアはしばし考えた後、ガエリオンに向けて語りかける。
「見学をするのはいいですけど、その分Lv上げをがんばるというのはどうですか？」
「キュア！」
ガエリオンが何度もコクコクと頷く。うーん……人語は喋らないけど頭は良いようだ。
ラフちゃんの方が可愛いとは思うが、謙虚なのは評価してやろう。

「……まあ、Lv上げと成長がコイツの仕事だし、見てるだけでやる気を出すというのなら悪くはないか」
「ということですわ」
「アトラさんはさっきアッサリと見捨てたくせに何を言ってるんですか」
「まったくだな」
「キュアキュア！」
そんなわけでガエリオンは昼過ぎからの稽古を近くで見学することになった。
遊んでいるわけじゃないからフィーロとの決まり事を破ったわけではないぞ。
で、夜になったわけだが、ガエリオンの奴はまだ俺から離れようとしない。
「もう夜だぞ……」
家の中にまで強引に入りこむ。地味にでかいから困る。
生まれてから割と放任気味だったから大目に見ていたが、いい加減ウンザリしてきた。
「まあまあ、ガエリオンはちょうどいいかもしれませんよ？」
「何が？」
「アトラさんの問題ですよ。ナオフミ様のベッドに入ろうとする前にガエリオンに追い返してもらうんですよ」
つまり番犬ってわけか？　フィーロでも同じことができそうだが……。
というかラフタリアもよく言うな。
「ナオフミちゃーん！　ラフタリアちゃんを迎えに来たわよー」

と、そこでサディナが顔を出した。

「ああ、サディナか」

「あら？　どうしたの？　ガエリオンちゃんを家に入れて」

「どこまでもついてくるんだよコイツが。それでラフタリアがアトラ対策に番犬にしたらどうだっていうんだ」

「そうねー……奴隷経験のショックが大きい子達も最近は大分良くなってきてるし、あと少ししたらラフタリアちゃんもここで寝られるようになるわよね。それまでの間、アトラちゃんを抑えてくれるならいいんじゃないの？」

サディナも同意見か。

「というかアトラをどうにか説得できればいいんじゃないか？」

「やりましたよ。サディナ姉さんと一緒に」

「やったわねー。そうしたらアトラちゃん、ナオフミちゃんのお嫁さんになりたいって告白したから驚いたわ」

はぁ……アトラも押しが強いというかなんというか。

病が治ったせいでの一時の気の迷いだし、あんな幼い子供を嫁にするほど俺は外道じゃないぞ。

「だから言って聞かせておいたわ。ナオフミちゃんはヘタレだから女の子を食べちゃうような真似はイヤなんだって」

「ヘタ——おま！」

事もあろうに俺をヘタレとかなに言ってやがる！

「『大丈夫です。尚文様はやる時はやってくれる殿方です』って答えたアトラさんも大概ですけどね」
アトラも変に俺を信じてやがる！
ああもう面倒くさい！　逃げたくなってきた。
「ナオフミちゃんが振ってあげるのが一番なんだけど」
「もちろん、拒んだぞ」
それでも諦めない鋼のメンタルの持ち主がアトラだ。
戦力としても有能になってるし、命令すれば素直に従う。
ただ俺への好意が極端すぎるだけで……ということにしておこう。
「早くフォウルがアトラに勝って、ここに来られないようにしてくれることを祈るしかないな」
さすがに売却して追い出すとかも考えなかったわけじゃないが、奴隷紋に耐えきれるほどのメンタルだ、脱走でもして俺のところへ来る可能性は大いにある。
そもそもそこまでする気はないし……どこかで折り合いをつけさせるしかない。
なんて感じに今後のアトラ対策をラフタリアとサディナと話していると、ガエリオンが部屋のものを物色し始めた。何か臭うものでも見つけたのだろうか？　クンクンと鼻を鳴らしている。
新しい武器や防具の素材にする袋に頭を入れている。
「コラ、そんなところを弄るな」
好奇心いっぱいのガエリオン。フィーロも時々こんなことをするので、対処も簡単だ。
なんて……俺は考えていた。
この後起こる事件の引き金が転がっているだなんて夢にも思わなかった。

六話　Ｌｖドレイン

「キュア！」
袋が倒れて中身が出る。前回はピンポンダッシュだったが、今回は袋漁りだ。
ま、フィーロも同じことをするんだけどさ、未だに。
ちなみにフィーロは宝物と称してゴミを漁ってくることがある。ガエリオンも変わらん。
ああ、きっとゴミ漁りも張り合って縄張り争いでもしているんだろうな。
「あーもう……片付ける方のことも考えろよな……」
袋から魔物の骨や鉱石、バルバロイアーマーに使っていた竜帝の核石が転がり出る。
ガエリオンはその竜帝の核石に目をつけたのか、転がるそれを目で追って、じゃれ始める。
猫みたいな反応だ。ガエリオンもフィーロと同じく光り物が好きみたいだな。
竜帝の核石の前の腐竜の核をフィーロが目を輝かせて見てたっけ。
絆の世界の方でロミナに加工してもらったのが懐かしいな。
「キュアア!?」
楽しげなその様子に、僅かに和むのだけど、そんな状況じゃないな。
ささっと叱って片付けよう。
「それって竜帝の核石!?　ナオフミちゃん！　早くガエリオンちゃんから取り上げて！」
「は？」
サディナがいつになく切迫したような表情で指示をしてきた。

パクッとガエリオンが竜帝の核石を咥える。
「おい。それはお前のものじゃないぞ。早く返せ！」
だが、俺の注意なんてどこ吹く風とでもいうかのように、ガエリオンは竜帝の核石を口の奥深くへと……ゴックンと音を立てて飲み込んでしまった。
「コラ！　吐き出せ！」
ガエリオンの胸倉を掴んで揺らす。
えっと、魔物紋にそういう罰則なかったっけ？
と項目を呼び出して弄ろうとしたその時！
「キュア!?」
ガエリオンがビクッと痙攣したように動き、目を大きく見開く。
「キュ……ギャ……ギュウウ……」
そして冷や汗をかきながらきつく目を瞑って何かに堪えるかのように呻く。
心なしか、ガエリオンの全身から何かがきしむような音が聞こえる。
「お、おい」
「あの……ガエリオンからものすごく禍々しい気が溢れ出ています！　凄い量です！」
ラフタリアがガエリオンを見て叫ぶ。
「禍々しい気？」
「はい！　気を付けてください！」
振り返るとガエリオンから黒いような紫色のような何か……肉眼で確認できる魔力のようなもの

が解き放たれた。
この色、見覚えがあるぞ。ラースシールドにした時、フィーロが纏うオーラに似ている。
「ナオフミちゃん、ちょっと退いて！」
サディナが銛をガエリオンに向けて構え、尻尾に引っかけようと突き出す。
が、ガエリオンは素早く尻尾を丸めて横っ飛びした。
「ギャオオオオオオ！」
目が赤く血走り、天井に向けて吠える。
と同時にガエリオンの口から魔力のブレスが放たれて一瞬で天井が吹き飛んだ。
「ギャ！」
バサァ……っと翼を広げ、ガエリオンは飛び出した。
よし！　ちょうど魔物紋の項目を開いている。罰則で落とそう。
魔物紋を発動！
だが、バチッと視界が歪み、魔物紋が作動しない。
「屋根を吹き飛ばしやがって！　大人しくしろ！」
作動しないならしょうがない！　俺は暴れるガエリオンに飛びかかって押さえつける。
「ギャオオオオオ！」
「うわ！」
バシッとガエリオンが全身を使って俺に体当たりした。軽く突き飛ばされて尻餅をつく。
「いてて……」

ってちょっと待てよ。不意を衝いたとはいえ俺を突き飛ばせるのか？
言ってはなんだが俺の防御力で押さえつけられないって相当の攻撃力……ラフタリアや錬クラスの力が必要なんだぞ？
「ギャウウウウウ……」
ガエリオンは血走った眼で俺を睨みつける。
その眼は先ほどまでのちょっと間抜けなものではない。
完全に野生の竜の本能そのまま……威圧感のある何かが俺の背筋を通り過ぎる。
盾を前に向け、本格的に押さえつけるために睨みつけた。
屋根を吹き飛ばしたブレスを放たれたら近くにいるサディナやラフタリアが危ない。
「ギャオオオオオオオオオオ！」
だが、ガエリオンは高い声で鳴いたかと思うと、どこかに向かって飛んでいってしまった。
「何かがガエリオンさんに纏わりついていました。あれは一体……」
アトラの説明を聞きながら建物から飛び出し、ガエリオンが飛んでいった方向を見る。
「な、なんだ？」
村に残っていた奴隷が騒ぎを聞きつけて飛び出してきた。
「どうしたんだ？」
「一体何があったのですか？」
「何？　何が起こったの！」
ラトとウィンディアが一緒に、俺達が見ている方向を見る。フォウルとアトラも一緒だ。

「実は――」
俺はガエリオンが竜帝の核石を食べてしまい、ああなったことを説明した。
「竜帝の核石って……伯爵は変なモノを持っているわね」
「何か心当たりはないか？」
「ドラゴンはその生態がかなり謎に包まれている種類でもあるし……他のドラゴンから見つかった核石を欲しがるとは聞くけど、暴走したなんて……」
「ナオフミちゃん、あの竜帝の核はどこで手に入れた品なのかしら？」
サディナが俺の肩を掴んで聞いてくる。
「元々は東の村の近くの山脈に住みついていたドラゴンだったらしいが……」
「じゃあ……ガエリオンちゃんは核の中にある竜帝に自我を侵食されちゃった可能性が高いわね」
「どういうことだ？」
サディナの奴、この辺りの問題に詳しいように見えるぞ。
「竜帝の核にはその核に内包されたドラゴンの自我というべき器官があるのよ。ドラゴンというのはその核を使って能力を引き上げたり、記憶を継承したりすると聞くわ」
「じゃあ……ガエリオンは腐竜だったドラゴンの記憶を継承し、暴走していると？」
「そんな……」
そこで錬が絶句したようによろめく。
「確か錬が倒したドラゴンがドラゴンゾンビになったんだったな」
「絶対に止めないといけない！」

「錬に殺された恨みから戻ってくる可能性があるんじゃないか？」
「それなら……止められなくもないが。尚文、お前が育てたドラゴンだろ！」
「俺に懐いちゃいたが、育てたのは村の連中で、責任者はコイツだぞ？」
俺はウィンディアを指差す。そうはいっても可愛げはあったし、できれば見捨てたくはない。
どこへ逃げたのかにもよるが捜して捕まえないといけないな。
「……剣の勇者はドラゴンを殺したことをどう思ってるの？」
ウィンディアは錬を詰問するように睨んでいる。
どうせドラゴン好きだから錬に殺させたくないとか思っているんだろうな。
「大方、ゲーム知識のクエストとかで手頃な相手だったとか？」
「そ、そうだが……俺の所為でいろんな人に迷惑を掛けてしまった。今じゃ、あの地は汚染が酷いって聞く……反省している」
錬は錬でダウナーになりやすいからなぁ。
「謝っても謝りきれない……どうしたらいいだろうか」
申し訳なさそうに俯く錬に、ウィンディアもそれ以上は追及しないつもりのようだ。
だが、錬の態度は気になる。
「あのさー」
「え？」
「お前さ、どうもナイーブな奴だと思っていたから言うけどさ。お前が倒した魔物にも家族がいて、幸せを噛みしめていたかもしれないんだぞ？」

俺の質問に錬の表情が徐々に青くなっていく。ああ、そういう発想がなかったのか。

「そういう奴に、『お前の家族を殺したのは俺だ。責任を持つ』とか言って回るのか？　魔物は魔物だとかで線を引くなら魔物舎の連中はどうなる？」

「え、あ……う……」

はぁ……面倒な年頃だな。

「肉を食うのだって、野菜を食うのだって同じだ。結局は何かを犠牲にして生きている。むしろ誰かを踏みにじって生きていく覚悟を持っていた方がいい」

「矛盾していないか？」

「はぁ？　世界を救うためには魔物を虐殺してでも強くならなきゃいけない勇者がなに言ってんだ？　弱肉強食だろ？」

聞いた話じゃ人間を殺しても経験値が入る世界だぞ？

人と魔物は違うとか寝言は寝てから言えってーの。

「だから錬、魔物を殺す時、ちゃんと覚悟を持って殺せ。世界を救う気があるならな」

「わ、わかった」

納得しかねる顔をしている。錬はエクレールと一緒にいるからな。理想が高いのかもしれない。

「それでも俺は……謝って、みんなを守りたい」

「あっそ」

これはもう病気だな。どこかで折り合いをつけなきゃ錬はまた暴走しかねない。

「……追いかけなきゃ」

錬を冷たい目で見ていたウィンディアが焦ったように言う。そりゃあ大事なドラゴンだしな。

竜帝の核は俺の鎧に使われている大事なものだし、最悪、ガエリオンを倒してでも取り返さないといけない。

「わかっている。フィーロを呼んで出発するしかない」

そのまま追いかけるという手段がないわけじゃないが、フィーロを呼んだ方がはるかに早いだろう。まったく、まだ乗ってもいないのにもう処分しなきゃいけないってどんなドラゴンだよ。

「隣町に馬を……」

兵士の用意した馬に乗って、俺はフィーロを呼びに行こうとする。

その途中で町の方からエクレールが馬に乗って走ってきた。

「イワタニ殿！」

「どうした？　こっちも用事があるのだが」

「至急、メルティ王女がイワタニ殿をお呼びだ。フィーロ殿に異変が起こった！」

「なに!?」

「な、なんでフィーロが……」

「しょうがない。ラフタリアと錬は出発の準備をしていてくれ」

「はい！」

「わかった。治療に関しちゃ俺は何もできない。尚文の言う通り準備はしておく」

俺は錬とラフタリアに後を任せて隣町へと出かけたのだった。

エクレールに案内されて向かったのは町に建築された治療院だ。
治療院に入ると、メルティが今にも泣きそうな表情で駆け寄ってくる。
「あのね……フィーロちゃんが突然苦しみだしたの。ナオフミ、フィーロちゃんを助けて！」
「いきなり言われても俺は医者……治療師じゃないからわからない。だけどどうにかできるのならやるさ」
「絶対よ！」
とは言われても、本当にヤバイ病気とかだったらイグドラシル薬剤に頼るしかない。
「とにかく、様子を見せてくれ」
「うん」
メルティと治療師に連れられて診察室に入る。
そこには魔物の姿でぐったりと横たわっているフィーロがいた。
「うう……ううん……」
腹部を中心に、ラースシールドに変えた時のような変化が全身を侵食している。
いや、もっと悪い。禍々しいものが立ち昇っていると表現するのがいいだろう。
頭の冠羽が光って抗っているようだけど、侵食の方が勝っているような感じだ。
「ラフー……」
ラフちゃんがその侵食をどうにかしようと手でペシペシと叩いているが効果は薄そうだ。
「何が起こっているんだ？　イグドラシル薬剤で治るか？」
「不明です。ですが呪術的な意味合いが強いので、さすがのイグドラシル薬剤でも効果は期待でき

ないでしょう」
治療師が困惑しながら俺の問いに答える。
「あ、ごしゅじんさま……」
苦しそうに呻きながらフィーロは俺を見て羽を伸ばした。
俺はそっとフィーロの頬(ほお)に触れる。
人化しているわけじゃないけれど、それでも頬を撫(な)でると、フィーロは苦しそうに呻きながらも気持ちよさそうに目を細めた。
ステータス魔法でフィーロの状態を確認する。
毒に犯されているとかマヒしているとか、簡単なものなら判別できる。
フィーロのステータス画面が何度も砂嵐のようにチラつく。どう考えても普通じゃない。
でだ、ここで大きな問題に気付く。
フィーロのＬｖが俺の知る数字よりも低くなっている。
Ｌｖダウン？　何が起こっている？
可能性が複数浮上する。
だが、この状況からだけでは、そのうちのどれかだと結論付けることができない。
「……村からラトとサディナを連れてきてくれ」
「わかったわ」
しばらくしてラトとサディナだけではなく、フォウル、アトラ、ウィンディアも一緒に来た。
「フィーロちゃん!?　何があったの？」

ウィンディアがフィーロに駆け寄って心配している。
お前等ってそんなに仲良かったっけ？　魔物が好きだから当たり前なのか？
「ラト、サディナ。どう思う？」
「どうと言われても、何か呪いにでも侵食されているようだとしか言えないわね。ちょっと見せてもらえる？」
ラトは治療師の診断書を読み、フィーロを触診する。
「ステータスを見ると、少しずつLvが下がっていっている」
「この感覚は……ガエリオンちゃんの暴走と関わりがありそうね」
サディナは俺と同じ意見のようだな。
「だけどなんでフィーロちゃんまでこんな症状が起こっているのかしら？」
「Lvダウン？　それって相当高位の呪いよ？　にしてもここまで酷いものは見たことがないわ」
「ラト、お前はどう思う？」
「サディナの意見に間違いないと思うわ。でも……ガエリオンとフィーロとで接点なんてあったかしら？　仲が悪いというのは知ってるけど、それとは違うでしょ？」
「もしも、竜帝の核の前の腐竜の核が原因だと仮定すると、ある」
「なによ？」
「腐竜と遭遇した時、フィーロはその核を食べているんだ。俺がもらったのはその欠片（かけら）でしかない」
実際、フィーロが腐竜を倒したようなものであるわけで、腐竜の核をフィーロが食べたことが決定打になっている。それが大きく関わっているとしたら、納得が行く。

「なるほど、ガエリオンが暴走することで核を食べたフィーロちゃんの方にも影響が出ているということね」
「だろうな」
「じゃあ、ガエリオンの方を確認しなさい。なんとなく、それだけで収まっていない気がするわ」
俺はガエリオンの方のステータスを確認した。
やはりフィーロと同じく砂嵐が起こって読み取れないものが多い。
が……。
「Ｌｖが急上昇している」
36しかなかったガエリオンのＬｖが45になっている。
……クラスアップ限界を突破しているな。
「あの……フィーロちゃんから禍々しい力が流れ出ているのを感じます」
「そりゃあ見りゃわかる」
「いえ、そうではなく」
アトラが何かを指差している。そこには何もないのだが。
「アトラちゃんは目では見えない別のものを感じ取っている子だから、流れ出た力の移動先がわかっているのかもしれないわね」
「ふむ……」
その可能性は十分あるな。意外と役に立つ能力を持っている。
問題はフィーロから流れ出ている力の行方か。

方角的にガエリオンが飛んでいった方向と同じだ。
「フィーロの中にある核を吐き出させることはできるか？」
「無理ね。核らしいものが全身を循環しているわ」
フィーロのステータスを確認する。
……この減少速度だと二日ともたない。どう考えてもフィーロのＬｖが１になる方が早い。
いや、１になって止まるのならまだマシだ。最悪、死ぬかもしれない。
「あと、尚文様からも力が漏れています」
「なに？」
俺は自分のステータスを確認する。見たところ、その様子は見られない。
「その、今は左腕の辺りからです」
丁度、盾を付けているところだ。
となると盾からも……って盾に核石入れてたじゃないか。
じゃあ盾の能力が下がるとでも？　一応、一覧を確認してみるが特に異常はない。
「ただ……何かを増幅させながら漏れ出している気がします」
「増幅……？」
アトラが何のことを言っているのかわからないが、警戒を強めるべきなのはわかった。
「ババアはどこだ？　こういう時にいると役立つだろ」
「師匠は今日、リーシアさんを筆頭に村の子や兵士達を連れて遠征に行きました！」
「町で道場でも開いていろよ！」

なんでこんな時に遠征なんて行ってんだよ。
「セインは!?」
「ゼルトブルにお金稼ぎに行ってくると言ってました!」
「ああもう! どこまでも面倒な!」
とはいえ、セインは事態に気付けば来る可能性は高い。必要になったら呼び付けよう。
「とりあえずはババアの修行先を突き止めて、戻ってくるように指示を出せ。俺達は急いでガエリオンを追う!」
そうでもしないと時間が足りなくなる。
アトラが何か決意したように前に出る。
「尚文様、フィーロちゃんに少し試したいことがあるのですが」
「なんだ?」
「アトラ、何をするつもりだ?」
「私なりに少しでも漏れ出るのを抑えてみます」
アトラが横になるフィーロの胸に右手を当てて、軽く左手を添える。
「ん……あ……」
苦しそうに呻いていたフィーロが目を開けて、ゆっくりと起き上がった。
「少しだけ、軽くなったよ」
「フィーロちゃん!」
「ラフー!」

メルティがフィーロに駆け寄る。ラフちゃんも喜びの声を上げているぞ。

「時間は稼げると思います」

「じゃあ……馬車を……」

くそ、乗り物として足が速い奴がいない。

フィーロの配下一号であるフィロリアルは行商に行かせてしまっている。

町にいるフィロリアルを借り上げて行くしかないか。

「ガエリオンの追撃は俺、ラフタリア、フォウルにアトラ、それとサディナと錬、エクレールも来い。えっと……谷、じゃない。お前とラト――」

「ごしゅじんさまの馬車は……フィーロが引くのー」

フィーロがアトラを背負って、目に強い意志を持って宣言する。

「ダメよフィーロちゃん！　アナタはじっとしていなくちゃ」

「そうだ。お前は安静にしていろ」

しかし、フィーロは首を振って拒む。

「やー……。フィーロは、絶対に、ついていくの」

普段の元気がない。だけど、齧りついてでもついていくと、一歩前に出て言い張る。

……これで置いていっても、きっと追ってくるだろう。けっこう頑固なところがあるからな。

「なにかあったら治療院に預けるからな。で、別の奴に馬車を引かせる」

「尚文様!?」

「アトラも抑えていられるか？」

「は、はい！」
「よし」
「わたしも行く！」
メルティが今にも泣きそうなのを堪えて叫んだ。
ま、親友のピンチなんだ。フィーロと同じく無理やりにでもついてくるだろう。
王女の立場を無視してな。
「絶対に無茶をするなよ。お前は王女なんだから」
「王女である前に、わたしはフィーロちゃんの友達よ！」
「そうか」
……前はフィーロがメルティを守りたいと駄々をこねたな。
フィーロは良い友達を持ったもんだ。
「じゃあ、俺達は先行してガエリオンを追う。ババア達には城の兵士共が急いで通達してくれ」
「は！」
こうして俺達は頑固なフィーロが引く馬車に乗って村へ移動し、錬とラフタリア達を回収して出発したのだった。

出発して四時間。フィーロのステータスの低下はアトラのお陰で辛うじて抑えられている状況だ。
それでも少しずつフィーロの経験値が漏れ出していく。
Lvダウンのスピードこそ落ちているが、厳しい状況だ。

ガエリオンが向かっているのは大体の予測通り、腐竜と戦った東の村の方だ。
「はぁ……はぁ……」
「フィーロちゃん……」
アトラがフィーロの背に乗り、馬車のコントロールはメルティに任せ、ラトとウィンディアが状況を整理し、サディナが後方を見張っている。錬はエクレールと共にいつでも戦えるようにしている。
フィーロが相当バテている。こりゃあ早くしないとやばいな。
元康、愛しのフィーロが大ピンチだぞ。
こんな時にアイツはどこで何をしているんだ。フラグを立てるなら今しかないだろうに……。
まったく、アイツはウザイ時にはいて、使えそうな時にいないな。
「最悪、ガエリオンは処分しなくちゃいけなくなる……わかるな」
俺はウィンディアに伝える。一番可愛がっていたのはウィンディアだったのだ。
一応、ガエリオンは俺の所有物であるが、ウィンディアにも権利はあると思っている。
面倒を見ていたんだから、それくらいは聞いてやるさ。
「……うん」
「妙に聞きわけがいいな。もっと拒むと思っていたが」
「まだ諦めたわけじゃないんでしょ？」
「まあ、そうだけど」
「わかってる。勇者が悪いわけじゃないことくらい。だけど……ううん。多分、その時になったらまた抗議すると思う」

「そうか。俺は制止を振り切るぞ」
「わかってるってば！　最後の手段なんでしょ！」
本人も割り切ろうとして割り切れないということか。
フィーロを苦しめている原因がガエリオンだとはわかっていても、可愛がっていたんだからな。
もちろん、ガエリオンの処分は最終手段だ。できれば回避したい。
「……勇者なんて嫌い」
ウィンディアはボロボロと涙をこぼしている。
「憎まれるのは慣れてる」
……ウィンディアは俺以外の勇者になにかされたことがあるようだ。
……なんとなくだが、錬も落ちつきがない。何か心当たりがあるのかもしれない。
「で？　お姉さんはどうしたらいいのかしら？」
サディナが後方を確認しつつ聞いてくる。
追っ手が来るわけじゃないけど、夜間移動なんてしていたら魔物と遭遇する確率も上がるからな。
現に馬車の後方から追ってくる魔物が数匹いた。
サディナはその魔物を魔法と銛で撃退している。
前方はアトラとメルティで抑え込んでいる。フィーロは実質戦えない。馬車を引くのだって厳しいんだ。無理はさせられない。
「そうです。上手ですね」
「ラフー」

アトラがラフちゃんにフィーロから漏れ出る力を抑える方法を教えているようだ。
フィーロのＬｖ低下速度が若干落ちている気がする。
「ガエリオンを正気に戻す方法を考えている。サディナ、お前は周りを警戒していてくれ」
「はいはい」
静かだったラトが話に割って入る。
「ガエリオンを助ける方法というと核を吐き出させるのがいいかもね。それもできるだけ早く」
「……そうだろうな」
「無理やり体を押さえて、口に手を突っ込むしかないでしょう。本当なら手を噛み切られないように道具が必要だけど」
「それは大丈夫だろう。俺の防御力を舐めるな」
「ま、伯爵なら心配ないわね」
「ラト、薬でガエリオンを抑えられないか？」
ラトは薬を入れた注射器を俺に見せる。
「結構強めのマヒ薬よ。ドラゴンだってしばらくは動けないくらい強力なやつ」
「そうか。頼りにしている」
ガエリオンのＬｖは少しずつ上昇しているし、盾の補正で能力も高い。
挙句、フィーロからステータスまで搾取している状態だ。
ドラゴンの形をしたフィーロと戦うようなもんだ。
幸いなのはラフタリアと錬がここにいることだな。火力だけは十分にある。

「まず作戦の打ち合わせだ。ラト、やっぱり少しは弱らせた方がいいよな」
「そうね。できれば」
「じゃあサディナ、ガエリオンと接触したら弱らせろ。その後はラフタリアと錬が各々のスキルをぶちかまして動きを封じる」
「……私は？」
ウィンディアが震えながら聞いてくる。
「お前は戦えないだろ？」
「ううん。ガエリオンを下手に傷つけるくらいなら私がやる！　じゃないと危ない」
責任感の強いことで。
「とはいえ、お前、何ができるんだ？」
「あら、ウィンディアちゃんは魔法が得意よね？」
「うん！」
ほう……魔法担当か。
「しかも龍脈法の使い手よ」
「なに!?」
今、龍脈法と言ったか!?
「それはどんな魔法なんだ！　教えろ！」
「そうねー。辺りのものに宿る力を借りて発現する、龍脈から力を借りる魔法とでも言うのかしらね。覚えていれば合唱魔法や妨害魔法を使いこなせるようになるわ」

そういえばオストも似たような魔法を使いこなしていた。
オスト自身の力でできた芸当かと思ったが、どうやら違うようだな。
「どんな魔法かは後でわかると思うから、今は打ち合わせね」
「わかった。戦力として期待している」
よし！　これである程度、作戦の目処は立ったな。
むしろラフタリアと錬でガエリオンを殺しそうで怖いくらいだ。
更に数時間経過し、東の村に到着した。朝日が昇り始めている。
フィーロの足もだが、ガエリオンの飛行速度も相当なモノだ。
だけど……なんか東の村の山の方に暗雲が立ち込めている。
「あ、聖人様だ！」
「いや、盾の勇者様よ！」
東の村の連中が俺達を見つけて近づいてきた。
ウィンディアは……なぜかシーツを被って全身を隠している。
錬も顔を合わせづらいだろうし、俺が指示して馬車に隠れさせた。
錬自身は出てもいいようだったが、面倒なやりとりがあるのが容易く想像できるからな。
ぶっちゃけこの村の連中だって自業自得なところがあるし、錬に文句を言う前にドラゴンの死骸の除去をちゃんとやれと思う。
「今朝、ドラゴンの叫び声が聞こえ、村の者達が揃って家から出ると、山脈があぁなっていまして」
「そうか、俺もドラゴンがこっちへ逃げたのを確認して追いかけてきたんだ」

「「おお！」」
家の、とは言わない。評判に関わるし。他の連中も察して黙ってくれている。
「さてフィーロ、もうお前は十分働いた。ここでアトラとラフちゃんと一緒に休んでいろ」
「ご、ごしゅじんさま」
「もう長距離の移動はない。ガエリオンが逃げた場所は目と鼻の先なんだ。フィーロ、無理をするな」
「でも……フィーロ行きたい」
「ダメだ。無理をしたらそれだけ負荷が掛かる。ただでさえ限界に近いお前をこれ以上連れてなんていけない」
「や、やー！」
フィーロが駄々をこね始める。
どうやって宥めるか。このままじゃ勝手についてくる可能性があまりにも高い。
ポータルでゼルトブル辺りに送りつければ来れないが……うーん。
「フィーロちゃん、ナオフミちゃんはフィーロちゃんの体のことを考えて言ってるのはわかるわよね？」
サディナがフィーロの説得を始める。
「でもフィーロは――」
「みんなフィーロちゃんのことを心配してるのよ？　それもわかるわよね？」
「う……うう……」

両手で顔を押さえ、無力感からかフィーロは泣き出してしまう。
こんなフィーロ初めてだ。見世物にされていた時もこんな泣き方じゃなかった気がする。それほどまでに堪えているのだろう。
「フィーロちゃん、待っててね。絶対にフィーロちゃんがつらいのを止めてみせるから」
メルティがそう説得した。
それが決め手となったのかフィーロは大人しく座り込んだ。
「大人しくしてろ。俺達がサッサと片付けてきてやる」
「ラフー！」
「私もいますわ」
「そうだな。アトラ、それにラフちゃん。フィーロを任せたぞ」
「任されましたわ！」
アトラとラフちゃんが任せろとばかりに応じる。
「よし、じゃあサッサとあのピンポンダッシュを連れ戻しに行くぞ！」
俺達は暗雲立ち込める山に向かって歩き出したのだった。

七話　汚染された大地

「この辺りだったはずなんだが……錬も覚えがあるだろ？」

「あ、ああ……」
山を登ると相変わらず生態系が狂ったままの状況だった。
土地が汚染されているというか、魔力的に何か異常があるのがわかる。
またここに来るなんて夢にも思わなかった。
ウィンディアが村の方を振り返り、思いっきり睨んでいる。一体どうしたというのだろうか？
前に来た時は、道中で遭遇する魔物はフィーロが蹴り飛ばしていたからほとんど戦わなくてよかった。
だけど今回は違う。戦闘で余計な時間を取られる。しかも出現頻度が高い。
『我ここに大地の力を導き、具現を望む。地脈よ我に力を』
「ダークファイアパレット！」
ウィンディアの魔法によって出現した黒い炎で魔物が焼き払われる。
オストが唱えたのとはなんか違う気がするが、雰囲気は似てる。
これが龍脈法か。
「本当に変わった魔法だな」
「うん……あんまり難しいのは教えてもらってないけど、この魔法は周りから力を借りるの」
「へぇ」
「お父さんはもっと難しい魔法を使えたんだけど」
その父親ってのはどんな魔法使いだったんだ？
「もう少し難しいのを使ってもらおうかしら」

サディナがくるくると銛（もり）を回しながら、新しく現れた魔物に向かって先ほどの村で購入した水筒を取り出して構えた。

『我、サディナが聖水の力を引き出し、顕在を望む。龍脈よ我が敵を屠（ほふ）れ』

「セイントアクアブラスト」

サディナがウィンディアと同じような詠唱で光る水の塊を生み出し、魔物にぶつけて仕留める。

「わかる？　周りから力を借りるということは、場所によって相性に問題が出てくるの。その時は自分の所持品を使うことも考えるのよ」

サディナが水筒をウィンディアに渡す。

「中には聖水が入っているから、この地の魔物にはよく効くわ。でも使いすぎたら効果も落ちるから気を付けるのよ」

「う、うん」

「な、なんか凄（すご）いわね」

メルティが見覚えのない魔法に呆気（あっけ）に取られている。

「ああ、メルティちゃんにはもしかしたら合唱魔法を唱えてもらうかもしれないからね」

「え!?」

まあ確かフィーロに合唱魔法を教えたらしいから、できなくはないと思うが。

「大丈夫よ、メルティちゃん。髪の色にまで顕現してるほどの資質持ちでしょ？　頼りにしてるわよー」

「無理無理無理！」

必死に否定するメルティ。やっぱり難しい魔法なのか。
当たり前のように唱えられるサディナとフィーロが特別なんだろうな。
というか、髪の色って魔法の資質に関係していたのか。
「相性抜群だから。メルティちゃん、がんばって」
「うう……」
とはいえメルティのＬｖはそんなに高くない。期待も程々にした方がいいと思うがな。
「その時に備えて、少し打ち合わせしながら行きましょう」
話しながら山を登り、腐竜の死骸が転がっていた場所に辿り着いた。既に三時間も経過してしまった。
「……」
草木一本生えていない。未だにこの地の汚染は続いているのか……。
自分が倒したドラゴンの亡骸を放置した場所を、錬が静かに見つめている。
己の罪を見つめているともとれるが……。
「錬、気を引き締めていくんだぞ」
「ああ……俺は自分が犯した罪を背負って生きていく覚悟を決めたんだ。そのために戦う」
そんな錬をウィンディアが睨んでる……のか？　複雑な感情が入り混じった顔をしている。
怒っているのか悲しんでいるのか、諦めているのか。何か関わりがあると見ていいだろう。
「ガエリオンはどこなんだろうな？」
「……たぶん、あっち」

ウィンディアが山の奥の方を指差す。
それに呼応するかのように黒い霧が立ち込め始める。
「あら——……なんかやばそうね」
「行くしかないだろ」
俺はウィンディアに視線を移す。
「知っているのか？」
「うん……こっち」
ウィンディアはこの辺りの住民だったのか？
例えばドラゴンを信仰する隠れ里の亜人だったとか……で、この地のドラゴンが殺されて里は疫病で壊滅。奴隷として捕まったとか、その辺りか。
さっきの魔法は里独特のもので……。
ラフタリアとかの例があるからな。可能性としてはありえる。
「いた！」
二時間ほど進んだところでウィンディアが振り返って指差す。もちろんこの二時間は魔物との戦闘込みだ。
フィーロの残り時間が少ないというのに、こんなことで時間を食うとは……。
ガエリオンが、洞穴の前で横になっていた。
眠っているのか？　ピクリとも動かない。
物陰に隠れながら接近する。

打ち合わせでは、ガエリオンに接近できたらシールドプリズンで動けないようにしてから近づき、檻が消えると同時に魔法をぶつけて弱らせ、ラトがマヒさせる。
それが失敗したらラフタリアと錬で押さえつけて、俺がマヒしたガエリオンから核を奪って終わりだ。
上手くいけばの話だがな。
シールドプリズンの射程は五メートル。ガエリオンまではまだ二〇メートルある。
もう少し近付かないといけない。
ステータス魔法で確認する限り、Lvは55。フィーロから20Lvも吸い取ったのか。
しかもまだ奪い続ける気か。果てしないな。
「ギャオオ！」
パチッと目を覚ましたガエリオンが洞穴の中に入ってしまった。
「チッ！」
失敗か。とはいえ洞穴の脇までの接近は容易になった。
洞穴の壁を背に様子を見る。ガエリオンは洞穴の中で何かをキョロキョロと探しているようだ。
「何をしているんだろうな？」
「たぶん、宝を探しているんだと思う……村の連中に取られちゃった宝を」
「ガエリオンの体を乗っ取っている核はそこに未練を感じているのかしらね」
「俺が……殺した所為で――」
ウィンディアが錬をなじる。

「ウジウジうるさい！　盾の勇者の言う通り、乗り越えなさいよ！」
「……ああ、わかってる。だけど……」
「ああもう！　さっさと行こう！　ほら！」
ウィンディアが錬を引っ張っている。まあ確かにウジウジと悩まれるよりはそっちの方がいい。
「よし、行くぞ」
と、俺達が接近しようとした矢先。
「ギャオオオオオオ！」
ガエリオンが咆哮する。すると全身から黒いヘドロのようなものが噴出した。
ドクン！
盾がその咆哮に合わせて脈動する。
な……なんだ!?
最初にガエリオンが咆哮した時には何もなかったのに。
「……尚文様」
「……ラフー！」
声に振り返ると、目が虚ろなフィーロに引っ張られてアトラとラフちゃんが来ていた。
「アトラ!?　どうしてこんな所まで来たんだ！」
フォウルがアトラを見て驚きの声を上げる。
「お前等一体どうしたんだ！」
「尚文様達が出発なさってしばらくした頃、突然フィーロさんが苦しみ始めて、私達の制止も聞か

ずに走り出してしまいまして」

「ラフ、ラフラフ！」

ラフちゃんが必死にフィーロを我に返らせようと顔をバシバシ叩いているが、フィーロは朦朧としていて反応を返さない。

「時々フィーロさんが我に返って引き返そうとしたのですが、その度に何かに引き寄せられるように力が流れ込んでいるようで、すぐにこうなってしまうんです」

「途中の魔物とかはどうした？」

「それが逃げるように距離を取られていたので、戦闘はありませんでした」

く……フィーロの全身には腐竜の核が湿潤しているそうだからな。

もしかしたらその所為でか？

こんな汚染された土地じゃポータルは使えないし……くそ、事前にフィーロを村の方へ飛ばしておくべきだった。

盾は変な鼓動をしているし、ガエリオンは目の前だし、弱ったフィーロまでいる。

どうしたらいいんだよ！

「うう……」

「フィーロ、俺がわかるか？」

「ご、ごしゅじん……さま。メルちゃん」

「そうだ。俺はここにいるから離れていろ。お前が今ここにいると、何が起こるかわからないんだから」

「フィーロちゃん！」
「う……フィーロ……怖い。フィーロの中から何かが……うう……いや、うううううう」
フィーロが胸を押さえて苦しみ始めた。
そしてガエリオンと同様の黒いヘドロが噴き出した。
「うわ！」
「キャ！」
「ラフー!?」
フィーロを押さえていたアトラとラフちゃんが弾き飛ばされる。そして黒いヘドロがフィーロを包んだまま、ガエリオンのいた場所のヘドロへと向かってかなりの速さで蠢き始める。
「急いで止めるんだ！」
こりゃあ雰囲気的にフィーロを含めて何か嫌なことが起こる前触れに違いない。
「で、ですがフィーロまで巻きこんでしまいますよ！」
「そうだ！」
ラフタリアと錬の迷いに俺も内心、同意する。
あのヘドロを攻撃しようものならフィーロにも攻撃が当たりかねない。
かといって阻止する手は……無いのか？
「サディナ！　雷の魔法で痺れさせられないか？」
「やってみるわ！」
サディナが高速で魔法を詠唱し始め、銛をフィーロを包むヘドロに向ける。

「ツヴァイト・サンダーボルト！」
フィーロを包むヘドロにサディナの魔法が命中する。
が、ヘドロは僅かに震えただけで歩みを止めない。
サディナが聖水の入った水筒を使って再度魔法を展開させる。
今度は龍脈法の方か。
『我、サディナが聖水の力を引き出し、顕在を望む。龍脈よ我が敵を屠れ』
「セイントアクアブラスト」
サディナの手から魔法が紡がれてヘドロに水の塊が命中する。
「――――！」
おお！　効果がありそうだ。
「やっぱりそうね。アレは呪いをもとにしたものよ。普通の攻撃じゃ祓えるものじゃないわ」
「どうすればいいんだ？」
「媒体になっているフィーロちゃんを……」
「そんな……」
「できるわけないだろうが！」
「それができないのなら、神聖魔法の類で攻撃するしかないわね」
エクレールが一歩踏み出し、小剣に手を添えて魔法剣にする。
「では私が行かせてもらおう！　ハァ！」
そういえばエクレールは光属性の魔法資質を持っているんだったな。

「私もやってみます！」

ラフタリアも光と闇の混合で幻の魔法資質を持っている。

エクレールほどじゃないが、使えるということか。

「ライトスターダストブレイド！」

エクレールの鋭い突きとラフタリアの刀から飛び散る光の星がヘドロに命中する。

エクレールの剣は……ヘドロを若干散らすことができ、ラフタリアの方は大きく散らしている。

「――!?」

が、ラフタリアは刀を最後まで振るわずに戻してしまった。

「これ以上やるとフィーロを倒してしまいかねません。ヘドロが散って中のフィーロが見えたのですが、星が当たる度に苦しんでいるようでした」

俺は砂嵐が浮かぶフィーロのステータスを確認する。

するとフィーロの生命力が大きく減っていた。

くそ、どうにか止められるかと思ったんだが。

「それでもヘドロの動きを止めるんだ」

「尚文！　ガエリオンの方のヘドロが！」

俺が視線を向けるとガエリオンを包んでいたヘドロが凄い速度でフィーロを包むヘドロにぶつかってきた。

く……阻止できなかったか！

ぐにぐにと二つのヘドロが一つになって混ざり合って膨れ上がっていく。

「ちょっとこれってやばそうねー。少し距離を取りましょう」
「ガエリオン！　聞いて！　ねえ！」
「下がれ！　死にたいのか！」
だが、俺の盾の脈動は強まり続けている。
盾から黒い何かが溢れ出てガエリオンを取り囲む。
そして辺りの大気というか汚染された何かすらもガエリオンは吸い込み始めた。
ボコボコと音を立ててガエリオンの全身が少しずつ巨大化していく。
「かなり危険な感じがするのだが、ラト、何かわからないか？」
「わかるわけないでしょ！　伯爵の盾が余計なことをしているんじゃないの!?」
「そうなんだが……どうも盾から鼓動がする」
撤退した俺達を追って、ヘドロが洞窟から這い出してきた。
そして明確な姿となった。全長は二〇メートルにまで巨大化し、本格的なドラゴンとしてその場に君臨する。
目は闇色に染まっていて、表情はわからない。
ガエリオンであったことを示す共通項を見出すこともできなかった。フィーロは……どこだ。
く……フィーロ。生きていてくれ！
「GURUUUUUUUUU……」
ガエリオンが大きく息を吸う。
このモーション。絶対にブレスだ。

「お前等、下がっていろ！　流星盾！」
俺は流星盾を展開させて、ブレスに備える。他の奴等は俺の後ろで攻撃に備えた。
サディナが二つ目の水筒を取り返して魔法を唱え始めている。
『我、サディナが聖水の力を引き出し、顕在を望む。龍脈よ我等を守れ』
「セイントアクアシール！」
サディナの唱えた魔法が俺を取り囲む。
「ナオフミちゃん、万が一に備えて炎の耐性と呪い対策をしておいたから」
「助かる」
一射目を耐えれば勝機はある。なに、霊亀ほどの強さはないだろう。
ガエリオンの口から黒色の炎が吐き出され、俺達に向かって飛んでくる。
流星盾が一瞬で溶解した。
な、なに！　霊亀の踏みつけさえ多少は耐えたのに、一瞬で溶けただと!?
その炎が俺に向かって飛んでくる。エアストシールド、セカンドシールド、ドリットシールド、Eフロートシールドも展開し、耐える。
全身を焼き尽くす痛みに意識が飛びそうになる。
出力だけなら霊亀の電撃に匹敵するぞ！
「ナオフミ様！」
「くう……なんだこの威力……」
「セイントアクアシールが剥げてる……なんて威力のブレスと呪いなのよ」

なんとか耐えきれた俺は回復魔法を唱えてガエリオンを睨みつける。
これは……間違いない。ダークカースバーニングSの炎だ。
おそらく、俺が目の前にしているのはガエリオンの形をした……ラースシールドと同等の能力を持つ化け物だ。
しかもフィーロまで取り込んでいるとなると、霊亀よりも厳しい相手かもしれない。
撤退を視野に入れないといけないぞ。
「ラト、あれを弱らせて腹の中から核とフィーロを取り出せるか？」
「……食われるわよ？」
「だろうなぁ。誰かがガエリオンの腹を切った方が早そうだ」
ウィンディアも必死にガエリオンに呼びかけるけど効果はないようだ。アニメだったら……少しは効果があるはずなんだけど。
「もはや遠慮なんてしている暇はない！　ラフタリア、錬、みんな一斉に奴を攻撃して弱らせろ！」
「はい！」
「わかっている。フィーロもガエリオンも救うために俺は最善を尽くす！」
「もちろんだ！」
「と、とんでもない化け物だ！　こんなのに俺達は勝てるのか!?」
フォウルが今更になって尻ごみしている。
「何を言っているのですかお兄様。尚文様の命とあらば配下である私達はその身を賭してでも使命を達成する義務があるのですわ」

「アトラにそんな真似させられるか！」
お前等……こんな時にまでコントをしているんじゃない！
「ここで薬物投与をして止まるかしら？」
「サディナの雷の方がまだ足止めできそうだな」
「あら〜？　お姉さんがんばるわよ〜」
はしゃぐのはいいからさっさと攻撃に参加してくれ。
とにかく、どれだけ強力だろうとラフタリアと錬の二人の高火力に敵う奴はいないだろう。
そういう意味で錬が戦力になるのは助かるな。
「いけ！」
俺の号令にラフタリアと錬が腰を深く落とし、急接近してそれぞれの武器でスキルを放つ。
やはりというか、呪いとはいえ戦闘には支障のないものなので、ちゃんと強化した錬の方が速い。
「スターダストブレイド！」
「流星剣！」
実質同じスキルが、双方クロスするように放たれ、ガエリオンに向けて流星が飛び散りながら飛んでいく。
もちろん二人共各々の武器でガエリオンの肩目掛けて切りつけた。錬はガエリオンの鱗、ラフタリアは肉まで切り裂いたところでチェインと火花が散って弾かれ……た!?
ただ、ラフタリアの攻撃の方が深く入り、黒いヘドロのようなものが飛び散っている。
「なに!?」

「か、硬い！」
「て、手が……」
ラフタリアと錬がそれぞれジーンとした手を震わせて、反撃しようと大きく手を振るったガエリオンの薙ぎを避けながら戻ってくる。
「待て待て……」
錬とラフタリアは一応勇者といっていいわけで、しかも本気の一撃だったんだぞ？
にもかかわらず武器が通らなかったってどういうことだ？
「雷撃銛！」
高らかに跳躍したサディナがガエリオンの腹部目掛けて銛を投げる。その瞬間、稲光がガエリオンに命中し、目が眩む。
雷の速さで銛はガエリオンの腹部に命中した……はずだった。
だが、サディナの放った銛はガエリオンの腹に刺さらず、俺が盾で防御した時のような音を立てて跳ね返って飛んでいった。
「あらー……お姉さんの決め技が刺さりもしないわねー」
着地したサディナが銛を掴んでバックステップをしながら戻ってくる。
「錬とラフタリアの攻撃で通らなかったんだぞ!?　お前でも無理だ！　フォウル、アトラも下がれ！」
おかしいぞ。
錬にしろラフタリアにしろ、呪いを受けちゃいるがここまで硬いということがありえるのか？
目が眩んだガエリオンが両手で目を押さえて呻く。

魔法でどうにかなるかを試すのも手だけど……結果は芳しくなさそうだ。
だが、ここで手を拱いていても好転はしない。
「くっ……速い……」
そして、もっとも厄介なのがガエリオンの動きが速いこと。
俺やラフタリア、そして錬がやっとのことで追いつけるほどの速度で襲いかかってくるのだ。
俺が前に立って、ガエリオンのツメを受け止める。
ぐ……ガエリオンのツメが俺の肩にめり込んでくる。
地味に火力もあるようだ。まあ、それでも俺に致命傷を与えるには足りないのが救いか。
ガエリオンが大きく息を吸って、再度ブレスを放とうとしている。
「させるか！　全員、俺の後ろに隠れろ！」
「はい！」
俺の指示に全員が俺の後ろに集まる。でなければ格好の的だからな。
霊亀の電撃に匹敵する高火力のブレスなんて、盾の勇者以外の奴が当たったら蒸発する。
業火と言えるほどの炎が俺を焼き尽くさんと放たれる。
「伯爵！　ツヴァイト・ヒール！」
ラトが俺の傷を癒す。
俺以外の回復役がいると助かるな。
「こりゃあ合唱魔法で行くか？　サディナ！」
「だけどナオフミちゃん。ナオフミちゃんが魔法支援に入ったら誰が守るのかしら？」

確かに、今の俺は合唱魔法に参加しながらみんなを守る余裕はない。
地味にガエリオンの力が強くて魔法の方に意識を集中したら振りほどかれる。
みんなに避けさせるにしてもメルティやラト辺りに不安が残るな。
錬が俺の代わりに守ってくれればいいが、心許ない。
「じゃあメルティちゃん、ウィンディアちゃん！　ガエリオンちゃんの足止めのために合唱魔法を唱えるわよ！」
「わ、わかったわ！　フィーロちゃんを絶対に助けてみせるんだから！」
「尚文！　来るぞ！」
手を押さえつけられたガエリオンが、不快感を露わに俺に食らいついてくる。
俺は片方の手をツメから離して足と手でガエリオンの噛みつきを受け止める。
「凄い……」
錬がそんな俺を見て声を漏らす。
「余裕があるなら戦え！」
「ああ！」
錬が俺の後ろから飛び出してガエリオンに剣を振りかぶる。
「ドラゴンバスター！」
剣から炎が発生して、竜の形を成して飛んでいく。
初めて見るスキルだな。きっと竜に特効とかだろうな。
「ＧＵＲＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵ！」

ガエリオンのターゲットが錬に移る。
いや、錬を狙っている？
錬に殺された竜帝の欠片の意志が錬に復讐しようとしている、とかだろうか？
「錬、避けきれないと判断したら俺を盾にしろ」
「ああ！」
ヘイト……ガエリオンの注意は基本的に錬に向くようだ。
だが、俺が守らねば錬の防御力では危ない。
なんていうか期待したよりも錬の戦闘力が低い。
速さに関しても速いといえば速いが、俺の三分の二くらいしかないように感じる。
ワンテンポのズレがあるんだ。
これが呪いの所為なのか、なにかしらの要因があるのかわからない。
「ラフー！」
ラフちゃんが援護とばかりに幻覚魔法を使って、錬が増えたように見せかけてガエリオンの注意を分散させる。そのお陰で錬も安全に攻撃できているようだ。
『呪いの大地、その呪われた龍脈の流れを、鬱血した血を吐き出すために、我等……』
見るとメルティ、サディナ、ウィンディアが声を合わせて魔法を詠唱していた。
キラキラと周りに蛍のような光が集まっていくのが見える。
「GURUUUUUUU……」
させるかと言わんばかりにガエリオンは、ブレスを吐くために息を大きく吸い込む。

俺はメルティ達を庇うために前に出て盾をかざす。
するとガエリオンは高く跳躍し、こちらに向けて口を開けた。
そう来るか！
「流星盾！　エアストシールド！」
エアストシールドで出た盾を足場にしてブレスからメルティ達を庇う。
ぐ……全身を焼かれて火傷ができる。
呪いの炎は、元々呪いで弱っていた俺の体に追加で痛みを与えてきた。
ガエリオンは追撃とばかりに圧し掛かってツメを突きたてる。このまま噛みつく気だな
『龍脈よ。我等の願いを聞き届けたまえ。力の根源たる我らが願う。真理を今一度読み解き、我が前の害を乗り越える力を！』
光が集約し、三人が意識をこっちに向けているのがわかる。
「最初は驚くだろうけど落ちついてね。絶対大丈夫、お姉さんを信じて！　さあ、メルティちゃん！」
「合唱魔法！」
「大海原！」
「『ゼー・ヴィレ！』」
それぞれが唱える魔法が違うような気がするのは気のせいか？
メルティ達を中心に、突如、水が周りに出現した。まるで巨大水槽だ。
……ガボガボとガエリオンが苦しそうに水槽から泳いで逃げようとしている。

前にコロシアムでも似たような状況になったことがあった。
あの時と違うのか？
なぜか……錬もガボガボともがいてる。
「ゴボボボ……」
……そういや錬はカナヅチだった！　錬は泳げない！
「レンちゃん、大丈夫よー？」
サディナが溺れる錬を抱き寄せて俺の元へ連れてくる。
「敵と認識していない相手には効果がないから大丈夫」
「え？　あ……」
ああ、相手を窒息させるとかもできるのか。
「はぁ……はぁ……もうだめ」
「うん……」
メルティとウィンディアが座り込んで呼吸を荒げる。
俺は魔力水を盾から出して二人に投げ渡す。
「まあ、そうよねー……じゃあお姉さんががんばっちゃおうかしら」
ボコッと、サディナは魔法で生み出された水槽内に浮かびあがって、逃げようともがくガエリオンに向かって泳いでいく。
凄く速い。もがいて水槽から飛び出したガエリオンが炎を吐こうとするその目の前に、水面から勢いよく水を巻き込んでサディナが飛び出す。

その姿は水で作られた東洋の龍。
「激龍双刃！」
ドボンと音を立てて、ガエリオンが水槽に再落下して沈んでいく。
ダメージは入っているのか腹部から血が滴る。
「ガエリオン……」
ウィンディアが小さく呟き、立ち上がって叫んだ。
「ガエリオーン！」
「もういっちょ！　逆叉撃！」
サディナの纏う水流が尻尾を形作ってガエリオンの腹部に命中する。
「……頑丈ねー」
「私達も行きましょう！　この隙にサディナ姉さんはナオフミ様と一緒にあの魔法を」
ラフタリアが錬と一緒にガエリオンに近づいていく。
「わかったわー」
「ガエリオン！」
ウィンディアが何度も呼びかける。
「お願い！　戻ってきて！」
「おい！　待て！」
ウィンディアは俺の制止を振り切ってガエリオンの前に走っていく。
気持ちはわからなくはないが、状況を考えろ。

「ＧＵＲＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵ……」
「ガエリオン……ねえ！　お願いだから元に戻ってよ！」
ウィンディアの言葉が辺りに響く。だが、ガエリオンの耳には入っていない。
俺は急いで駆け出し、ウィンディアを助けるために前に出ようとする。
それよりも早く、ガエリオンが大きく口を開いて、ウィンディアに襲いかからんとした。
「エアスト――」
咄嗟にエアストシールドを唱える。
が、その前に――
「……お父さん！　もう、やめて！」
ウィンディアが声を張り上げて呼びかけた。
「ＧＵＲＵ!?」
その言葉でガエリオンの動きが止まる。

八話　魔竜

「お父さん？」
「え？」
「薄々は思ってたけどやっぱりそうだったのね」

納得したようにサディナとラトが頷きながら呟く。

「うん。私のお父さんは……ここを縄張りにしてたドラゴンだったの」

と、ウィンディアは頷き、ガエリオンに向けて喋る。

え？　ウィンディアってドラゴンに育てられていたわけ？

というか、ウィンディアってどう見てもキールと同じくイヌ系の亜人で、竜の要素がないんだが。

まあ、髪型が若干変わってるなーとか思ってはいた。犬のようなトカゲのような変な髪型だし。

そもそも腐竜……じゃないな。この場合、生前の竜が親になるのか？

「そんな……じゃあ……俺は……」

絶句する錬をウィンディアは睨みつける。

「ウジウジうるさい！　……今は黙れ！」

あー、だから錬のことを時々睨んでいたわけね。

で、錬の被虐願望に苛立っていたわけか。

「本当に稀にね、あるのよ。野生の魔物が人間や亜人の子を育てていたって話。大体が狼系の魔物かドラゴンなんだけどね」

「なんだその狼少年的なフレーズ……」

「もうやめよ……お父さん。もう、ここには何もないの。お父さんは全てを奪った勇者が憎いかもしれない。だけど、それで他の誰かに迷惑を掛けちゃ、ダメだよ……取り返しがつかないことをするのはもう、やめて！」

「GU……」

ガエリオンがウィンディアの言葉で苦しむように呻いて下がる。
聞きたくないと言わんばかりに両の手で耳を塞ぐ。
「いつまでも、私は引きずってた。私の幸せ、お父さんの幸せを壊した勇者を許せないって。だけど、盾の勇者は……違うの。村のみんなは優しかった。私に鞭を打つこの国の人とは違った。お父さんの宝を奪って笑った村の奴等とは違うの！」
涙を流しながらウィンディアは思い出話を語るように説得を試みている。
その声が届いているからこそ、耳を塞ぐ……のだろうか。
まさかドラゴンが亜人の子を育てるとはねー……成熟したら犯すつもりで、とか考える俺はゲームに毒されすぎか？
「お願い、その子に体を返してあげて……、その子は……お父さんと同じ名のガエリオンはまだ生きているんだから！　それにフィーロちゃんから奪った力も、返して……お父さんはもう……ここにいちゃいけないんだよ！」
「GYAOOOOOOOOOOOOOO！」
ガエリオンがガリガリと額を引っかき始める。
上手く説得が成功したか！
そう思った瞬間。
「危ない！」
鎌が飛び出してガエリオンのツメからウィンディアを守る。
「ガエリオン！」

説得失敗か。そんな上手く話が終わるはずもない。
奴の体内にはフィーロまで捕らえられているんだ。
「失敗か……ウィンディア！　俺は――」
「離して！　ガエリオン！　話を聞いて！　お願いだから――」
そこでウィンディアは信じられないものを見たかのように動きを止める。
「貴方は……誰？　ガエリオンじゃない！」
「は？」
ウィンディアが敵愾心を強めながらガエリオンを睨みつける。
「さっきまでいたガエリオンとお父さんの残滓をどこへやったの！」
必死に説得していたその姿とは打って変わって激怒しているように見える。
俺は巨竜となったガエリオンの方に視線を向ける。
すると全体的に黒かった身体が紫色に変異しながら、所々で溢れていた黒いヘドロが消え去っていく。
「ほう……小娘、我に気付くか」
その声に俺も相手を睨みつける。
ウィンディアの生前の養父が喋っているのかとも思ったが、ウィンディアの様子を見るとそうではないようだ。
目の前の敵が何者であるのかを確認する必要があるな。
いや……この声、聞き覚えがあるぞ。

アル・サクリファイス・オーラを唱えた時に囁かれた声と同じだ。
「お前は何者だ！」
俺が殺気を放ちながら尋ねる。
すると目の前の巨竜は悠々と胸を張るかのようなポーズで冷淡に俺達を一瞥してから答える。
「ふむ……まずは自己紹介をすべきか」
目の前のドラゴンはそう呟いてから胸に手を当て、キザったらしく一礼する。
「我は此処とは異なる世界で竜帝であった……『魔竜』とも呼ばれていた、魔物を統べる者也。盾の勇者よ。汝も聞き覚えがあるだろう？」
俺の脳裏に絆達の世界での出来事が浮かぶ。
同時に魔竜という単語……俺やラフタリアが愛用している武器に使われている名前だ。
魔竜は俺に尋ねてきた。会話が成立するなら糸口がないわけじゃない。
「ああ……お前は確か、絆の世界で世界を征服しようとしたと言われていた奴で間違いないな？確か絆達に倒されたと聞く」
俺の言葉を肯定するように魔竜は頷く。
「よく理解しているようでなによりだ。そうだ。我は狩猟具の勇者一行によって一度は野望を打ち砕かれた」
「その魔竜とやらがどうしてここにいる」
「フ……盾の勇者よ。汝は心当たりがないとでも言う気か？」
……凄く嫌な予感がする。

ロミナに作ってもらったバルバロイアーマーに使われた竜帝の核石は腐竜の核石に魔竜の核を混ぜ合わせたものだと聞いた。そして竜帝というのはラトやウィンディアの話やガエリオンの状況から見て意識の感染を起こす。

その結果、俺達が所持していた欠片から魔竜が暴走したガエリオンを乗っ取っても不思議ではない。

「俺の盾や鎧に使われた核石を経由してガエリオンの体を乗っ取ったということか」

「理解が早くて助かるな、盾の勇者よ」

「で？　暴走した俺の馬鹿竜をお前が抑え込んでくれた……わけじゃなさそうだな」

「ご名答。やっと自由に動かせる体を手に入れたのだ。むざむざ明け渡すと思うてか？」

どうやら俺達に対して友好的ではないようだ。

となると、ただ暴走していた奴と戦うよりも厄介なことになる可能性が高い。

「フィーロちゃんはどこへやったの！　返しなさいよ！」

そこにメルティが一歩前に出て怒鳴る。

「ああ、この世界でフィロリアルと呼ばれる魔物のことか」

ミチミチ……と音を立てて魔竜の胸辺りがぱっくりと裂けて何かが露出する。

フィーロが触手に縛られているのが見える。

両手両足を縛り上げられ、まるで体の一部であるかのように、鼓動する心臓に縫い付けられているように見える。

ドクンドクンと脈打つその鼓動に合わせ、フィーロが呻いているようだ。

触手がフィーロから力を奪うかのように光り、脈動している。

「く……うう……」

「フィーロちゃん！」

メルティが一歩踏み出すよりも早く、魔竜が無詠唱で魔法を唱えてメルティの足元に黒い光線を放つ。

「危ない！」

咄嗟にメルティを引きよせた。

あっちも当てる気はないようだが、メルティの飛び出し方があまりにも大きかったので危うい。

「ナオフミ！　離して！　フィーロちゃんが！」

「落ちつけ！　やみくもに突撃したって返してくれるとは思えない」

俺の言葉に同意するように魔竜は手を胸に当てた。

「うう……メルちゃん。ごしゅじんさま……くるしい……」

フィーロが薄眼を開けて俺達の名前を呼ぶ。

だが、魔竜は返すつもりなど毛頭ないらしく、うすら笑いを浮かべている。

「ご名答。我に力を供給する贄をむざむざ返すものか」

「やー……うう――」

曝け出していたフィーロを魔竜がメリメリと胸の奥深くへと戻してしまう。

「フィーロちゃん！」

メルティがフィーロに手を伸ばしたが空を切る。

俺はメルティを押さえたまま魔竜を睨む。

「はいそうですかと俺達が引き下がると思っているのか？」

「もちろん、我とてこのまま汝等を逃がすつもりはない。だが……一つ取引をせぬか？」

「……何が望みだ？」

大体こういう時の交渉というのは碌な提案ではない。

かの竜繋がりで有名な取引用語というと『手を組む代わりに世界の半分を与えよう』とかだしな。

仮に受け入れるとバッドエンドだ。

だが、話が通じる相手ならば少しくらいは聞いてもいいだろう。

「我の野望は世界を支配すること。虚弱で理を理解せぬ身勝手な人間共が、なぜ世を牛耳っていなければならぬのだ」

「よくある常套句だな。人間が世の中の支配者ではない、と異議でも唱える気か？」

お約束すぎるだろ。ありきたりすぎて呆れたぞ。

「汝もわからぬか？　身勝手に召喚しておきながら、気に喰わないから、などという理由で罠に掛け迫害したこの世界の者達の傲慢さが」

「……」

そりゃあ、俺が今まで感じてきた理不尽さそのままだもんな。

「そんな奴等が我が物顔で世を統治している。汝の奥底ではそれを許されざる蛮行だと感じていると、我は盾の中で理解したぞ」

「まあ、否定はしない」

身勝手な……困ったことがあると勇者頼りの腐りきった世界だと思う。
もしも叶うとしたら使命なんて放棄してサッサと元の世界に戻って全てをなかったこと、夢の中の出来事にでもしたいところだ。
「もちろん、波にも我は対処しよう。世界が滅んでは我も困るのでな。だが、それは我が支配した世界での話だ」
前置きは悪くはない。だが、良い話には裏がある。
フィーロを贄と呼んで力を吸い取っているし、ガエリオンの体を乗っ取っているのがなによりの証拠だ。
「ナオフミ様……」
ラフタリアが暴れるメルティを宥めつつ俺の肩に手を乗せる。
わかっている。
腐りきった世界だけど、そんな中でも精一杯がんばっている連中だっているんだ。
ふざけた野郎は死んでもいいが、守らねばならない連中だっていることを、俺が理解していないはずはないだろ。
「傲慢な奴だ！　アトラ、アイツを倒せばいいのか！」
「お兄様、ダメですわ」
前に出ようとしたフォウルの腹をアトラが突いて妨害する。
「ぐ……アトラ、何をする」
「やはり今の私達で敵う相手ではありませんわ。今は機会をうかがいましょう。そう、尚文様の指

示があるまで待っているのです。それまでできる限り力を溜めるのですわ」
　そう言って、アトラは意識を集中しだした。
「あ、アトラ？」
　アトラの集中はかなりのもので、フォウルの声など聞こえないとばかりにじっと立っている。
　その位置は……俺の後方二メートルくらいのようだ。
「前置きはサッサと終わらせて条件を言ってみろ」
　交渉決裂による戦闘続行になるとしても、聞いておいた方がいい。
　問答無用で片付けるにしても、相手が強すぎる。
　錬とラフタリアの攻撃が通らないんだ。
　これだけの強さ……何かしらの手段があると見ていい。
　それを会話から読み取れたなら、取るべき手はきっと見つかる。
「話が早くていいな。取引の内容は汝等、盾の勇者以外が我に忠誠を誓い、従属することだ。そして我の野望を打ち砕いた狩猟具の勇者とその仲間達の息の根を止める！」
　話にならない。
　これだけ前置きをして俺達に従えとは笑わせる。
　竜としては強かったみたいだが、為政者の才能は皆無だな。
　だが、俺以外が忠誠を誓うとはどういうことだ？
「それでこの場にいる連中が頷くと思っているのか？　というか俺以外とはどういうことだ」
　俺の問いに周りにいる連中が魔竜を睨みながら頷く。

こういう場合、代表である俺に忠誠を誓わせる、とかだろ普通。
すると魔竜は俺を蔑むわけでもなく……なんだろうか、背筋が凍りつくような……まるで空腹の魔物が獲物を見るような目つきで俺を睨む。
「我の贄となったフィロリアルと同じく、我の力の源となる者に了承など必要か？　汝はフィロリアルと同じく我の一部として未来永劫、我に力を供給し続ければいいのだ。腐りきった人間共への共通の復讐を我が達成してやろう」
「ゲ!?」
つまりコイツはフィーロと同じく俺を取りこんで力にするつもりか！
「そもそも、我の力の源がフィロリアルだけだと思うてか？　汝の憤怒の感情が、我に力を供給し続けるこの状況を理解せよ」
「まさかアトラさんが言っていたナオフミ様から増幅して漏れ出している力というのは……」
「これだからドラゴンは……」
ラトが呆れたような声を上げ、ウィンディアが睨む。
俺は盾に目を向け、憤怒……ラースシールドの項目に目を向ける。
ザザッと砂嵐が浮かんでいた。
魔竜となる前のブレスといい、奴はラースシールドの特徴を多分に含んでいる。
つまり、俺さえも媒体にしてその強大な力を維持しているに違いないんだ。
その大本である俺をフィーロと同じく取りこんで力を吸収しようとしている。
「ふざけるなよ！　誰がそんな話を受け入れると思ってんだ！」

「もとより抵抗されるのは理解している……これは交渉ではない。強者が弱者に行う搾取だ」
魔竜は雄たけびを上げると同時に魔法を多重展開して俺達に降り注がせる。
「く！　尚文を奪われてたまるか！　流星剣！」
「そうだ！　イワタニ殿をそんなくだらない野望の犠牲にしてたまるものか！」
錬が流星剣で魔法を迎撃し、エクレールが光の盾を出す魔法を唱えて僅かでも俺を守るための壁を作る。
「そんなこと、断じてさせられません！」
ラフタリアも魔法剣でライトスターダストブレイドを使って魔法を叩き落とした。
「フィーロちゃんを返しなさい！」
同様に火事場の馬鹿力でも出ているのかメルティが魔法を素早く唱えてぶつける。
「く……攻撃が命中しても火花しか散らすことができない」
錬の火力は一応、魔竜の攻撃を上回っているのか、魔法自体の迎撃はできている。
だが、魔竜の装甲を貫くには足りない。
「ナオフミ様、みんなをお願いします。レンさん、接近戦を仕掛けましょう」
「おう！」
ラフタリアが錬に指示を出し、腰を低く落として突撃した。
「はぁあああああ！」
とても鋭い突きだ。錬も合わせるように駆け出して大きく剣を振りかぶる。
「雷鳴剣！」

雷が錬の剣から発生して魔竜に向かって降り注ぐ……のだが、魔竜の鱗に傷一つ付けられない。
が、ザシュッとラフタリアが何かを切ったような音が聞こえる。
見ると、魔竜が纏う黒い……瘴気とでもいうのだろうか、それを切ったようだ。
「ぐぬ……では我も反撃ということをしてみようではないか！　倒れるなよ？　我自身の強さを測りたいのでな」
魔竜の奴、傷一つないのにうめき声を上げた？　何をラフタリアは切ったんだ？
わからないが、効かないわけじゃないようだな。
バサァッと魔竜が浮かび上がり、黒い炎を撒き散らしながら太陽の如く光り輝く！
「ラフタリア、錬！　下がれ！」
エアストシールドとセカンドシールドをラフタリアと錬を守るように展開して攻撃に備える。
俺の指示に合わせ、ラフタリアと錬が下がる。
そうだ。それでいい。
「その身に刻み込め！　煉獄の炎！　プロミネンス・ダークノヴァ！」
カッと魔竜が口を開くと、胸の中心に……黒い太陽が形成されて俺達目掛けて炎を降り注ぐ。
俺は盾を上空に向け、Eフロートシールドと流星盾、ドリットシールドを展開。
「メルティ！　サディナ！　誰でもいいから防御魔法をできる限り唱えろ！」
「は、はい！」
メルティが頷き、他の連中も合わせる。
灼熱の黒き太陽の炎が降り注ぎ、破裂する。

ぐ……過去に儀式魔法『裁き』を受けた時よりも重い威力のある攻撃と、呪い効果が付与された炎が俺を焼きつける。

じりじりと皮膚が焼けていき、痛みが遅れてやってくる。

「ナオフミちゃん！　がんばって！　セイントアクアシール！」

サディナが聖水を使って俺が受けるダメージを減らしていく。

そう、この炎は回復遅延の効果があるのがわかる。

大本が俺のラースシールドならば間違いはない。呪いに対して聖水が大きく効果があるのは明白だ。遅延効果の発生する呪いがなければ回復が間に合う。

ラトが多少だが回復魔法を掛けてくれているお陰でな。

やがて炎が晴れると、俺がいた場所よりも前方は焼け野原と化していた。

「ふむ、汝を殺しては我も供給源を失うようなものだ。決め手に欠けるのが今の攻撃の難点だな」

「ぐ……」

回復魔法を自分でも掛けて、戦闘継続を図る。

奴は俺を弱らせて取り込もうと思っているに違いない。

「尚文、奴の目的はお前なんだ！　絶対に前に出るんじゃないぞ！」

「ナオフミ様！　剣の勇者の言う通りです！　気を付けてください。あの方の目的はナオフミ様を弱らせることで間違いありません！」

大技を放った隙を利用してラフタリアと錬が飛び出して再度攻撃を仕掛ける。

先ほどの攻防の際、錬の攻撃とラフタリアの攻撃が重なり合った時、僅かに魔竜の鱗に傷が入っ

たのが確認できた。
ここで俺ができることはないのか？
サディナとの合唱魔法、雷神降臨をラフタリアと錬に使えば攻撃力を更に強められるだろう。
俺の意図を察したのかサディナが頷いて俺の手を握る。
だが、俺にはこれしかできないのか？　という思考が脳裏を過る。
盾職ができることといったら相手の攻撃を受け止め、味方の攻撃のために隙を作ること。
余裕があったらメンバーの補佐をして、仲間が死なないように守る。
これは今までも当然そうしてきた。他にやることはない。
「ふむ……まだ力が足りんか。ではやるとするか」
魔竜がそう言うとなにやら意識を集中し始めた。
自然と動きが緩慢になるが、ラフタリア達も決定打を出せない。
俺からも能力を吸っているとなると……ん？　能力を吸っている？
ラースシールドの能力が備わっていると見ていいだろう。
今の錬はちゃんと強化方法を実践している。にもかかわらず攻撃が通らない。
それだけの防御力を持っている奴が俺以外にいるとは思えない。
奴はラースシールドを媒介にしていると言っていた。
ならラースシールドの強化を失敗させてみるのはどうだ？
「ちょっとアイツの力の源になっているであろう盾の強化を失敗させてみる」
すると錬が振り返って頷く。

「なるほど！　その手があったか！　尚文、ぜひとも挑戦してみてくれ！」
「ど、どういうこと!?」
「強化には失敗が付き物だ。ワザと失敗させればラースシールドは弱体化する。つまり奴の力の源となっている俺の盾が弱くなる。ということは？」
「あのドラゴンも弱体化するってことね！」
「ああ、もしも奴が俺の盾から防御力を得ているのならそれで攻撃が通るように……なるはずだ！」
そう結論付け、盾を強化しようとしたその時！
「我がそれを見込んでいないと思うてか？」

九話　強制強化

「なに!?」
俺の盾に魔竜の唱えた魔法の文様が出現する。
俺の視界に勝手にラースシールドの強化画面が現れた。

ラースシールド＋7→＋8の強化をしますか？

は？　まて！　俺は何もしていない！
勝手に『はい』が選択され強化された。
「何をした！」
「フフ……何が起こるのかわからないほど愚かでもあるまい。我も賭けに挑戦しようではないか」

警告、失敗時、強化値が0に――

確認を無視して更に『はい』を指示される。カンカンと頭に強化マークが出る。

＋8の強化が成功しました！

クッソ！　こんな時に成功してどうするんだよ！
ビキ……恐る恐る魔竜に目を向ける。
「ふははは！　我も時に賭博を嗜むものよ。勇者達よ！　我の強さを思い知るがいい！」
魔竜が先ほどよりも速く尻尾を振りかぶり、羽ばたいて風を起こす！
「く……」
くそ！　これ以上厄介な状況にさせる気か！
せめて支援魔法をラフタリア達に掛けるしかない。
「ツヴァイト・オーラ！」

強化された魔竜に負けないようにラフタリアと錬に援護魔法を掛ける。
「エアストシールド！　セカンドシールド！　ラフタリア、錬、それを足場や盾にするんだ！」
「はい！」
「助かる！」
魔竜の鱗が光沢を放っている。ＭＭＯとかだと高位精錬に成功すると武器が光るエフィクトが入るようになったりするが……。
「ちょ、ちょっと伯爵？　なんか……強くなってるんじゃない？」
「ああ、奴が俺の盾に干渉してる。だが、俺が黙っていると思っているのか？」
俺だってできなくはない。
「おっと！　勝手なことをされては困るな。我の媒体よ」

ロックされています。

ラースシールドの強化をしようとした瞬間、視界に文字が浮かび上がる。
くそ！　俺の盾を俺自身で強化できないってどういうことだ！
ＭＭＯじゃアカウントハッキングという行為があって、自分のキャラクターが乗っ取られるようなことがあるのだが、それと似た感覚だ！
魔竜は迷わず、再強化を指示。同じように『はい』を連打される。

＋9の強化に成功しました！

……。

「うわ！」

錬が避けきれずに吹き飛ばされ、壁に打ちつけられる。

「錬！」

「だ、大丈夫だ！」

だが、ラフタリアを含めて魔竜の攻撃に対する反応がワンテンポ遅れ始めた。

「伯爵!?」

この盾ぇ……俺達を殺す気か!?　こういう時は抵抗でもして失敗するなりして、奴を弱体化させろ！

次成功したらやばいぞ、相変わらず魔竜は強化を選択しやがった。

＋10の強化に――

咄嗟にラフタリアと錬を守るために前に出る。

魔竜の尻尾攻撃で空中に投げだされた。

「ぐっ……！」

視界が高速で回転する。そこをダメ押しとばかりに二段目の尻尾に叩き落とされる。

「ナオフミ様！」
「尚文!?」
……思い切りふっ飛ばされたぞ。
俺を吹き飛ばすなんて霊亀やキョウでさえもできなかった芸当だ。
魔竜の鱗が凄くキラキラしてる。これは、俺が吹き飛ばされて星が見えているのか？
やばい、魔竜が着実に手に負えないところまで強化されていっている。
だが、強化は諸刃の剣だぞ？　更に強化するがいい。その時は強化がリセットされる。
それにそろそろ強化材料が尽きるから失敗したらおしまいだ。
「ふむ。まあ強化はこの程度でいいだろう」
「逃げるのか？　強化から……世界支配を望む魔竜の割に器が小さいな」
こうなったら挑発して強引に強化を失敗させよう。
だが、魔竜は俺に蔑むような目を向けて胸を張って答える。
「汝の安い挑発には乗らん。試すなら汝を得てからでもいいのでな」
見抜かれてるか！
「伯爵、大丈夫？」
「大丈夫に見えるか？」
つーか、ハッキングしたアカウントの装備している武器で過剰強化なんてしてんじゃねえ！
それでありえないくらいレアな装備が完成したような嫌な感覚がある。
本気で世界を呪いたくなった。

「ツヴァイト・ヒール」

「また回復か。　やすやすとさせると思うなよ？　アンチ・ツヴァイト・ヒール」

魔竜が溜息交じりにラトの唱える回復魔法を無効化する。

「ナオフミ！」

『力の根源たるわたしが命ずる。真理を今一度読み解き、彼の者を水の刃の如き一撃で切断せよ！』

「ドライファ・アクアスラッシュ！」

メルティが意識を集中して……メルティはドライファクラスの魔法が使えるようになったのか。

「アンチ・ドライファ・アクアスラッシュ」

またも魔竜は、まるで溜息をつくかのようにいとも簡単に魔法を無効化していく。

く……名前に魔があるのだから、魔法は得意とでも言う気か。

そういや絆達はあんまり魔法を使っているのを見たことがなかったな。

実は使えるのかもしれないが、魔竜相手には使わずに挑んだのかもしれない。

使ったその場で妨害されたら決め技になりえない。

「さて、汝らには全力で相手をしてやるのがせめてもの情けか」

魔竜は先ほどよりも更に加速した詠唱を始める。

「素晴らしいな。聖武器の力を得た我に不可能はない！」

SR↓SR＋に挑戦しますか？

警告文も無視して連打される！
なんとなく嫌な予感しかしない。
「な、なんか更に凶悪な姿に成長していくんだけど」
「くっそおおおお！」
「く！　流星剣！」
錬の流星剣が魔竜に向かって飛んでいくのだが、ビクともしない。火花すら散ってないぞ。
「なんだ？　我を相手に遊んでいるのか？」
「過剰強化……やるしかないのか！」
錬も項目を開いて強化を選んでいる……が。
お前は大事なことを忘れている。お前の運は呪いの所為で低下中だ。
「く……全然成功しない！」
「いいから無謀な挑戦はやめろ！　やるならラフタリア！　お前だ」
「は、はい！」
少しでも能力に追いつけるようにラフタリアが失敗の可能性がある強化に挑戦……ってあるのか？
よくわからん。
だが、俺の運は悪い時にはどこまでも悪いな。なんでこんなに連続で成功するんだよ！
何度成功したか見てない。これがソウルイーターシールドだったらどれだけ楽になると思ってんだ！

なんかLRとかその辺りの文字が見えた頃に再度ラフタリア達を守って思いっきり吹き飛ばされていた。

またかよ！　多分、＋11とかよりも成功率低いぞ、これ！

後ろに味方がいる以上避けるわけにもいかず、攻撃をそのまま受ける。

「くっ！」

レアリティの上昇した渾身の一撃が俺に当たる。

いってぇな……もう帰りたくなってきた。

ただでさえフィーロから能力を吸って無駄に攻撃力が上がっているのに、＋強化とレアリティまで上がるとかどんだけだよ。俺の不幸体質はどれだけなんだ。

冗談じゃない。さっさとレアリティ強化を失敗させて弱体化しろ！

AFへの強化成功！

この野郎、どこまで成功しやがる！

「ハハハハハ！　これで我に敵う者はいまい！」

全身にキラキラと光沢を纏った凶悪な魔竜が、俺達の前に悠然と立ちはだかっていた。

「ここまでくれば汝等に我を止めることはできまい。盾の勇者よ、我の贄として存分に力を供給するがいい」

く……今まで何かあるとラースシールドに頼っていたツケがここに来て爆発したということか。

コイツは俺自身と同じ性能を宿す化け物。ここを乗り越えねば今まで築いてきた全てが瓦解する。

だが、こんなにも凶悪化した相手を前に、俺がやれることはあるのか？

「その身に刻むがいい！」

魔竜がツメで横薙ぎをしてくる。

俺は流星盾を展開し、エアストシールド系を多重展開して受け止める。

「小癪な真似を……ふん！」

が、展開した盾はバキンバキンと全て破壊され、魔竜のツメは流星盾すらも砕いて俺を吹き飛ばした。

「ぐふ……」

「ナオフミ様！」

「さて……」

魔竜は目を細め、余裕を見せるように胸を張って魔法の詠唱を始める。

『遍く我が核石の力よ。我の求めに応じ――』

魔竜を中心に聞き覚えのないフレーズが響き渡る。

いや、テリスの詠唱式と似たような魔法だ。

「させません！」

ラフタリアが詠唱の邪魔をするかのごとく飛び出して刀で斬りつけ、錬が後を追う。

が、魔竜の奴、ラフタリア達の攻撃など効かないとばかりに詠唱に集中している。

錬やラフタリアの攻撃が入らないのは、間違いなく俺の防御力を得たからだ。

なにか手があるはずだ……そう、なにかが。
俺が俺自身と戦った場合を想定して……自分が今、一番いやな攻撃を想像するんだ。
「サディナ、雷神降臨を唱えるぞ。できる限り早く！」
「わかったわ」
サディナと一緒に俺は詠唱を始める。
「ナオフミ、何をする気？　このままじゃ一方的にやられちゃうわよ？」
「心配するな。錬、ラフタリア、お前等は俺と戦った場合を想定した……防御無視か比例攻撃のスキルを放て！」
「お、おう！　確かあったはず」
「わかりました！」
『——顕現せよ。……我は世界を統べる竜帝。彼の者を阻む障壁を生み出せ！』
「魔竜！　八面鏡！」
俺の指示に魔竜がピクリと詠唱を一拍停めてから魔法を発動させる。
「気刀・守散！」
「イーグルブレイド！」
ラフタリアと錬が各々刀身に意識を集中し、スキルを放つ。
するとラフタリアと錬の攻撃が魔竜の前で透明な壁にぶつかってしまう。
「く……障壁か！」
「ナオフミ様の流星盾みたいです！」

バキンと音を立てて障壁が砕け散る。
「ははは、我が備えていないとでも思うてか、愚か者共め」
魔竜の奴、攻撃かと思ったら防御魔法を唱えていやがった。
再度ラフタリア達が別のスキルを放つのだが、魔竜の生み出した障壁に阻まれて攻撃が届かない。
何枚か多重展開していると見ていいな。
「ラフタリア」
「はい？　なんですか？」
ラフタリアに対し視線で何を意図しているのかを伝える。
それから俺はラフちゃんとラフタリアの尻尾を何度も見ながら意識を集中させた。
ラフタリアは何をしてほしいのか察して頷く。
で、俺はウィンディアとメルティにも視線を向ける。
ウィンディアの方は首を傾げていたが、メルティは溜息交じりに頷いた。
俺が何を指示したのか察したらしいな。
『二つの力、彼の者の支えるために力を込め、敗北への運命を覆し勝利への未来を紡ぐ力を……』
「では最後の仕上げとしよう。盾の勇者以外を殺せるほどのな」
魔竜は安全を確保してから再度詠唱を始める。
が、そのロスが俺達にとって勝機となる。
ラフタリア達を警戒するだけとは……油断したな。
俺とサディナが唱える魔法に対しては全く警戒していない。

せいぜいラフタリアを強化するだけで、それさえも対処可能だとか思っているのだろう。
だが、お前は重要なことを忘れているぞ？
未熟なエクレールではお前の速度に追いつくことすらできないだろう。
リーシアやババアがいないのだから警戒も不要に思えるのだろうな。
『龍脈よ。我等の願いを聞き届けたまえ。力の根源たる我らが願う。真理を今一度読み解き、我が前の障害を乗り越える力を！』
「『雷神降臨！』」
悠々と魔法を唱えながら魔竜はラフタリアに意識を集中している。
一番の脅威だと思っているのは間違いないな。
だがな、お前は俺の盾の中にいるのに気が付かなかったのか？
俺にとって一番脅威となる攻撃を、連発で放てる奴が……自己流の集中をし続けていたことを！
「アトラァアアアア！」
俺はアトラに向けて雷神降臨を発動させる。
今のアトラは奴隷の成長補正を受けた……Ｌｖで言えば45だ。
だが、変幻無双流の真髄を本能で理解しているとババアに太鼓判を押された猛者だぞ？
「出番ですわ！」
アトラに向けて雷が落ち、雷光を放ちながらアトラが加速していく。
「見よう見まねですがエクレールさんとリーシアさん、そして老師の動きを真似しますわ！」
「頼んだぞ！」

「ふははは！　低Lvの者が我に向かってくるとは……愚かな！」
「そうですか？　ファスト・ミラージュ！」
「ラフー！」
ラフタリアとラフちゃんが……ボフンと幻覚魔法を使ってアトラが何人にも増えたように見せかける。
「ぬ!?」
『──顕現せよ。我は世界を統べる竜帝。竜帝に逆らう愚かな者た──』
乱暴に尻尾と羽ばたきでアトラとその幻影を振り払おうとしたが、そういう攻撃は暖簾に腕押しとばかりにアトラに受け流される。
いや、当たったという感触すらないかもしれない。
その中に本物が混じっているかもしれないという警戒を忘れるなよ？
「わずらわしい羽虫共め……仕方ない。詠唱を中断し、時間を稼ぐとしよう」
と、魔竜は魔法の詠唱を中断……詠唱中の魔法が漂うのを俺は感じていた。
『遍く我が核石の力よ。我の求めに応じ顕現せよ。我は世界を統べる竜帝──』
そして新たな魔法を紡ぎ出した。凄いな、あんな真似ができるのか。
「ていですわ！」
アトラの突撃で魔竜が展開した結界がバキンと音を立てて一度に砕け散る。
「まだまだ行きますわ！」
どういう原理で溜めこんでいたのかわからないが、アトラの猛攻が止まらない。

「魔竜・爆裂衝撃」
魔竜を中心に広範囲の爆発が巻き起こる。これでアトラを吹き飛ばすつもりか！
「させるか！」
俺が前に飛び出して本物か偽物かわからないアトラを庇ってみせる。
「甘いですわ！　その程度で私を止められると思わないことですわね」
アトラはその爆発をモノともせずに手をかざす。するとそれだけでフッと風向きが変わるようになんかすごいな。
魔竜の放った爆発の衝撃の向きが逸れる。
「そこか！」
魔竜が俺目掛けて腕を振りかぶるが、俺は確認せずに後方に飛びすさる。本物のアトラなら、対応して動いてくれるはずだからな。
だが、アトラは俺を無視するように横に飛び、魔竜のツメを受ける……かに見えて消失した。
「残念だが、はずれだったな」
「ええ、幻覚もその程度で拭えると思わないでください。アトラさんをその程度で止められるなら、私は苦労しません」
それもどうなんだとラフタリアにツッコミたいが、ある意味では信頼しているんだろう。
「ぐ……邪魔をするな！」
「そんな狙いを定めない薙ぎ払いで、私を止められると思ったら大間違いですわ」
ツメと尻尾を使ってサッと一回転し、薙ぎ払おうとする魔竜の尻尾の先に、アトラが器用に乗っ

かつて仁王立ちをしている。
凄いな。漫画やアニメで、相手の振るった剣の上に乗っかる武人みたいな動きだ。
「これで最後ですわ！」
尻尾を攻撃せずに魔竜に突撃し、最後の結界に掌底を当てる。
衝撃と共に、アトラはガシャンと全ての防壁を……かつてキョウが展開した結界をババアが突破したのと同じような動きで突破する。
「更に……行きますわ！」
一旦着地したアトラが弾丸のように魔竜に突撃し、肩に突きを打ちこむ。
瞬間――魔竜の肩が弾けた！
「な……ぐああああああああああああ!?」
魔竜は一瞬呆けたような声を出したが、その直後に肩が弾けた痛みで悶え苦しむ。
「まだまだ行きますわ！」
変幻無双流の攻撃とアトラの物真似は連射可能だ。これが錬やラフタリアではできない芸当だ。
「ウィンディアちゃん、行くわよ！」
「うん！　お父さんも、ガエリオンも返して！」
痛みでのた打ち回っている魔竜相手に、ウィンディアを中心にして合唱魔法を畳みかける。
「合唱魔法！　セイントレイン！」
ポツポツと辺りに雨が降り始める。
元々俺とサディナが唱えた合唱魔法で作り出された雨雲を流用したのだから、詠唱も発動も早い。

魔竜の傷口が、雨が当たる度にジュッと黒い煙を放ち始める。
「うおのれえええええええええ！」
先ほどまで勝利の確信を持っていた魔竜が憎悪に満ちた表情を浮かべて、全身から炎を噴出させる。器用なまねをするな。
「甘いですわ！」
だが、アトラには当たることなく、炎に向けてメルティとウィンディアが発生させた雨が降り注ぐ。
「さてと、魔竜、お前がアトラやメルティ達に翻弄されている間に、俺が何をしてたかわかるか？」
未だに俺はサディナと一緒に魔法を唱え続けている。
魔法を生み出す時にやるパズルがちょっと面倒だと思っちゃいるけど、やらないと使えないのだからしょうがない。
ま、唱えながらも状況を追えるだけ、慣れてきたような気がするけどな。
「な――!?」
「じゃあ行け！　第二弾！　エクレール！」
「私の番か！　任せろ！　イワタニ殿、アトラ殿、変幻無双流の真髄をしかと見てくれ！」
俺とサディナが唱えた雷神降臨が降り注ぎ、エクレールが飛び出す。
が、その前になにやら意識を集中していた。
「あ、アレは変幻無双流の老師が講義で話していた無双活性！　エクレールは使えたのか！」
錬がなにやら解説役になって言う。



いや、言われても俺はよくわからないから！

なんでお前がリーシアみたいな反応をしているんだよ！　ラフタリアやアトラと組み手をするだけに留まっている俺にそんなこと言われても理解できん！

「はぁあああああ！」

おお、なんかすごく速くエクレールが動き始めたぞ。

とはいっても、錬と同じくらいの速度なんだけどさ。

本気の俺やラフタリアに比べると若干遅め。だが、エクレールも変幻無双流の防御比例攻撃を学んでいるのか、一突きするごとに魔竜の鱗が弾け飛んでいく。

「く、舐めるなぁあああああ！　脆弱な人間如きがあああああああああああああ！」

余裕を失ったのか魔竜が激怒して吠える。

再生能力が高いのか、負傷したその場から傷がみるみるふさがっていくのが若干不安なところだが……。

「どんな援護魔法であろうとも解除したら無意味だと知れぇええ！」

とか言いながら魔法の詠唱を始める。

ああ、アトラとエクレールに掛かった援護魔法を無効化させる気か？

そう思ったところでアトラとエクレールの攻撃の効きが悪くなっていく。

効果切れか？　そう思ってアトラのステータスを確認すると、まだ維持されている。

とすれば、魔法でなにかしら……ああ、自身の防御力を低下させたな。

「さて魔竜。お前には盾の勇者の苦悩を理解してもらおう。ラフタリア、錬、出番だ！」

「はい！」
「行けるのか？」
錬の問いに俺は無言で頷く。
「瞬刀・霞一文字！」
「流星剣！」
ラフタリアの居合いに匹敵する一撃と、錬の十八番である流星剣が……魔竜の腹を切り裂く。
「ぐふ……舐めた真似を……」
「防御力を上げれば比例攻撃、下げれば高火力のごり押し。障壁は張るだけ無意味なことくらい、わかるよな？」
俺もやられたことがあるが、その時はなんとか姑息な手段で乗り越えた。
あの時、ラルク達が連発できたら同じ事態になっていた。
その悩みを今、コイツは身をもって味わっている最中だ。
で、切ったその場で再生する黒いヘドロが噴出しているのだが、これはなぜかラフタリアが豆腐を切るかのように薙ぐだけで蒸発していく。
「うぐ……く、暴れるな！　我がお前を支配しているのだ！　抵抗は無意味だと――」
そこで魔竜の動きが更におかしくなる。
なんだこの反応は？
「ぐ……逃がさん！　お前は大人しくしていろ！　うぐあああああ！」
まるで体の内側で何かが抵抗しているかのように魔竜がもがき始めた。

「うぐ……ぐ……」
ボコボコと胸の辺りで何かがもがいて、いる？
魔竜は胸を押さえつけて、魔法の光を放射し始めた。
「く……」
「畳みかけろ！　どうやら今が攻め時だ！」
「脆弱な人間共がぁあああ！　調子に……乗るなぁああ！」
「おや？　俺達に集中していていいのか？　何があるのか知らんが、そこを攻めない手はない」
「行きますわ！」
「ああ、どうやらあそこが弱点のようだ。レン、行くぞ！」
「おう！」
「私も負けませんよ！」
俺の指示でアトラ、エクレール、錬、ラフタリアがそれぞれ、魔竜が胸を押さえている腕を斬り落とす。
「ぐうううううう……ガハ！」
腕を斬り落とされた痛みで魔竜が仰け反る。腕は斬ったその場で再生するみたいだが、胸の方はどうかな？
押さえがなくなった胸を何かが突き破って姿を現した。
小さな、赤ん坊のようなドラゴン……ガエリオンがフィーロの襟首を掴んで飛び出す。
「ガエリオン！」

「ギュ……ア」
生まれたばかりのガエリオンの姿がそこにあった。
経験値という名の成長要素が吸われ、それでもウィンディアや俺達を守るためにあらがったのだろう、その証に取り込まれたフィーロを連れて。
「フィーロちゃん！」
「うう……」
よし！　フィーロも死んじゃいないようだな。俺はフィーロを抱き起こして回復魔法を唱える。
魔竜の方はラフタリア達との戦闘に意識を集中していて、こっちに意識を向ける暇さえない。
魔法というのは唱えるのに意識を多少持っていかれる。
痛みでそれどころではないだろうし、媒体となっていたガエリオンとフィーロに脱出されたとなれば更に弱体化は必至だろ。
そして……魔竜の姿が更に黒く染まり、こちらを睨む。
ウィンディアを凝視している。
ウィンディアはメルティとサディナの元に戻って、大きく息を吸う。
「サディナお姉ちゃん。私、あの魔竜を倒す!!」
「わかったわ」
「やるしかないようね」
三人揃って合唱魔法の詠唱に入る。
今度はとてつもなく速い。まるでウィンディアの決意に応えるかのようだ。

ふと見ると、小さなガエリオンがとても小さな羽を羽ばたかせて三人の上を飛んで詠唱している。

「ぐ……もう手段など選んでられるものかぁあああああああ！　GAAAAAAAAAAAAAAAA！」

魔竜の造形が崩れ始め、再度黒いヘドロの色合いが強まっていく。

俺の視界で、敵の名前が魔竜からラースドラゴンへと変化していくのを確認できた。

強化されたラースシールドの性能そのままに凶悪そうなドラゴンがラースドラゴンと混ざっている。この中にウィンディアの親も混ざっているのだろうか？

どこまでも哀れなドラゴンだな。

ウィンディア達を守るために俺は前に出る。その傍らにガエリオンが飛んできて、俺の背にくっ付く。

「危ないぞ、下がってろ」

『そうもいかん』

「な!?」

ガエリオンが喋った。しかし……念話というやつなのか頭に響く。

『取り乱すな。剣の勇者とウィンディアにばれてしまう』

「お前……」

親の方のガエリオンという奴か。

まだ子のガエリオンに乗り移っているじゃねえか。

『娘の成長は喜ばしいものだな。盾の勇者よ』

いや、そんな感情知らねぇよ。
なんでお前がガエリオンの中にいるのかは後で問いただすとしよう。
問題が全く解決していないみたいだしな。
『汝も気付いているであろう？　異世界の竜帝と癒着している汝の憤怒を』
「まあな……」
『あれは汝の怒りの化身。この依り代を失ったからには、汝を求めて突き進むだろうな……真に暴れ出す前に仕留めろ。でないと汝をいつまでも追いかけてくるぞ！』
「わかった。錬、ラフタリア！　やるぞ！」
「はい！」
「わかっている！」
ここまで追い詰めることができたのはひとえに仲間のお陰だ。
今回の功労賞はアトラだな。
『安心しろ。今、我が協力して攻撃を放つ。魔竜の核石を吐き出させれば汝の相棒がトドメを刺せる！』
「毎度やっていることだな」
『……まかせたぞ』
まったく、何か解決してないことがあるような気がするのは気の所為か？
ガエリオンがパーティーに加わり、詠唱が加速する。
俺はラースドラゴンが放つ、先ほどよりも威力が低下しているブレスを受け止め……るには火力

が高い。
「はぁ！」
アトラがラースドラゴンの放つ炎を手で仰ぐだけで受け流す。
どうやるんだ、それ？　というか化け物じみた防御能力をしてるな、アトラは。
俺を新たな依り代にするべくラースドラゴンは執拗に攻撃してくる。
「盾が避けちゃいけないなんてルールはないよな？」
俺は馬鹿正直に突撃してくるラースドラゴンの猛攻を身体をかわして避ける。
俺だけを狙って攻撃してくるなら受けとめて仲間を庇う必要もない。攻撃の挙動自体は単純だから速さにさえ注意すればどうにか避けることができる。
「行きます！　スターダストブレイド！」
「流星剣！」
錬は本当に流星剣が好きだな。隙さえあれば撃ちまくる。
「どこかにある核石を吐き出させろ！　そうすれば更に弱体化する！」
『呪われた大地、憎しみ、恨みを押し流す清流のような思いを、世界を救う願いを力に。龍脈よここに奇跡を願う』
『我、ガエリオンが天に命じ、地に命じ、理を切除し、繋げ、膿みを吐き出させよう。我の力よ我が前にいる感情の流れを絶つ力を呼びさませ！』
ガエリオンが唱える魔法の方は俺の盾のおかげで高度な詠唱だとわかる。盾がビシビシと音を立てて、俺の視界に翻訳を表示させているのだ。

サディナは気付いているのか、ガエリオンに目を向けている。
『イレイズアクアスプラッシュ！』
『水龍滅波！』
三人と一匹で唱えた魔法が完成し、溢れ出す魔力がガエリオンを中心に構成される。
「え!?」
ウィンディアが驚きの声を上げ、メルティは疲れで座り込む。
サディナが銛を片手に走り出し、ガエリオンが魔法を集めた玉を持って大きく息を吸う。
「ナオフミちゃんとラトちゃんは援護！」
「ああ！」
「ツヴァイト・オーラ！」
「ファスト・パワー！　ファスト・マジック！」
俺の唱えた援護魔法と、ラトの援護魔法が加わり、攻撃の手が加速する。
「行くわよ。ガエリオンちゃん」
「ギャウウウウウウウウ！」
……ガエリオンはキュアと鳴くんだがな。
大きく息を吸ったガエリオンが魔法の玉に息を吹き込む。
するとそこから大量の水の塊が噴き出し、ラースドラゴンに向けて襲いかかる。
サディナはその水の塊の中に入り込んで、泳ぎ、竜巻を起こす。
……ラフタリアやフィーロよりも派手な攻撃をするよなぁ、こいつ等。

「化け物の戦いだ……」
「お兄様、完全に戦力外ですわ」
「く……俺も行くぞ！」
「お前は行くな」
なんていうか、置いていかれているフォウルをあの中にぶちこんだら即死しそうだから行かせられない。
そんなフォウルをよそに超電磁の五体合体で変形するロボットの必殺技みたいな突撃で、サディナが回転しながらラースドラゴンを貫く。
それと同時にガエリオンが放った水の塊は消え去った。
「ど、どうかしら!?」
着地して肩で息をするサディナがラースドラゴンを見た。もちろん、俺もラースドラゴンの生死を確認する。
「まだですわ！　そして――」
アトラが素早く駆け出し、まるで虎が飛びかかるかのようにラースドラゴンの喉笛にツメを立てた。
「これですわ。この要(かなめ)の核石がなければ後は雑魚も同然！」
キラッと大きく輝く核石が宙を舞う。
「任せてください！」
「お願いしますラフタリアさん。どうやら貴方(あなた)しかこの黒い感情のドラゴンは倒せないようですわ」

攻撃の準備は事前に終わっているのか、ラフタリアの剣が輝いている。
魔竜の核石が外されたラースドラゴンは、ラフタリアを見るなり、怯えたように口を開け、背を向けて空へ逃亡を図る。
「逃がしません！」
「エアストシールド！　セカンドシールド！　ドリットシールド！」
階段のように出現させた盾を足場に、ラフタリアは逃げるラースドラゴンに斬りかかった。
「瞬刀・霞一文字！」
「ＧＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！」
ラースドラゴンは空中で真っ二つになり、大きな声を上げて地面に落ちる。まるでラフタリアが振るった剣の風圧だけで斬られたようだった。
「お父さん……ごめんなさい。私は、もう振り返りません」
『……』
ガエリオンが両手を合わせて涙するウィンディアの背中を見つめていた。
親としては成長した娘の姿に感動しているのかもしれない。

十話　浄化

着地したラフタリアが刀を振って液体を払い鞘に収めた。

「今回のＭＶＰはアトラだな」
俺達と組み手をしただけでこれだけの活躍ができたんだから及第点だろ。
むしろ……俺はフォウルの方を見る。購入時の期待度はアトラよりも高かったのになぁ。
「な、なんだその目は！　く……アトラ！　兄ちゃんは絶対に強くなってみせるからな！」
「がんばってほしいですわ」
アトラの方は兄貴のやる気にはあんまり関心がなさそうに応援の言葉を口にする。
「えっと、アトラさん。ありがとうございます」
「全ては尚文様のためですわ」
ラフタリアの言葉に、いつものように返すアトラ。
よかった。これで事件も解決か。とはいえ、後でガエリオンとは話をしなければいけないが。
「キュア？」
ガエリオンがウィンディアに飛びついて顔を舐める。
元に戻ったのか？　それともブリッ子しているのか？
「ガエリオン、大丈夫？」
「キュア！」
「フィーロから取ったものを返して！」
そこでフィーロが立ち上がってガエリオンに抗議する。
「フィーロちゃん落ちついて。まだ元気になったばっかりなんだから……」
メルティがフィーロを宥める。

「キュア！」
ガエリオンはフィーロと睨み合いをするが、すぐにラースドラゴンに視線を移す。
「多分、あそこだってさ」
「というか、この小さい子竜がガエリオンなのですか？」
「うん。無理しちゃって小さくなったみたい」
「経験値返して！」
ラースドラゴンの溶けた死骸にフィーロは抗議している。
最近フィーロは不運が重なるなぁ。
絆の世界に行った頃から運が右肩下がりで悪くなっている気がする。
見世物にされるわ、元康に懐かれるわ、馬車を盗まれるわ、魔竜の贄にされるわ、挙句の果てにLvダウンだもんな。
今度、何か美味いものでも食わせてやるか……。
「さて、後は……」
俺はアトラが摘出した魔竜の核石を見つめる。
これが奴を動かしている原動力であったのは間違いない。
俺の盾やラフタリアの刀にも収まっていたものなのだろう。
盾に収めるのも危なそうだし、かといって放置するのはもっと危ない。
……厳重に保管しておこう。鎧の核石とかに使えばいいか。
で、後はラースドラゴンの残骸なのだが、フィーロが抗議していると黒い光となって俺の盾の中

へと戻ってきてしまった。
その一部がフィーロに纏わりついて消え去る。これも大方、盾の中に戻ってきたとかだろう。
そこでフッと嫌な声が聞こえてきた。
『憤怒は常にお前の心にある。今回は引いておくとしよう』
……完全には仕留めきれなかったのかもしれない。
次がないことを祈りたいな。今後はラースシールドに頼るような真似は極力避けたい。
ありえないくらいに強化された化け物盾、ラースシールド。
使ったら今度こそ俺が乗っ取られかねないぞ。
「キュア！」
ぴょんとガエリオンが俺の肩に飛び乗り、じゃれ始める。
「あー！　ごしゅじんさまと遊ぶのはフィーロなの！」
「騒がしいぞペットズ！　今日はもう帰るぞ」
「えー……」
「ところでフィーロ、調子はどうだ？」
「体は楽になったけど……ガエリオンに取られたのはあんまり返ってこなかったー」
ステータスを確認する。
フィーロは……Lvが41になっている。かなり低下してしまった。
その反対にガエリオンは……わき目も振らずに魔竜の呪縛から逃げたのにLv60か。
ひっくり返ったまんまか。

「返して！」
「キュア！」
フィーロと俺から下りたガエリオンがバチバチと睨み合いを始める。
「キュア！　キュアキュア！」
「ガエリオンは多分、そんなの知らないって。盾の勇者のお気に入りはガエリオンだって」
「むー！」
先制攻撃はガエリオンだったか。ペシッと短い尻尾でフィーロの頬を叩いて笑った。
「返せ返せ返せ！」
「キュアキュアキュア！」
「ラフー……？」
ポカポカとガエリオンと殴り合いを始めるフィーロ。
ラフちゃんがその真ん中に立って呆れるように見ている。
全ての原因はガエリオンにあるわけだし、反省もしていないようだ。ここは……。
「よしよーし。じゃあガエリオンはその体でもってフィーロに返そうな。フィーロの餌にでもなれば少しは返せるかもしれないし」
ガシッとガエリオンを掴み、フィーロをフィロリアルクイーン形態にさせて、口を開けさせてねじ込もうと……。
「キュアアア……!?」
「ダメ！」

「なにしてんのよ、ナオフミ！」
ウィンディアとメルティに阻止された。
「むー！　なに食べさせようとするのごしゅじんさま！」
「お前は食いしん坊だろうが。ドラゴンは精が付くかもしれんぞ」
「もう、ドラゴンは、やー！」
ああ、食い意地が張っていたのに嫌になったか。偏食だな。
「フィーロ、食わず嫌いはやめろよ」
「やー！」
「そういう問題？　ナオフミ、もっと真剣に考えなさいよ」
「ナオフミ様……フィーロに変な食べ癖をつけさせないでください」
「やー！」
「フィーロちゃんに変なことしないでよ！」
メルティがフィーロを庇ってからウィンディアと睨み合いを始める。
「今回の騒動はその子なんだから、処分すべき！」
「もう大丈夫だもん！」
ああもう、面倒だな。
俺は現実逃避とばかりにラフちゃんを抱え上げて、フィーロとガエリオンに見せつけるように撫でまわす。
「むー！」

「キュアアアア！」

フィーロとガエリオンの嫉妬の目線をラフちゃんが浴びることになったが知ったことではない。

「何をしてるんですか！」

「喧嘩両成敗！　大人しくて可愛らしくて献身的なラフちゃんが一強だ！」

「ラフー」

で、そのラフちゃんはラフタリアに手を振ってて、ラフタリアもなぜかフィーロと同じ目をラフちゃんに向けてる。

「なんか……大変だな、尚文」

ぶっちゃけこれって元をただせば錬が起こした問題だろ。

「まさかお前……ドラゴンの死骸を放置することで発展するクエストとか言わないよな？　巻き込まれた方はたまったもんじゃないぞ」

「ち、違う！」

ブンブンと錬は首を何度も振る。

ありそうなんだよな。レアなボスと遭遇できるクエストでそのボスを倒せば優秀な武器が……とか。

「とりあえず帰るぞ！」

「ナオフミちゃんのところはやっぱ面白いわー」

ケタケタとサディナが笑っている。笑いごとじゃねえだろ。

「フィーロ、帰るぞ」

「うん」

「キュア！」

ガエリオンが俺の股下に潜り込む。

「歩きづらい。どけ！」

「キュアアアアアア！」

パアアッとガエリオンが輝いて、腐竜の核を食う前の姿に……もう少し大きいな、四メートルくらいになった。そして俺を背にウィンディア、サディナ、ラト、アトラを尻尾や両手で抱きよせて飛び始める。その直前にラフちゃんがガエリオンの頭に飛び乗って角を掴んでぶら下がる。

「あ、ああああー！」

フィーロが悔しげな声を出す。

「ナオフミ様ー！」

ラフタリアも呆気に取られる。俺だって言葉が出ないぞ！

変身技能持ちかよ。

「キュアー」

「むー！」

バサッとガエリオンが羽ばたいて飛んでいく。

「ラフタリアお姉ちゃん！　剣の人！　急いで追うよ！　ごしゅじんさまを乗せるのはフィーロなんだもん！」

フィーロも負けずに残った面子をせかすように走り出す。

「乗り心地良さそうですね。異世界でエスノバルトさんの船に乗った時みたいに……」
「あ、アトラー！」
フォウルもなんか切迫した表情を浮かべてるぞ。
ま、馬車がないから、追いつけないだろうけど。
「イワタニ殿はまことに大変だな」
なんて言いながらエクレールが見上げている。
「ああもう……この子は強引ねー」
「ラト、お前はドラゴンがこんな能力を持っているのを知っていたか？」
「研究ではごく一部にあるとは聞いたけど、フィロリアルの変異種と同じ程度しか知らないわね」
空から下を見る。汚染された大地の色が、消えているのに気付いた。
「伯爵も気付いた？　暴走したガエリオンが辺りから不浄な流れを吸っていたみたいだったけど、これが結果のようね」
なるほど、これでこの地も本格的に平和になるのか。
ポータルシールドが使えるだろうな。試しに使ってみるか。
「ポータルシールド！」
よし。見る限りだと使えそうだ。注意事項として記録時、地表に飛びますと出てる。
転移を指示して周りを意識する。
ラフタリア達は範囲外か……さすがにここで飛ぶのはどうかと思う。
「ごしゅじんさまを置いてけー！」

お？　フィーロの奴が爆走している。Ｌｖ低下した割にはそこまで足が遅くないぞ？
念のためにフィーロのステータスを再確認した。
ん？　呪いの所為で低下していたフィーロのステータスが戻ってる？
ああ、だからか、フィーロが更に弱体化して見えないのは。
だが、なんでフィーロだけ呪いが解けてるんだ？
考えられるのは呪いの大本であるアル・サクリファイス・オーラの代償部分の力をフィーロを媒体に魔竜が吸収したお陰とかか？
羨ましい限りだな。
……つまり、今のフィーロは呪いが解除された状態。ちゃんとＬｖを十分に上げさせれば呪いを受ける前よりも素早く強くなれるということだ。
ま、結果良ければ全て良しとしよう。
「キュア！」
「ガエリオン、立派になって……私のお父さんみたいに立派なドラゴンになるのよ」
「そのお父さんが猫かぶりしているんだぞー」
「なに言ってるのよ。お父さんは……死んだの」
そうウィンディアは遮って、俺の話を信じなかった。
ちなみに東の村の近くで降ろしてもらってから俺はみんなを村に飛ばした。
山が綺麗になったことで東の村の連中も喜んでいたのは蛇足か。
さすがは盾の勇者様！　とか言ってくれたけど、上手く誤魔化せたな。

ぶっちゃけ、ウィンディアやガエリオンの言葉からすると自業自得だ。
俺の中で東の村の連中の評価はガクッと下がった。

「ごしゅじんさまを背に乗せるのはフィーロなの！」
「キュアアアア」
村に帰るなり、ガエリオンとフィーロのバトルがバチバチと再燃していた。
ちなみにガエリオンはモードチェンジして小さくなっている。
「はいはい。そこはどうでもいい」
「よくないの！」
フィーロもこだわるな。
「はぁ……とりあえず、今日からしばらくはフィーロと遊んでやるから気にするな」
「わーい！　でもごしゅじんさまを――」
「それ以上こだわるなら遊んでやらんぞ」
「キュア……」
「お前は問題を起こしたからしばらく謹慎。余裕があったらフィーロと一緒に遊んでやるから大人しくしてろ」
ガエリオンがとぼとぼと歩いてウィンディアに泣きついた。
「キュアアアア」
「その鳥は構うのに、なんでガエリオンをいじめるのよ」

「わからないのか？　おしおきだ」
「まあ……そうですね。かなり大変な事件でした」
「ラフー」
ラフタリアとラフちゃんが揃って頷く。
「う……」
ウィンディアに泣きついているガエリオンがチラッとこっちを盗み見る。
いじめっ子が親に泣き真似しているみたいで癪に障るな。
「今のお前の態度でもっとダメになったぞ」
「キュアアア……」
本格的に泣き出した。
「やーい！　ざまあみーろ」
「フィーロ」
「フィーロちゃん！」
俺とメルティが注意するとフィーロが視線をそらして歌い始めた。
まったく、こっちもこっちでガキそのものだな。
「とりあえずフィーロ、お前の呪いは運良く解けたようだからLv上げをしてこい」
「わかったー！　フィーロ！　メルちゃんと一緒にLv上げに行ってくる！　それからごしゅじんさまに遊んでもらう！」
ここでなぜメルティが出てくるのかよくわからんが凄く元気な返事だった。

お？　メルティが困った表情で口を開いた。

「あのねフィーロちゃん。わたしはそんな暇ないわ。エクレールさんの管理する町の仕事が山積みなのよ？」

「えーでもメルちゃん、力不足でLvを上げたいってさっき言ってたー」

「今すぐじゃないの」

「でもメルちゃん、明日やるって怠けている町の人に、今できないのなら明日もできないって怒ってたー」

「わたしは他にもやることがあるの」

「えーでもメルちゃん、忙しい中でもやりたいことをやらないと前進はしないって言ってたよ」

あー、フィーロのなんでなんでモードが作動してる。

このモードに入ると、思い通りにさせるか会話を切らないとずっと問答が繰り広げられるぞ。

とはいえ、この機会を逃すとフィーロのLv上げが滞るんだよなぁ。

メルティを迎えに来た部下に視線を送り、聞こえないように話し合うか。

メルティのLvが低いのは部下の方も不安になっているそうだ。

努力は怠っていないから魔力の資質はLvよりも遥かに高いそうだけど、やはり国を治める者としてもう少しLvがあった方がいいという意見が大半だった。

まあ子供がここまで長期に公務に取り組んでいるというのも問題があるだろう。

「ラフー！」

ラフちゃんがなにやらフィーロの頭の上に立ってアピールする。

そして二本足で立ち上がって胸にドンと手を当てている。任せろと言っているかのようだ。
「そうか。ラフちゃんが一緒なら心強いな」
「何がですか……」
少々寂しいがラフちゃんも一緒なら大丈夫だろう。きっと癒し的な意味で。
メルティもラフちゃんの可愛さを知ってくれるといいな。
「エクレール」
「なんだイワタニ殿」
「お前はメルティに頼りすぎだ。これからメルティが出かけている間、町の領主としての雑務を命じる」
「い、イワタニ殿!?」
「錬も止めるなよ？　エクレールが怠けていた案件をメルティがやっていたんだからな」
「わ、わかった。だが、少しくらいなら力になってもいいよな？」
まあ、錬がやりたいならいいんじゃないか？
「ナオフミ様、何を考えているんですか？」
「エクレールの仕事とメルティのことだが、いい機会だと思っている」
「はぁ……まあ、確かにメルティちゃんは年不相応にがんばっていますね」
メルティには遊びの時間も必要だよな。ボディガードはフィーロがしてくれるだろうし。
「じゃあここで大々的に言うとしよう……メルティ次期女王陛下様はその愛鳥と共に自らを高める旅に出た！」

「なにやってんだ兄ちゃん？」
眠くてあくびをしているキール達の前で俺は大々的に宣言する。
「な、ナオフミ？　何を言っているの？」
「名目だが？　エクレールも町の連中にはそう伝えろ」
「わ、わかった」
「というわけだフィーロ。メルティとLv上げをしてこい」
「わーい！」
「ちょっとナオフミ！　勝手に決めないでよ！」
「大丈夫だメルティ」
「何が!?」
「俺の独断ではない。お前の部下も許可を出しているし、お前の仕事はエクレールが代行してくれる。存分にフィーロと遊んでこい」
「ふざけるんじゃないわよ！」
「後は奴隷補正を掛けるか否かだな。多分、女王のことだから許可を出してくれるとは思うが」
どうも女王ってメルティを俺の嫁にさせたいみたいだから、何をさせても許可しそう。
ここは本人の同意をもって。
「イヤよ！」
「そうか、ならしょうがないか。じゃあ行ってこい」
「ごしゅじんさま行ってくるねー」

「ちょっとフィーロちゃん。わたし行くって言ってない――」
メルティは、言い終わる前にフィーロに襟首を摘まれて背中に投げられる。
メルティを背負ったフィーロが、出発と言いながら羽ばたいて走り出した。
「ナオフミぃいいい。覚えてなさいよぉおお――」
「メルティ次期女王陛下の成長を期待して敬礼！」
ノリノリで敬礼をした俺に、メルティは最後の嫌がらせとでもいうかのように、無意味に服に付いていたアクセサリーを投げてよこした。
もちろん、走り出したフィーロの背中から投げたので、俺に届かず地面に落ちる。
相変わらずヒステリックな叫び声を上げる奴だな。そんなに嫌なのか。
なんだかんだで嫌いではないが。
「ラフー」
ラフちゃんがフィーロの頭の上に乗っかって手を振っている。
ちゃんと頼りない二人を見張っておいてくれよ。
「さて、今日も朝が来たな。眠い……」
「メルティちゃんも眠いと思いますよ。数時間前まで戦っていたんですから」
「フィーロが元気だから大丈夫だろ。悪いが今の俺にあいつ等の心配をする余裕はない。ラフちゃんは別だがな」
今日は修行は中止して、奴隷達の朝飯を作ったら仮眠しよう。いい加減疲れたしな。
「じゃあお前等、朝飯が終わったらさっさと仕事に出るんだぞ」

その瞬間、フッとセインが村に姿を現した。
「何かあ――?」
あ……お前のことを忘れてた。
こうして俺達の日常が戻ってきたのだった。

十一話　パーフェクト＝ハイド＝ジャスティス

フィーロとメルティが修行の旅に出た翌日。
俺は村の奴隷の中で真面目にＬｖ上げに励んでいた者達を連れてゼルトブルへとポータルで移動した。
帰ってきた変幻無双流のババア曰く、そろそろ見知った相手ではなく、傭兵等を相手に戦うのもいい修行になるとのことだ。少なくともコロシアムで戦える程度には強くなったらしい。
「兄ちゃん兄ちゃん！　ここで戦うのか!?」
キールが興奮しながらゼルトブルのコロシアムでの決闘を観戦する。
「ああ、ここは表のコロシアムだからある程度は安全だ。できる限り怪我しないようにがんばるんだぞ」
「わかったぜ兄ちゃん！」
「キールくん。本当にわかっているんですか？」

「もちろん！　怪我をして取り残されるのは勘弁してほしいからな！」
キールは相変わらず元気でなによりだ。
「それにサディナ姉ちゃんも一緒なら何があっても大丈夫だぜ！」
「あらー」
「まあ、ゼルトブルで荒稼ぎしていたみたいだしな。そういやセインはどこだ？」
この前の事件の時は何が起こったのか察することができなかったみたいだったな。
就寝中だったとか……まったく、いざって時に役に立たない奴だ。
呼べば来たのだろうか？　忘れていた俺も悪いな。
そもそもあの汚染された山に転移で来れたかどうか怪しい。
「セインちゃんは裏の方でお仕事中らしいわよ？」
「よくやるな」
「もちろん利益の半分はナオフミちゃんに寄付するそうよ」
「よし、いいだろう」
「ナオフミ様、現金すぎます」
「さすが尚文様ですわ」
「何がさすがなんですか！」
ラフタリアとアトラが相変わらずの問答をしている。
ちなみにフォウルは己の無力さを痛感してババアのところへ修行に出かけた。
しかもスパルタコースを望んでいるとかで、ババアがやる気を見せているとかなんとか。

その間に身体が空いた連中をゼルトブルのコロシアムに参加させることとなったわけだ。
奴隷商の管理するコロシアムだ。
金額こそ少額だが、サディナの時のように裏で糸を引くことになっている。
俺の配下には補正が掛かるからな。Ｌｖよりも遥かに強いし、経歴もある程度誤魔化してる。
バブルがはじけたといってもルロロナ村出身の奴隷は高めらしいからな。
「ふぇえぇ……」
「リーシア、修行から帰ってきてまたそれか？」
「わ、わかってますよう」
才能が開花した役立たずことリーシアだからな。
まったく、お前さえいれば魔竜をもっと楽に仕留めることができただろうに。
リーシアはああいう世界征服を企む奴が相手だと、覚醒して倒すという、主人公みたいなことをきっとしてくれるはずなんだ。
「じゃあお前等、十分に気を付けて戦うんだぞ」
「「はーい！」」
サディナに奴隷共を任せて俺達は来賓席へと移動を開始した。
今回参加する大会は一日か二日で終わる短いものだ。
普段、表のコロシアムというのはわかりやすい戦いを観客に見せて楽しませるものであるらしい。
だから、闇のコロシアムよりはルールが厳重で、Ｌｖ別、刃を殺した武器限定とか色々と制約がある。もちろん、賭博もあるから一概に言えないがな。

今回はＬｖ制限があり、相手の殺害は厳禁という競技色の強い大会のようだ。

ラフタリアやサディナ辺りを参加させるかとも考えたが、顔でばれそうなので出場は見送ることになった。

俺？ 今回は個人戦だ。ルール上は勝つことはできるだろうが、場外がないらしいから出ない。

相手を攻撃できなくても押さえつければ勝てなくはないが、面倒臭い。それなら奴隷共に実戦経験を学ばせた方がいい。

「じゃあ俺達は来賓席で見てる。存分にがんばれよ」

「では盾の勇者様、こちらです」

それまで黙っていた奴隷商が道案内とばかりに俺達を来賓席へと案内する。

来賓用の席へ行く途中、準備している選手達が目に入る。

目つきの悪い連中が多いな。武骨というか筋肉質な奴も多い。

――そこで信じられないモノを俺は目撃した。

「い、樹(いつき)!?」

「え!?」

「ふぇ!?」

さも当然のように選手の中に紛れ込んでいたのが樹だった。

ラフタリアとリーシアも俺の声に樹を見つけて驚きの声を上げる。

「どうかしたのですか。ハイ？」

「いやな」

俺は奴隷商に弓の勇者である樹がここにいると説明した。
とりあえず話をしなきゃ始まらない。
セインの敵対勢力が四聖勇者の命を狙っているんだ。ここでむざむざ逃がしてなるものか。
「えー……」
顔を布で隠した屈強な男が奴隷商にリストを持ってくる。
「本日の参加番号９８２……えっと『パーフェクト＝ハイド＝ジャスティス』さんだそうです」
思わず転ぶかと思った。
パーフェクト＝ハイド＝ジャスティスってなんの冗談だよ。
中二病も裸で逃げ出すくらい直球だ。思わず俺まで恥ずかしくなった。
「話はできるか？」
「ええ、私の権限で許可します」
奴隷商が部下に指示を出し、俺達は選手用の控室に案内してもらった。
警戒されないように徐に樹に声を掛ける。
「おい。久しぶりだな」
「イツキ様！」
が、樹は上の空でまったく応じる気配がない。
「僕は……そう……みんなが……」
「おい」
「みんな僕を求めてる……うん。みんなが……僕を求めてる……今日の賞金で助かる人がいる」

「聞けよ！」
樹はブツブツと小声で呟き続けていて、何を言っているのかよく聞き取れない。
目も虚ろで、どこを見ているのか。
「僕は……劣ってなんかいない……僕は……実は……」
「おい！　聞けよ！」
「イツキ様！　あの！　私──」
ブンブンと樹の肩を掴んで揺らしたが、一向に反応しない。
ゴーンと銅鑼を鳴らすような音がコロシアムの会場から聞こえてくる。
「僕は……正義の味方だ！」
「イツキ様！　あう！」
俺達の声なんて耳に入らないかのように、樹はリーシアを押しのけて走り去っていった。
「なんなんだアイツ……」
「大丈夫ですかリーシアさん」
ラフタリアが転びそうになったリーシアを受け止めて声を掛ける。
「ふぇぇぇ……」
俺達のことなんて眼中にないかのようだった。
「えー……先ほどの選手に関することを調べたのですが、連日、この国のコロシアムを渡り歩いているようですね。ハイ」
「そうなのか？　初耳だぞ」

「ええ、盾の勇者様が去った翌日辺りから出没するようになったとの話です」
完全に入れ違いじゃねえかと愚痴りたくなるな。
しかし、何があったか知らないが、あれでは病人だ。
まあ霊亀との戦いで負けたツケだろうとは容易く想像できるけど。
そういや霊亀との戦いの件での目撃証言を女王が報告していたな。
キョウの話とかも参考にすると仲間割れしていたんだったか。
俺は試合が始まったコロシアムで、樹の戦いを見る。
遠距離から攻撃できるほうが近接より有利じゃないかと思ったけど、ルール上なのか戦闘範囲が狭い。あっという間に距離を詰められる程度の広さしかない。むしろ弓のほうが不利だな。
だけど樹はアッサリと勝ち進んでいく。対人でも強いじゃないか。
ただ、目付きがおかしいし、歓声が上がるたびに嬉しそうに両手を上げて吠えてる。
あれは本当に樹なのか？
俺の知っている樹はもう少し大人しいというか、人格者のフリをした偽善者だったんだがな。
「ふぇええええ……」
俺のところの奴隷共は別の大会に出ているみたいだから怪我はせずに済みそうだが、どうやって保護するか。
それに……弓の形状が凄く気になるんだよな。
「どうやって逃げられずに保護するか……」
ぶっちゃけポータルを阻止する方法自体は判明している。

周囲のフィールドに魔力的な磁場を発生させるとポータルが上手く使えなくなる。

儀式魔法の『聖域』とか『裁き』とかを使えば逃げるのを阻止するのは可能だ。

幸いにしてここは傭兵と商人の国ゼルトブル。

奴隷商に命じればコロシアムで戦っている樹が逃げられないようにポータル阻止するのは可能なのだが、ルール上にないことをすると危険を察して逃げられる可能性が高い。

挙句、観衆を人質にして暴れられるとシャレでは済まない。

さすがに客がいるコロシアムに被害が及びかねないことを奴隷商は了承してくれなかった。

もしもやる場合は事前の準備を入念にしないといけないそうだ。

「では問答無用で昏倒させ、捕らえるのですわね」

「なんでそんな物騒な話になるのですか！　まったく……話だけでも聞いてほしいですよね？」

「そうだな。できれば穏便に保護したいところだな」

セインの宿敵の勢力が暗躍しているかもしれないし、どこで何が起こるかわからない状況だ。

できれば樹も抱えておきたい。

「尚文様、拳で語り合うことで何を求めているのか試すのはどうです？　きっと話ができますわ」

「アトラ、お前はどこの格闘家だ？」

コイツは本当に少し前まで病弱な少女だったのか？

と、言いたくなるほど脳筋的なことしか言わないな。兄貴の方がまだ常識人だ。

「イツキ様……」

リーシアがとても心配そうな表情で戦う樹を見つめている。

うーん……。
「リーシア。お前はどうしたい？」
「わ、私は……」
リーシアは祈るように手を合わせつつ、迷いを見せながら答える。
「とてもつらそうにしているイツキ様の悩みを解決したいです」
「こっぴどく捨てられたのにか」
凄いな。本当、リーシアってどこの聖人かと思うほど一途だよな。
樹も幸せ者だ。
「とりあえず樹は賞金稼ぎとしてコロシアムで戦っているみたいだな」
奴隷商に少し調べさせた結果、樹が表裏関係なくゼルトブルのコロシアムに連日参加して金を稼いでいるのがわかっている。
どうやら金を欲しているらしい。
ただ、どこに泊まっているのかまでは調査が終わっていない。
何のために金を稼いでいるのかも調べた方がいいのは確かだ。
樹のことだから、何か偽善行為をするために戦っているんだろうが。
今回の大会が終わったら泳がせて調べるか……それともそれとなくおびき出すか。
「パーフェクト……今日こそ俺が勝つぞ」
対戦相手が樹に話しかける。
「いいえ、今日も僕が勝ちますよ」

「抜かせ！　お前の攻撃は見切ったんだよ！」

お？　樹も相手の選手には返事をするようだ。となれば先ほど俺達が声を掛けても無視したのは、コロシアムに意識を集中させていたから……なのか？

ただ、目付きがおかしいのは遠くからでもわかる。

変な弓を持っているしな。不自然に白いくせに禍々しいデザインの弓を。

どことなく変なオーラが漂っている。

「戦闘中は呼びかけに応じると見ていい……のか？」

「ナオフミさん！」

リーシアがそこで俺に声を掛けてくる。

「あの……私、イツキ様と話がしたいです。そのために、コロシアムで戦わせてください！」

「それがいいかと私も思います。あの武器から嫌な気配がしますし」

ラフタリアもリーシアの提案に頷く。

「アトラの案に近いものがないか？　まあ、錬の前例があるから早めに手を打つべきか……」

「盾の勇者様、ならば手がありますです。ハイ」

そこで奴隷商が提案してくる。

「なんだ？」

「今晩、使われていない闇の闘技場がありますです。そこに弓の勇者をおびき寄せて捕らえるのです。ハイ。今やっている大会の賞金を渡す際に招待状を渡しますです」

……何だろうか。裏に何かが関わっている気がする。

「……勇者の捕縛に貢献したら女王とかから報奨金が出るとかか？」
「さすが勇者様！　私共の真意を読み解くその理解力に脱帽です。ハイ」
「何がさすがなんだよ……」
いくらなんでも単純すぎるだろ。
「勇者同士の死闘を見世物にするとかはやめろよ。観客の生命の保証はできないぞ」
「もちろん、観客は招待しないように致しましょう」
問題はカースに犯されていた場合だ。錬はエクレールの説得に応じたが樹もそうとは限らない。
「上手い話には裏がある、と考えて樹が来ない可能性はないのか？」
「なくはないと思いますです。ハイ」
とはいえ事情を聞くには良い手段だ。
ノコノコとやってきたら戦いをするように見せかけて聞けばいい……か。
「ルールはどうする？」
「弓の勇者は個人戦のコロシアムを好むそうです。ハイ。例外として相当に賞金額がある場合は団体戦に一人で参加したという報告はありますです」
ふむ……だとすれば確実におびき出す場合は個人戦の闇のコロシアムの招待状を渡せばいいと。
団体戦であまりにも賞金額が多い場合、怪しむ可能性は捨てきれないし、賭けになるな。
来なければ全く意味がない。
「わかった。とりあえずリーシアが説得したいというのなら、初戦で戦わせる。その後は俺達だな。茶番用の人員は確保しておこう」

村の奴隷達でいいだろ。サディナやセイン辺りが参加しているように見せかければ箔はつく。
「はい！　ありがとうございます！」
リーシアが礼を述べるが俺は軽く手を振って応じるに留める。
「説得して保護できるといいな」
「はい！」
「では私達はどう致しましょうか？」
ラフタリアとアトラが尋ねてくる。
「リーシアが負けたらだな、偶然を装って戦えばいいだろ」
「わかりましたわ！」
「アトラ……お前は出るなよ」
樹を殺しそうで怖い。
こうして俺達は樹を裏のコロシアムにおびき出すため、偽りの大会を計画したのだった。
樹にファイトマネーを渡すついでにチラシを持たせ、ついでに住処まで追跡する。
だが、途中で人ごみにまぎれられた所為で追跡は半分失敗した。ある程度目星はついたがな。
奴隷商が用意した裏のコロシアム会場は……小さな酒場の地下にあるこぢんまりとした闘技場だった。なんていうか闇のプロレス場とかそんな雰囲気のある場所だ。
最低限の控室とやや狭い闘技場しかない。
奴隷商が手配した魔法使い達が会場に儀式魔法『聖域』を施した。

これでポータルでの逃走は不可能になっている。
樹に渡した招待状にもその辺りは丁寧に書かれている。
おかしな点を察した段階で逃げられかねないから、ここは慎重に臨んだ方がいいだろう。
で、樹はその日のうちにノコノコとやってきて選手登録を済ませ、控室で待機している。
本当にあっさりと来たので、拍子抜けだ。
「おびき出すのは成功したが、樹がどうしてここにいるのか、なぜ金を欲しているのかを聞き出さないとな」
「本当に樹がいたのか？」
俺の話は聞かないかもしれないが錬の言葉なら耳を傾けるかもしれないから、村に戻って錬を連れてきた。
元々よく話をしていた間柄らしい。錬も二つ返事で了承してくれた。
「ああ、一回戦はリーシアと戦わせる。次は錬、お前が説得してみてくれ」
「わかった！　樹もきっと……苦しんでいるんだな」
錬は真面目に俺の指示に従う。
ま、自分の境遇に重なるもんな。どうにかして助けたいとか思っているんだろう。
「……リーシアさん。お願いします」
ラフタリアがリーシアを激励する。するとリーシアは元気よく頷く。
「は、はい。今度こそがんばりましゅ――」
ここで噛むとは、どこまでも締まりがない。

だが、だからこそリーシアなのかもしれないな。
「リーシア、樹に強くなった姿を見せてこい。お前は十分に強いということをな」
「はい！」
俺の激励にリーシアは元気に答える。
そうだぞ。お前は十分に強くなったし、ステータス的な意味でも技術的な意味でも花開いている。
思えばカルミラ島で仲間にし、変幻無双流のババアの修行をし、霊亀事件の時にキョウ相手に覚醒して戦い続けたんだ。
その異世界での出来事でリーシアも度胸をつけ、死闘を経験したんだ。
以前の……樹の元でパシリをしていた時とは違うことを見せてこい。
ゴーンとゴングの音が響き、リーシアが闘技場の方へと歩いていく。
俺とラフタリア、アトラはそれを見届けてから戦いがよく見える特等席へと移動した。
「ではこれから、パーフェクト＝ハイド＝ジャスティス選手、対、リーシア＝アイヴィレッド選手の決闘を開始するぅううううう！」
サディナと戦った時に審判をしていた奴がシャウトしながら宣言する。
やらせの大会なのによく手伝ってくれたな。
わーっと俺のところの奴隷共が拍手をする。
何かあったらすぐに逃げろと命じてある。警護にサディナとセインがいるから、最悪時間くらいは稼げるはずだ。
「イツキ様！」

リーシアが樹に声を掛ける。
するとブツブツと呟いていた樹が顔を上げてリーシアを凝視した。
「おや？　相手はリーシアさんですか。これは楽勝でしょうね」
樹の中でリーシアはどんだけ雑魚なんだよ。
「イツキ様！　どうか話を聞いてください。事態はとても重く、イツキ様の身にも危険が迫っています。そのために、ナオフミさんやレンさんとお話をしてください！」
リーシアが特等席の俺と錬を指差す。
俺はとりあえず来ているぞとばかりに手を振る。
すると樹の視線がものすごく険しくなった。

十二話　正義VS正義

「尚文……」
凄い殺気だ。今まで感じた対人戦の中でも飛び切りちりちりとした何かを感じる。
だが、なんでそんな殺気を放って俺を睨みつけてんだ？
「アナタの行い！　断じて許せるものではありません！」
「……いきなり何を言っているんだ？」
俺が何か悪いことをしたか？

「まあ、悪事に心当たりがないかと言われたら……腐るほどあるが」
「反論できないのが悔しいところですね。まったく」
ラフタリアが嘆くように呟く。いいじゃないか、そうしないと生きていけなかったんだから。
「尚文様こそ正義。悪事などありませんわ」
「それもどうなんだろうな……」
アトラの言ったことを考える。俺こそがルールなんてそれこそ樹と同じになるぞ。
今の樹はカースに侵食されているのか、それとも素なのか、微妙な線だな。
「では言いましょう。アナタは奴隷を集め、重労働に従事させ利益の全てを吸い上げているそうじゃないですか！」
「なにを当たり前のことを言っているんだ？」
奴隷ってそういうモノだろ？
もちろん労働には対価を支払うのは当たり前だけど、奴隷って一度手に入れたらいちいちその対価を支払わなくていい労働力だろ？
そりゃあ人を買うことに抵抗があるかないか、と聞かれればあるが、しょうがないだろう。
極論すれば奴隷というのは現代社会でいうところの掃除機に似ている。
毎日ゴミ掃除をするのはかわいそう、なんて掃除機に言うか？
奴隷なんていうのは掃除機や洗濯機と同じで便利な道具なんだよ。
「あの弓を持った兄ちゃん、なに言ってんだ？」
「重労働……？　盾のお兄ちゃんってそこまでしたっけ？」

「できる範囲でしか命令してこないよね。むしろ程よいくらいの仕事量だよね」
などとサクラをしてる奴隷共が囁き合う。
「それより兄ちゃんが作ってくれたポップコーンって料理がうめー！」
キールが観客席で俺が雰囲気作りに作ったポップコーンモドキをバクバクと食っている。
そんなに美味い料理じゃないぞ。
「これが終わったら遊んでくれよー」
「あそぼー！」
……ああもう気が散るだろ！　黙ってろ。
「あらー、みんなナオフミちゃんに絶対服従ね！」
ここで何を言ってやがる、このシャチ女ことサディナ！
「村の子達は楽し――」
「村の者達は奴隷でありながら楽しく作業に従事しています、と申しております」
セインとその使い魔であるぬいぐるみが感想を述べる。
気にしたら負けだ！
「好んで働いているように見せかける、それこそが悪！　聞きましたよ！　病弱な妹に高価な薬を提供する代わりと称して兄に重労働を強いていると！　マルティ王女が助けようとした奴隷の話です！」
「ヴィッチが人助けなんかするわけねぇだろ！」
脊髄反射で怒鳴ってしまった。だが、間違ってない。

あの女が善行などできるはずがない。これは断言できる。
「ヴィッチさんとは誰のことでしょうか……？　尚文様、私達以外にも助けた兄妹の方がいらっしゃるのですね」
「いや、お前だよ」
おそらくは俺の隣で首を傾げている奴とその兄のことを言っているんだろう。
どこで仕入れた情報かは知らないが、適当なことを言いやがって。
ヴィッチが亜人を助けるなんて、天地が引っくり返ってもありえない。
つーかヴィッチ!?
「おい樹！　お前、今ヴィッチの名前を言いやがったな？　なぜここで出てくる！」
経緯がわからない。
いや、まさか樹の背後にヴィッチが暗躍しているというのか？
だが、樹は俺の話を聞くつもりはないようで、ツラツラと弾劾を続ける。
「更に金持ちの貴族に薬を売り、貧乏人には何も施しをしなかったそうじゃないですか」
行商でのことを言っているのか？
いや、過去の……神鳥の聖人としてメルロマルクを巡っていた頃の話か？
「俺は聖人じゃない。商売をするなら金の無い奴に売るはずないだろ」
当たり前のように俺のところに顔を出して、薬を恵んでほしいと上から目線で言う奴等のことを言っているのだろうか？
「やっと悪しき貴族が天命である病で死ぬと思っていたのに、盾の勇者が余計な真似をした所為で

民達の恨みは晴れなかったという話を聞きました！」
「それこそお門違いだな。金を出して薬を買った連中のその後なんて俺の管轄から外れるだろ。そもそも悪いことをしたからといって薬を売らないとか、死んだ方がいいって考えの方がおかしい」
なに？　金持ちに薬を売りつけるのも悪になるわけ？
もしもその金持ちとやらに売らなかったら、そいつが売らなかったと俺を悪く言う。
結局何をしてもダメだと思われるだろ！
「人を助ける勇者としての力があるくせに息子を助けてくれなかったと嘆く母親の話を聞いているのですからね！」
「……誰のことを言っているんだ？」
全然身に覚えがないぞ。
助けなかった？　重病ならできる限り助けるぞ。変幻無双流のババアみたいに。
後で物でもなんでもいいから請求するがな。
「絶対に許せないと僕に泣きついてきた女性がいるのですからね！」
それでも、俺に恨みを持つ連中がいる？
……ああ、なるほど。
「その息子って奴、死んでたんだろ？」
「そうです！　尚文の盾にはそんな奇跡の力があるのに使わなかったそうじゃないですか！」
「なにを戯けたことを……いくら伝説の盾であっても死者を蘇らせる力があるわけないじゃないか。
そういうのは他の世界の連中の能力だ」

死んでも蘇った連中を知っている。ま、そいつらを殺すことには成功したがな。
話は逸れたが被害者面の連中が誰だか特定できた。
ごく稀に村や町に出没する、死人を生き返らせてくれと死体を持ってくる連中だ。
聖人という噂や盾の勇者という実績からそんなことをせがむ連中がいる。
そういう連中は、奇跡を勝手に期待して俺に懇願してくるのだ。
どうか死んだ者を生き返らせてくれ、とな。
そういう連中に論理は通用しない。
できないと言うと、涙ながらに諦めるのならまだいい。
逆切れしながら俺に殴りかかろうとする者が多いこと多いこと。
だから町や村の入り口には死者を生き返らせることはできないと看板を立てた。
「逆恨みを集めて、どうしても俺を悪と断罪したいようだが、それならお前がやればいいだろ？
同じ勇者なんだから」
「いいえ、盾にだけある特殊な力だとマルティ王女は言いました！」
ヴィッチの奴、都合のいいことを樹に囁いているようだ。
樹は俺が悪であると説明するのに丁度良い相手だということだ。
俺が何を言っても視野が狭くなっている樹は説得に応じる気はないみたいだ。
しかし……ヴィッチには勇者全員をダメにしなきゃならない理由でもあるのか？
錬の時もそうだったよな。
弱っているところに上手く取り入ったんだろう。

これはぜひとも樹を捕縛してヴィッチの居場所を吐かせるべきだ。
いや……樹の隠れ家辺りに潜んでいる可能性が高い。
奴隷商が子飼いにしている連中が居場所を特定してくれることを祈るしかないな。
「樹、それはおかしい。尚文とお互いの武器の能力について照らし合わせてみたが、効果の違いこそあるが、基本的には同系列の技能しか存在しない。尚文にそんな能力があるなら、俺の剣にもそれに匹敵する別の能力があるはずだ。それとも樹の弓には何か特別な能力があるのか？」
錬がもっともな内容で口を挟む。
確かに盾の防御と剣の攻撃という基本の差はあれど、技能系のスキルは基本的に同一規格だ。
それは錬の証言通り。
まあ、現在は判明していないが、死者蘇生の能力が存在する可能性まで否定はしない。
伝説の武器の中でそういったスキルがあるとしたら、そりゃあ盾だろうし。
だが、使えたら使っている。それこそ高額で死者を生き返らせて、金儲けしてるわ。
むしろ死者蘇生ができるならオストを蘇生させて戦力にするぞ。
天下の霊亀様が味方として戦ってくれれば、波だろうとなんだろうと解決できそうだしな。
「他にも数々の罪があります！　絶対に許せませんよ！」
「話にならんな。むしろ弱いお前が霊亀に敗北した所為で助けられなかった連中はどうなんだ？」
自分のことを棚にあげやがって、そのくせ正義面で俺に説教なんて笑わせてくれる。
「……話になりませんね。どこまでも反省しないというのならもう容赦しません！」
樹が弓を構える。

「僕が新たに手に入れた素晴らしい弓。その名もジャスティスボウ！　これでアナタ達を倒す！」
樹は観客席に向かって矢を射出した。
無関係な連中を巻き込むのがお前の正義か？
「させるか！　エアストシールド！　セカンドシールド！　ドリットシールド！　流星盾！」
フロートシールドも展開し、観客席にいた奴隷達を守る。
「させない」
「いくわよー！」
セインとサディナもスキルと魔法を展開させて飛んでくる魔法を叩き落とす。
「樹！　やめるんだ！」
錬も奴隷達を守るように、飛んでくる矢を剣で払い落とす。
ラフタリアとアトラも応戦してくれた。
幸いにして、奴隷達に被害はなかった。
だが……熱いシャウトをする審判に矢が命中してしまった。
「ぐは――」
「だ、大丈夫か！」
バタンと倒れた審判だったが、すぐに立ち上がる。
「尚文様、禍々しい気が一斉に膨れて、あの方を貫きましたよ？　なんでしょうか？」
「わからん……」
大丈夫なように見えるのだが……。

「イツキ様、私は闇のコロシアムの審判として盾の勇者の陰謀に肩入れしていました。どうかお許しください」

はい？　なんだこの審判。心変わりして俺を裏切るのか？　なんかおかしいぞ。

「いいでしょう。反省してこんなことから足を洗うのですよ」

「はい！　イツキサマー！」

審判の目がおかしい……まるで洗脳されているみたいだ。

「樹……お前、その弓」

錬が指差すと、樹は晴れやかな笑みを浮かべつつ答える。

「凄いでしょう？　この弓の力を解放して相手を射抜くと洗脳が解け、みんな僕を理解してくれるんです」

洗脳が解けて、理解してくれる？

他人がそんな簡単に同調してくれるわけないだろ。

現に樹、お前は俺を理解しようともしていないじゃないか。

むしろ洗脳してるのはお前だ。なにがジャスティスボウだ。

「この弓はマルティ王女が僕に授けてくれた聖なる力を持つ武器！　この武器さえあれば救いようのないクズであろうとも救うことができるのですよ！」

……ここは、樹の視点で考えてみよう。

霊亀に負けて全てを失ったところでヴィッチに唆（そそのか）されて新たな力であるカースシリーズが目覚める。

ロボットアニメでいうところの機体交換的な興奮状態のまま、コロシアムで金稼ぎをさせられている？

ただ、伝家の宝刀というべきものなのでむやみやたらに使わないようにしているとかそんなところか。

どちらにしても、やはり樹もカースシリーズに侵食されていた。

「樹、一応教えてやる。その弓は正義なんて生易しいものじゃない。洗脳する力を持った禍々しい弓だ」

「違います！　この弓は！　まさしく正義なんです！」

主人公がわけのわからない論理をふりかざして相手を倒し、倒した相手に自分の論理を理解させていく漫画やアニメを見た覚えがある。

一応筋が通っているように見えるけど、戦うことによって相手に理解させようとする論理って別視点だとこうも歪に見えるんだな。

暴力に屈した程度で揺らぐ信念なんて最初からないに等しい。

「さあ、みなさん！　僕と戦い！　何が正しいのかを理解してください！」

錬の時とは次元が違う。

錬はなんだかんだで自分が悪いと理解していたが、樹は違う。

自分の正義をどこまでも愚直に信じて突き進んでいる。

七つの大罪で該当しそうなものというと傲慢……だが、微妙な線だ。

他にあるというと八つの枢要罪の虚飾？

これはアニメや漫画とかで独自解釈される八つ目の大罪とかかもしれない。
中二病になるけどな。
俺が見たことのある八つ目は二つ。
一つは正義。
行き過ぎた正義はどこまでも冷酷で無慈悲だ。
どんな小さな罪でも決して許さず、死をもって償わせる。
もう一つは……狂信。
どこまでも信じたことを突き進み、その先に破滅が待ち構えていたとしてもそれを辞さない。
あるいは、例に挙げた四つ全てが該当している可能性もある。
錬も暴食と強欲といった具合に複数のカースに侵食されていた。
今まで判明しているのは同時に二つだが、三つ四つ同時もあるかもしれない。
樹が導こうとしている正義とはどんなものかを垣間見た気がする。
「違います！」
とても大きな声でリーシアが樹の宣言に異を唱えた。
「イツキ様はナオフミさんを誤解しています！」
「リーシアさんですか、アナタも尚文に洗脳されてしまっているのですよ」
「イツキ様は言いましたよね、ナオフミさんが奴隷に重労働をさせて利益を吸い取っていると」
樹は不快そうな顔をしながら頷く。
「ではなぜ、ナオフミさんのところで生活している方々は皆健康なのですか？　使い潰された奴隷

から話を聞いたのですか？　死にそうなほど酷い目に遭っている方と話をしたのですか？」
「そんなこと知りません。ですがマルティ王女やマルドが間違ったことを言うはずないじゃないですか！」
「イツキ様自身が確認されたのかと聞いているのです！」
あーこりゃあリーシアの正義スイッチが入ったな。
キョウ以来、久しく発動していなかった。
だが、この状態で戦闘になれば覚醒リーシアを見ることができる。
「私はナオフミさんが村に奴隷の方々を連れてきて一から復興していく様をずっと見てきました。奴隷の身分に身を落とした方々をナオフミさんがどれだけ救ったのか、イツキ様は知っているのですか？　それを……重労働させて利益を吸う？　いい加減にしてください！」
「そうだ！　あの村には嫌々仕事をしている子供なんて一人もいない！」
錬も便乗して樹の説得を始める。
「そうだぜ！　兄ちゃんが助けてくれたからみんな生き生きとがんばってんだ！」
「がんばって村を復興させようとしてるよ！」
奴隷共が揃って樹の言葉に異議を唱える。
「何を言おうと当人がハッキリと自白したのです。これは揺るぎようがありません！」
「自白？　奴隷をコキ使うってやつか？　その通りだが？」
「ナオフミ様、それは説得力がまったくありませんし、どうなのでしょうね……高騰する村の子達を必死に買い集めたんですから、利益とか完全にマイナスですよね」

ラフタリアの嘆きが深い……。
俺は奴隷達をコキ使ってんの！　それでいいだろ。
「……尚文のところの連中は違うだろ。あんな楽しげに仕事をする奴を奴隷と呼ぶのはおかしい」
だが社会的にも奴隷紋的にも奴隷というカテゴリーだと思うんだが。
「むしろナオフミさんこそが村の方々の奴隷であるかのように働かされているんですよ！」
「な……！」
「そうだ！　毎日夜遅くまで分刻みで村や町に尽力して、更に自身を高めるように修行までしているんだぞ！　Ｌｖを上げる暇すらない！　これではどっちが奴隷かわからない！」
「なんだとぅ……お前等、なんてことを言うんだ！」
今すぐリーシアの奴隷紋を作動させてやろうか！
「尚文は、村の子達の親代わりだ！」
「あらー……そうね。ナオフミちゃんはみんなのお母さんよね」
「ちげぇよ！　誰がお母さんだ！」
何を勘違いしているんだ、こいつ等は！　特にサディナ！
というか、錬もリーシアも何を言っているのかわからなくなっているんじゃないのか？
「断じて違う！」
「尚文様、私は信じております」
アトラ、何を信じているんだ！
コイツ等……村の連中を含めて、後で説教だな。

「何を言おうと事実が物語っているのです！　尚文は悪と決まっています！」

樹も一歩も譲らない。だがリーシアは話を続ける。

「イツキ様？　あなたは清廉潔白だとでも言うのですか？　私にはとてもそうは思えません」

「演技はいい加減にしてください。吐き気を催す邪悪が！」

樹が苦い表情をしながらリーシアを睨みつける。

凄い罵倒だ。それをお前が言うのかって話だ。リーシアを投身自殺にまで追い込んでおきながら、よくもまあ善人面ができるよな。

「僕がすべきことはただ一つ。この世の悪を全て滅ぼすことです！」

「無理だな」

この世の悪を全てって、人がいる限り争いはなくならない。

で、樹の基準だと俺や錬も悪認定。

むしろ自分に頭を垂れない連中は全て悪だと認識しているに違いない。

「……僕の力はとてもちっぽけかもしれない。それでも僕は……僕はその理不尽を許すつもりはありません！」

樹がどこかの主人公みたいなことを叫びながら、弓を俺に向けて弦を引く。すると矢が出現した。

「尚文！　その理不尽を撃ち貫きます！」

風切り音を立てて樹の放った矢が俺に向かって飛んできた。

フロートシールドを移動させて受け止める。

「理不尽……ねえ」

それはこっちの台詞だけどな。

気に食わない勇者が召喚されたから陰謀を張り巡らせて迫害するとか、逆にどんだけ理不尽なんだよ。

何が理不尽だって？

樹、お前の発言そのものが理不尽の塊だぞ。

「……イツキ様、どうしてもご理解いただけないのですね」

リーシアが剣を前に出し、戦闘態勢に入る。

「イツキ様、私は貴方の正義を否定します。私の正義は貴方を認めません！」

「樹！　元に戻ってくれ！　そんな呪われた力に身を任せていたら、その先には破滅しかない！」

「邪魔をしないでください！」

樹が弓を上に向けて引いた。またも矢が放たれる。

軌道は……やっぱり俺か。

「ナオフミ様！」

ラフタリアが声を掛けてくるが、気にするなと手で合図を送る。

今度は矢掴みで止める。

「シャイニングアロー！」

樹が弓を更に強く引くと、光り輝く矢が出現する。

発射までに時間が掛かるってところか。

「イツキ様の考え、よくわかりました。私はイツキ様の敵として全力で戦わせていただきます！」

リーシアが張り合うように剣に手を添える。

「無双活性！」

リーシアの周りに空気の渦が巻き起こった。アレが無双活性ってやつか？

エクレールの時の比じゃないな。

錬が実況していたあの時よりも……俺にも目視できる何かがはっきりと噴出している。

「辺りの気を吸収していますわ。老師もやっていましたが、やはりあやるのですわね」

アトラはそれを感じて理解しようとしている。

見るだけで強くなれるとか羨ましい資質だな。

フォウルは大変だな。天才の妹を持って……それでも兄の方が強いことを証明しなきゃならない。

「はっ！」

リーシアが凄い速度で樹に向かって突進する。

「変幻無双流突剣技！　スパイラルスラッシュ！」

リーシアの持つ剣に螺旋の気の流れが生まれる。

「くっ！」

さすがの樹も受けたらタダじゃ済まないことを察したのか、紙一重で避け、矢を射る。

……なんで弧を描いて俺の方へ飛んでくるんだよ！

「流星盾！」

流星盾を展開し、樹の放った矢を受けるための防御結界を展開させる。

光を放つ矢が幾重にも分かれて俺のいる場所に降り注ぐ。

念のために矢が飛んでくる方向に盾を向けた。
一応、ダメージは受けていない。反撃効果は作動しないようにしている。
目の前にいるリーシアと戦えっての。なんで俺を狙ってくるんだよ！
「逃しません！」
一度目が外れたと同時にリーシアはスキルを放った樹に追撃を掛ける。
そのすべてがスパイラルスラッシュというもののようだ。
あそこまで連続して放つのは凄いな。
ただ、樹のカース武器は基本性能が高めなのか、リーシアの攻撃を受けてもあまり手傷を負っていないようだ。それどころか徐々に傷が再生している。
「その程度で……僕を止められると思わないことですよ！」
樹から噴出するカースの瘴気(しょうき)がリーシアを跳ね飛ばす。
「イツキ様、その力に呑(の)まれてはいけません！　絶対に後悔します！」
「後悔するのはそっちです！　早く、正義に目覚めるのです！　アロースコール！」
樹の矢が俺の方に飛んでくる。
面倒だな。名前からして矢の雨が降り注ぐスキルだろう。
「エアストシールド」
矢が分裂する前に盾で受け止める。
「たとえ多勢に無勢であろうとも、アナタさえ倒せば、僕の勝ちです！」
いや……お前、リーシアと一対一で戦っているだろ。

むしろお前が勝手に観客を攻撃しているだけだぞ。
そもそも樹の奴、押されている自覚があるのか？
……ヒーロー物の中にはヒーローが一人で大勢の敵と戦うものがある。
そんな路線をイメージしているのかもしれない。
リーシアのことを俺の手配した戦闘員とでも思ってるのか？
イー！　とか鳴く生物だとでも思っていそうだ。
どっちにしても外堀を埋めるように周りから倒していけよ。
とにかく、俺自身は錬やラフタリアの迎撃と矢掴みやフロートシールドでどうとでもなりそうだ。
「私は正義とは何なのかをイツキ様に出会ってから常に考えていました」
「悪に語る口などない！」
「悪……悪とは何なのですか？　正義とは何でしょうか？」
リーシアは説得を続ける。
俺は無駄だと思うが、それでもリーシアが貫きたい意志みたいなものなのだろう。
ここは樹の猛攻を俺が甘んじて耐えてやるしかないか……。
「イツキ様にとって、正義とは自身の満足が得られるものでしかないのではありませんか!?　暴力で押さえつけることが本当の正義なのですか！」
リーシアは自分の気持ちを語り、釣られて錬まで何か言い出した。
「正義なき力は暴力、力なき正義は無力という言葉があるよな。樹、お前にとって正義の味方というのは、憧れだったんだろう？　お前はあまり自分のことを話さなかったし、昔の俺は知りたいと

も思わなかった。だけど、今の俺はお前のことを知りたい。樹が何を求めて、何を悲しむのかを知りたい。だから、教えてくれ！」

樹の攻撃が集中する俺のことも考えてほしい。

とはいえ、確かに錬の言うことも一理ある。

樹ってどんな奴なのか全然わからないんだよな。

性格は理解できるけど、今までどんな生活をしていた奴なのかまったく知らない。

ここまで正義正義とこだわる理由は何なんだろうか？

「正義とは力。正しいことの証明。弱きを助け、強きを挫く！」

……ん？　ふと、何かが引っ掛かった。

樹の行動を逆に考えてみよう。

もしかして樹って、元の世界じゃ鬱屈した感情が渦巻いていた？

樹はヒーロー願望を持っている。

創作物のヒーロー主人公って、不自然に平凡な奴やいじめられている奴が変身や変装して悪人を倒すというものが多い。

スー〇ーマンとかクモ男とかで有名なヒーローってそうだよな。将軍様プレイもそうだ。

樹が行う正義って正体を隠してのものが多かった。

なるほど。確かに正義の味方は力で誰かを救う。

それが集約するのは勧善懲悪。正義が勝ち、悪は滅びる。

「たとえ悪と罵られようとも！　僕は正義の味方だ！」

評価欲求と憧れ……そこから導かれる結論は——

「樹、お前がリーシアに行ったのはお前が受けた仕打ちそのままだ。だからリーシアを見ないようにしているな？」

「なに!?」

「ここはコロシアムでお前は選手だ。俺と戦いたかったら、まずはリーシアを倒してみろ。でなければ、お前は俺に挑む資格はない」

ここは条件を提示しなければ樹はいつまでも引くことがない。

ならば俺は樹にとっての悪として勝負を挑めばいい。

バトルモノでこういうシーンを見たことがある。

俺もこの世界に来て元康に何度もやられた手法だ。

どちらかが一方的に不利になる交換条件を出した上で勝負する。

今回の場合は、俺がこの条件を出す理由はないんだが……リーシアに任せると約束しているしな。

「くっ！」

やはりそうか。

これは推測だが、樹は元の世界でいじめられていた可能性が高い。

そしてリーシアは樹を中心としたパーティーの最底辺であり、いじめに等しい行為を受けて追い出された。

つまり樹にとってリーシアとは、過去の忌まわしい記憶を蘇らせる存在なんだろう。

そんな断ち切ったはずの過去の自分が立ちはだかるなんて、正義には絶対にあってはならない。

「そうですか。悪に洗脳されたリーシアさんを倒さねばいけないのなら、戦ってあげましょう」
リーシアが俺に深々と頭を下げた。
「ナオフミさん、ありがとうございます。後は任せてください。イツキ様を説得してみせます」
「ああ、少しは期待してやる。エクレール同様、今のお前ならできるかもしれないしな」
口ではこんな風にしか言えないが、俺はリーシアをかなり評価している。
弱い弱いとバカにされても屈せず、自分よりも圧倒的な強者が相手でも決して引かない心を持っているからな。
どちらにしても、やっと樹がリーシアを敵として認識したか。
問題はリーシアが敗北した場合だ。そうしたらどう対処していくのがいいだろうな？
とりあえず……。
「奴隷共はここから退避しろ。戦闘の邪魔になる。サディナ、セイン、アトラ、避難を任せたぞ」
「わかったわ、ナオフミちゃん」
「うん――」
「任されましたわ！」
俺の指示でサクラをしていた連中が下がり、コロシアム内は樹とリーシア、俺、ラフタリア、錬だけになった。
それにしてもリーシアも大概だよな。どんだけ樹が好きなんだって話だ。
「行きます！　はぁああああああああああああああ！」
かなりの速度でリーシアが樹に詰め寄る。

「チッ！　セントアローレイン！　スプレッドストレイフィング！」

樹はバックステップをしながら矢を何度も射出し、リーシアを射抜こうと試みる。

前方に矢を放った直後、時間差で上に放った矢がタイミング良くリーシアに降り注ぐ。

回避するのは難しい。

「変幻無双流突剣技！　円！」

しかし、リーシアが突剣を一回転させると、甲高い音を立てて樹の放った矢は全て薙ぎ払われた。

お互いまだ全力を出していないようだが、リーシアの奴、勇者である樹に一歩も引かずに戦えているじゃないか。

これが本当の変幻無双流ということなのだろうか？

リーシアの方が難しい技を体得しているようなことをエクレールも言っていた。

確かにリーシアはとても強くなっている。

矢を全て叩き落とされ、苛立ったような顔付きで樹はリーシアを睨みつける。

「イツキ様？　今戦う相手は私です。注意が散漫になっていますよ」

時々俺の方をチラッと見たりするからな。

樹にとってはリーシアは俺と戦うための通過点程度の認識なんだろう。

そんな認識ではリーシアに勝てるはずもない。

今のリーシアはステータス、技術、覚悟、そのどれをとっても俺の配下の中では最上位の一人だ。

「ふ……言うようになったではありませんか、リーシアさん。ですが僕の本気がこの程度だと思っているのですか？」

樹は禍々しい気を立ち昇らせて弓を掲げる。
「ロウファナティック――!」
バシッと辺りに何か結界のようなものが張られるのを感じた。
「うおおおおおおお!」
樹の目が赤く、怪しく輝き始めた。
そして禍々しい気が集まり、全身を包む鎧と化す。
一見すると神々しい羽の生えた天使を模した全身鎧……なのだが、所々の装飾に角や悪魔を模した意匠が散見される。
セルフブーストスキルだな。間違いない。
しかもスキルで疑似的に鎧を作り出すとか。
レンジャーモノやライダーとかの戦闘服的な全身鎧だ。
リーシアは、ただ静かに樹の攻撃を待ち構える。
その表情は、真剣そのものだ。
ここで下手な横やりを入れようものならリーシアが許さないだろう。
一歩踏み出して援護したそうにうずうずしている錬を、俺は手を前に出して止める。
「行きますよ、リーシアさん。これで僕の主張を理解し、尚文を共に倒しましょう!」
「いいえ、私は今のイツキ様を絶対に認めません。たとえ、命を奪われようとも!」
リーシアは突剣を床に突き刺し、屈んだような態勢で構える。
なんだ? リーシアは目視できるほどに地面から気を集め、突剣全体に気を纏わせている。

「変幻無双流……奥義、一の型……」
リーシアは突剣を引き抜き、走り出す。
「陽！」
リーシアが光を発しながら突剣を樹に向けて突き出した。
なんだろうか。神々しいスーパー的な能力アップをしているような気がする。
「流星弓！」
勇者共お得意の流星シリーズが放たれる。
樹の場合は射出した矢の後ろから星が飛び散る厄介なスキルだ。
矢自体も相当攻撃力はあると見ていいだろう。
「二の型、月！」
リーシアを中心に展開していた光が更に広がり、樹の放った矢を三日月形に切り伏せた。
樹も自分の放った必殺スキルを突破されて驚愕の表情を浮かべている。
「まだだ！　まだ僕はベストを尽くしていない！」
ならさっさと本気を出せよ！　というか、錬も似たようなことを言っていたよな。
思わず錬の方に視線を向けると、錬が恥ずかしそうに視線を逸らした。
「三の型、星！」
リーシアが樹の目の前にまで詰め寄って突きを繰り出す。
エクレールの多層連撃だったか、それに匹敵する連続攻撃だ。
一発ごとに樹を守っている鎧のパーツが壊れて霧散していく。

「ぐ……」
樹に向かって突き出される攻撃の数々。その一つ一つに気が混じっていると思う。よく見えないがバシンバシンと独特の音が聞こえる。
あれはシャレにならない。盾の勇者の俺が危機感を抱くんだから間違いない。
「いい加減にしろぉおおお！」
ドンと禍々しい気を爆発させて樹はリーシアを吹き飛ばす。
「ふぇ——まだです！」
吹き飛ばされながらも受け身を取って着地したリーシアは、呼吸を整えて攻撃に備える。
「正義がリーシアさん程度に止められるはずがないでしょうが！　必殺技を潰すんじゃない！」
潰すなとか何を言っているんだか。
ターン制のＲＰＧじゃないんだぞ。
むしろアクションゲームとかだと必殺技とかは進んで潰しにいくだろう。
……ああ。ヒーローモノだとヒーローの必殺技は相手が待ってくれるのか。
光線とか、キックとか、五人の武器を合わせて放つ技とかな。
「イツキ様、もうやめましょう。貴方の正義は間違っています！　早くその力を手放してください」
リーシアは感情の籠った声で強く諭す。
確かに一方的に攻めているように見える。錬の時とは違い、樹本人にもダメージが入っているしな。
「違う！　僕は、この新しく手に入れた力で、世界を、救うんだ！」

弓の形が歪んでいく……それに呼応して樹の禍々しい気も色を変えていくのが俺には見える。
……おそらく、錬や元康と同じように何か別のカースが目覚めたのだろう。
複数のカースで樹が強化されればリーシアでも分が悪いか？
見た感じ、元康とは違って勇者全員分の方法で強化はされていないと思うけど……。
「大丈夫か、リーシア？」
「はい。手助けは無用です」
「……そうか。やりたいようにやるといい」
状況次第では助けに入らなければならないが、リーシアがそう言うのなら見守っていよう。
みんな、息を飲んで状況を見ている。
しかし錬を説得した時のように樹を昏倒させることは難しいようだ。
腐っても勇者、ということなのかもしれないな。
決定打が足りないという点では同じだろう。
「喰らえ！　シャドウバインド！」
樹がリーシアの足元に狙いを定めて矢を放った。
その名前から非常にイヤな予感がする。
「リーシア——」
命中はしなかった。矢はリーシアの後方に落ちたからだ。
「か、体が！」
だが俺が注意する前に、リーシアが動けなくなった。

やはりそうか。相手の影に当てることで動きを封じるスキルだ。
「バインドアロー！」
動けなくなったリーシアに樹は更なる束縛スキルを放つ。
リーシアの体が飛んできた矢で地面に縫いつけられる。
「ま、まだ負けません！」
「いいえ！　これで終わりです！」
『その愚かなる罪人への我が決めたる罰の名は真鍮製の雄牛による炙り殺し也。猛る雄牛のような断末魔の悲鳴を上げながら悶え苦しめ！』
「ファラリスブル！」
アイアンメイデンのように……雄牛を象った像の腹部が開いてリーシアを閉じ込める。
そして腹部に業火が巻き起こった。
「リーシア！」
樹が勝利を確信した笑みを浮かべる。
間違いない。アイアンメイデンに匹敵するスキルだ。
「これで僕の勝利です。さあ、尚文、首を洗って待っててください」
く……勝てるかと思ったが、やはり甘かったか。
まずはリーシアを助けることを考えないと……錬なんて咄嗟に走り出しているぞ。
そう思ったところで……樹の作り出した雄牛にバキッとヒビが入る。
「なに？」

樹の顔が驚愕に彩られた。
そして甲高い音を立てて雄牛は砕け散り、リーシアが飛び出す。
「四の型！　魔！」
リーシアが樹に再接近して大きく突剣で薙ぎ払う。
なんだ？　リーシアの剣先が輝いて軌跡が黒く染まる。
「ぐ……め、目が!?」
樹が両手で顔を覆って呻きだす。盲目の付与効果のある攻撃か？
「勝手に勝ったつもりにならないでください」
肩で息をしながらリーシアは言い放つ。
処刑器具名のスキルすらも突破するのか……リーシアの成長は驚愕の域に達している。
凄いな……勇者じゃなくても人はここまで強くなれるんだな。
あの情けなかったリーシアがここまでの成長を見せたんだ。樹、お前が見捨てたリーシアが、だぞ？
「どこまでも、どこまでも僕の邪魔をして！」
樹が目を擦りながらリーシアを怒鳴りつける。
「絶対に許しませんよ！　正義である僕をここまで煩わせるなんて！　前座がどこまでも出しゃばっちゃいけないのです！」
樹の弓が更におかしく変化していく。
既に白い羽根の生えた弓ではなく、悪魔っぽい蝙蝠の羽根が露出しだした。

「シネ……歯向かうモノは……シを！」
「イツキ様、何度でも言います。早くその力を捨てて、元に戻ってください。貴方は、そんな力に頼ってはいけません」
……リーシアが泣いている。
想い人が堕ちていく姿に涙している。
それを止めるだけの力が、今の自分にはあると信じて、剣を振るっている。
しかし樹は、もはやリーシアを憎悪の対象としてしか見ていない。
「正義のために！　シネ！　お前等はこノ、世の、アクダ！」
滅茶苦茶に弓を引き絞って放つ。
その矢が全てリーシアに向かって飛んでいく。
リーシアが全てをはたき落していくが、突然イヤな音が聞こえた。
「ナオフミ様！」
「ああ！」
それはリーシアの突剣、ペックルレイピアの折れる音だった。
その折れた剣を……気の力で補って振り回すリーシア。
だが、形のないものを維持するのは相当厳しい。
俺は盾からドロップ品の剣を出してリーシアに投げる。
「リーシア！　このままじゃ不利だ！　受け取れ！」
が、リーシアはその剣を無視して樹と問答を続けていた。

「ナオフミさん、すいません。それは……私の正義に反します！」
樹が目に狂気を宿して笑う。
「何を笑っているのですか？　イツキ様、私はまだ、負けていません」
「ナニを言っているのか。アナタは、もう負けです」
「いいえ……イツキ様は前におっしゃったではありませんか。正義は最後まで諦めないと」
「ククク……愚かな。アナタハ悪なのデスヨ」
「……イツキ様。私は、私はたとえどれだけ苦痛に、絶望に追い込まれてもう諦めません。それはイツキ様が絶望から私を助けてくださった時に、教えてくれたことであり……ナオフミさんからも見せてもらったことです！」
静かに呼吸を整えて、魔法を唱える構えでリーシアは答える。
剣でダメなら魔法で応戦するつもりなのだ。
不正をせず、諦めないその精神。
リーシアの成長か……なんだろうか、とても誇らしく感じる。
あのダメダメだったリーシアがここまでの成長をするだなんて、俺でさえも驚きだ。
人間、死ぬ気でやればできないことはないとはよく言ったものだ。
「何度でも言います。イツキ様、どうか、その力を手放してください。そして一から、信頼を取り戻すため、世界の人々のために戦いましょう！」
「ナゼ、手放さないとイケナイ！　僕は、ボクはこの力で世界をスクウんだ！」
「イツキ様！　私は、貴方の正義が間違っていると、断言できます！　ナオフミさんの戦いを間近

で見てきたからこそ断言できるのです。ナオフミさんは他の世界の人達まで救おうと戦っています……みんなの前に立ち続けているんです！」

「悪は黙って退ケ！」

と樹が言い放ったのと同時だった。

その出来事に、この場にいる全ての人物が驚愕した。

それはリーシアの成長だとか、強さだとか、変幻無双流だとか、その程度のことじゃない。

樹の弓が強く光り輝き、樹本人も目が眩んで目を瞑る。

遠目だからこそ、俺には見えた。

——樹の弓から光が飛び出し、リーシアに向かって飛んでいった。

リーシアは避ける暇もなく、その光に当たった。

だが、リーシアは傷一つ負っていない。

樹の弓から飛び出した光はリーシアの手に収まったのだ。

そして、なぜか俺の視界にあったリーシアの奴隷紋が砕け散って消滅した。

「な、なんだ？」

「尚文様」

「アトラか。避難は終わったのか？」

「はい」

「それよりも尚文様」

アトラは樹を眺めながら続ける。

「禍々しい気の中心から眩い……清らかな気の流れがリーシアさんに飛んでいきました」
「……清らか？　伝説の武器にまだ隠された力でもあるのか？」
樹の弓からリーシアに力が飛んでいったと見ていい。
つまり、リーシアに樹の弓が力を貸した、と考えればいいんだろうか？
「リーシアさん？」
錬がリーシアに向けて声を掛ける。
「これは……」
俺も驚いた。
なにせリーシアの手の中には一本のナイフが収まっていたのだ。
形状は普通のナイフ。柄の部分に目立つ宝石が嵌っている。
但し、半透明で造形が曖昧だ。
魔法で作られたような不安定な武器？　アレはなんだ？
リーシアが手を添えるとナイフの形状が忍者とかが使いそうなクナイに変わる。
そしてブーメランへと変化した。
伝説の武器に似た形状変化する力を持っている？　一体何なんだ？
「な、一体、ナニが起こっているんだ!?」
樹でさえも事態に困惑している。少なくとも、樹が何かを画策しているわけではなさそうだ。
「そうですか……わかりました」
リーシアは何かを悟ったような顔をし、ブーメランを樹に向けて宣言する。

「イツキ様。貴方の正義は、貴方が所持する勇者の弓にさえも認められていない。イツキ様を止めるために、私に力を授けてくださったのです！」
「ウソだ！　そんなことがあってたまるか！　僕の弓が、裏切るはずがない！」
「私は、この力でイツキ様を止めてみせます！」
「ふざけるな！」
樹の弓から更に禍々しい気が噴出し、強く弓を引き絞る。
その弓から、天使や悪魔を模した羽を持つ夥しい数の矢がリーシア目掛けて放たれる。
それは形を変え、熊の形状になりながらリーシアに向かって突撃してくる。
「変幻無双流投擲技、ローリングスピン！」
リーシアが武器に気を練りこんで、樹目掛けて投擲した。
「ナー――どこまでも！　どこまでも絶対のセイギであるボクに歯向かって！　ぐふ！」
樹の周囲をブーメランが周回して切り裂いていく。
「違いますよ、イツキ様。貴方が間違っているから、弓が正そうとしているのです」
リーシアが右手を上げるとブーメランが手元に戻ってくる。
そしてリーシアはブーメランをチャクラムに変える。
ゆっくりと瞬きをするリーシアの目の色が僅かに変わったように見える。
目に気が集中しているのだ。
「今の私には、全てが見えます。イツキ様を縛っている気の流れも、イツキ様の弓に寄生しようとする力も……これで……」

リーシアは樹に向けて武器を投擲する。
「エアストスロー！　セカンドスロー！　ドリットスロー！」
エアスト？　その名称は伝説の武器のスキルにしか存在しないはず。
あれは伝説の武器？　七星の勇者の武器ってやつか？
リーシアの投げた三つの武器はそれぞれ別の形状をしている。
ナイフ、小型の斧、短い槍。
一体どんな武器なんだ？
仮に七星勇者の武器だとしても、槍は元康のはず。
そもそも投げた三つはどれも別カテゴリーの武器だろう。
投げるということは投擲具……か？
「トルネード……スロー！」
三つの武器は樹の周囲を何度も回りながら、竜巻となって禍々しい気を吹き飛ばしていく。
「ぐああああああああぁあああああ！」
リーシアは手元に再出現したチャクラムを樹の弓に向かって投げつける。
「イツキ様、これで、貴方が正義ではないことを証明いたしました……どうか、もう一度やり直しましょう？」
樹の弓にバキンとチャクラムが当たって、リーシアの手元に戻っていった。
そして――樹の弓の外装が……音を立てて崩れ落ちていく。
と同時に、樹に洗脳されていた審判が糸の切れた人形のように倒れた。

「ぐあああ……僕の、僕の新しい、救世の力が……」
「何度も言いますが、違います。そしてイツキ様、わかってください。正義は人の数だけ存在します。正義の反対は悪ではありません。正義です。負けた者が悪という烙印を押されてしまうだけなんですよ」
「違う、僕は……僕は、悪じゃない。僕は悪くなんかない。みんなが、アイツ等が……!?」
「他者を裁くこと、拒むことは正義ではなくとも簡単です。ですが、受け入れることも大事です。どんな人であろうとも更生することができると、私は信じています」
「う……うう……」
変な造形をしていた弓が砕け散り、樹の弓が元の……いや、まだ僅かにおかしな外装が残されている。
「アトラ、どうだ？」
「はい。禍々しい気はリーシアさんが所持している力によって祓われました。ですが……まだ根元が残っています」
「僕は……信じてくれた人達のために……」
それでも樹は諦めずに立ち上がった。しぶといな。
その時、俺のところに奴隷商の配下がやってきて小声であることを告げた。
「そうか。樹、お前が住処にしていた場所を俺達は特定した。これからお前をここに放置してそこに向かうとしよう。リーシアに敵わないような未熟者を相手にしてやる義理はない」
奴隷商の配下やゼルトブルの闇ギルドの連中に掛けあって調べさせた。

十分な裏が取れたらしい。後は俺が乗り込んで樹と結託していた連中を捕まえるだけだ。
「させませんよ！」
ふむ……ま、ここで知らしめてやるのも手ではあるか。
「樹……せめてもの情けを掛けてやろう」
「なに!?」
「お前の仲間が正義だというのなら、その場所へ案内しろ。場所は知っているが、お前が案内するんだ」
「騙されませんよ！　そうやってマルティ王女を捕まえる手はずなのですね!?」
「樹！　一方の言い分だけを聞いて真実がわかるのか？　それが正義と言えるのか？」
「そ、それは……」
錬の台詞に樹が言葉を濁し始めたな。
リーシアに負けたことで精神的にショックを受けているんだろう。
「お前の好きなゲームでも、そういうどっちが正義かを問うイベントがあるだろう？」
「……」
こちらが誠意を見せているんだ。樹も譲歩すべきなのではないかと迷いを見せている。
いや、心当たりがあると思っているんじゃないか？
かといってここでノコノコと自分達の基地に戻るわけにはいかないというところか。
というかヴィッチはなんで元康を裏切り、錬を騙して逃げたんだよ。
その理由が不明だ。

「樹、ヴィッチは犯罪者だ。その犯罪を償うにはどうすればいい？　もしくは無実を証明するにしてもだ。それともお前にとっては正義が証明できるのは殺し合いで勝った方だけなのか」
「ち、違います！」
「裁判でもしてみればいい。ヴィッチがこの国で善行をしているのなら、女王だって大目に見るだろう」
樹が騙されて絶望した場合、錬と同じく別のカースに目覚めて暴走する。
まだ……カーススキルを連発しているわけじゃないだろう。傷が浅いうちになんとかするべきだ。
俺はリーシアに目を向ける。
今ならまだ、樹は聞き入れる余裕がある。錬のように完全に絶望する前に助けてやれ。
そう目で伝えるとリーシアはコクリと頷いた。
「いいでしょう。僕がマルティ王女と仲間達の無実を証明してみせます！」
樹は戦うことを中断して自らの住処へと案内することを了承した。

十三話　償い

「そ、そんな……」
樹の案内で、既に特定されていた樹の住処へと俺達は辿り着いた。
ゼルトブルでも割と閑静な場所にある住居だな。

内部を調べたら、なんでも地下水路へと続く隠し通路まで完備された建物だとか。

住処に踏み込んだ俺達だが、ヴィッチは既に逃げ出したのか、毎晩酒盛りでもしていたかのようにゴミが散乱するだけのもぬけの殻となっていた。

きったねえな……そして酒臭い。

「で、出かけているだけですよ。尚文達に感づかれて逃げたとか」

「またそうやって事実を誤魔化すのか？　ん？　机の上に何かあるな」

つーかこれは錬の時と同じ筆跡だぞ。非常に嫌な予感がするな。

その下に妙に分厚い紙の束がある。ものすごく読みたくない。

「樹、お前はこの世界の文字が読めるか？」

メルロマルク公用語で書かれている。

毎度思うがヴィッチの筆跡って汚ねえな。癖字が酷い。

女王やメルティは綺麗に書くのにどうしてアイツはこんなに品がないんだよ。

「いいえ、尚文が異世界言語理解を教えてくれないからできないんですよ！」

「ふざけんな！　ほれ、錬。お前が読んでやれ。リーシアでもいいぞ。つーか樹、リーシアに教えてもらえ。そいつは学問なら勇者以上の化け物だぞ」

「ふぇえええ!?」

化け物と呼ばれてリーシアが情けない声を上げる。

直前までヒーローみたいに暴れていた奴とは思えない。

「ナオフミ様、もう少し優しく言ってもいいような気がするんですけど……」
ラフタリアの注意に、さすがに俺も言いすぎたかと思う。
だが、訂正したら俺の面子が立たない。
「えっと『そろそろ貴方が吸わせてくれる甘い汁がなくなってきたから、失礼するわ。貴方が毎日持ってくる大会の賞金は、可哀想な私達が美味しく頂きました。そう、盾の所為で奴隷のような苦しい生活を強いられた可哀想な私達に寄付をしてくれて助かったわ』」
読み上げる錬の顔は文が進むにつれて渋くなっていく。
ま、錬の時も同じような置き手紙があったもんな。
というか、あの女はこういう置き手紙を書かないと死ぬ病気にでもかかってんのか？
錬が二枚目の置き手紙を読み始めた。
「『マルド達も貴方にウンザリしてたのよね。いちいち偉そうに指図してくる貴方って、みーんなウザいって思ってるのがわからないのかしら？　正義正義っていう割に私達の嘘にコロッと騙されてる貴方の顔を見て笑いを堪えるのが大変だったわ』……なあ尚文、俺は読み間違ってないよな？」
錬が今にも破り捨てそうな苛立ちを見せながら手紙を寄越して尋ねてくる。
「サラッと見た感じだと間違いないぞ。表現に差異こそあれ、意味は同じだ」
三枚目は俺が受け取って読む。錬は既に怒りで肩に力が入ってるしな。
俺もいつ怒るかわからんが、手紙ももう終わりのようだ。
「『追伸、弱い貴方の顔も背丈も性格も、その全てが私の好みじゃないの。私のことが好きなら盾を倒してみなさい。そうしたらまた会いましょう。ホホホホホ。あと、残りは貴方への置き土産、

がんばって返してねー』……うぜぇえええええええええ！」
俺は手紙をくしゃくしゃにして壁に投げつける。
そしてテーブルに置かれた紙の束を樹に渡す。
さすがにこれがなんであるかは樹もわかるはずだ。
数字くらいは勉強しなくてもわかるだろうしな。
「樹、それが何かわかるか？」
「な、なんなんですか!?」
「見てわかるだろ？　借用書だよ。全部お前名義の判がおしてあるみたいだ」
奴隷商にでも後で聞いてみるとするか、この証書で金を貸した商人が何人いるかをな。
結構な枚数と金額だ。真っ赤だな。金額的な意味で。
ぶっちゃけ……樹じゃ返しきれないだろ。それはコロシアムでの収益を入れても、だ。
「そんな……僕は……マルドやみんな、マルティ王女達が人々を助けたいというから必死にお金を貯めていたのに……」
「えー……近隣の酒場で聞きこみをした結果、随分と派手に豪遊していたそうです。ハイ。闇ギルドのコロシアムの賭博でも使いこみがあったそうです」
最悪のタイミングで奴隷商がやってきて補足した。
その背後には何人もの商人がいる。
樹は絶望したように膝をついて蹲る。
「とんだ信頼だな。だから言ったんだ。ヴィッチなんて信じても碌なことはないってな」

とりあえず追い打ちをかけて……と、俺は奴隷商の方に目を向ける。
「この借金を作った当人共はどこへ行ったんだ？　逃げたならすぐに追いかけるべきだろ」
「ゼルトブルの地下水路に逃げ込んだものかと思われますです。ハイ。現在、ゼルトブルの商業組合が厳戒態勢を敷いて傭兵、冒険者に捕縛を命じております。ですが……」
見つかるかどうか怪しいと。
まあ事前に逃走の準備をしていただろうし、逃げ切られる可能性の方が高いよな。
俺は深々と溜息をついてから絶望している樹に近寄る。
ここで更なるカースに目覚められたら面倒だしな。
「イツキ様……どうかお立ちください。私は……イツキ様を信じております。正義とは、どんなに倒れても必ず立ち上がって成すことなのですよね？」
「リーシア……さん。僕は……」
リーシアが落ち込む樹に手を伸ばす。
「また一から立ち上がっていけばいいんですよ。お金は……私も手伝います。一緒にがんばって返していきましょう？」
「ですが……それだけでなく……僕は取り返しのつかない過ちを……」
「誰にだって間違いはあります。ですが、取り返せないことなんてありません。ここで諦めたらもっと沢山の人が不幸になってしまいます」
「沢山の……人……？」
「はい。私は異世界に行きました。そしてその世界と同盟を結んだんです。敵だった……悪だと思

っていた人達と和解もできました。覚えていませんか？　波から出てきた凄く強い扇子という武器を持った女性の方です」
リーシアは俺達と共に異世界を見てきた。
無限迷宮に閉じ込められていた絆と行動を共にしたし、何度も戦ったグラス達と和解したことも知っている。
「そんなことが……」
「ですが、許せない方とも戦いました」
「リーシアさんが許せない敵、ですか？」
「はい。今、ナオフミさんはそんな敵と戦う準備をしています。その戦いにはイツキ様の……世界の希望である勇者様の協力が必要なんです。今一度、立ち上がってもらえませんか？」
まあ、樹が弓の勇者なのは紛れもない事実だ。
錬にしても元康にしても、正しい強化さえできれば心強い味方になってくれる。
よし行け、そのままエクレールのように説得するんだ。
「う……うう……」
樹は嗚咽を漏らす。
最後のトドメとばかりに、樹の弓に残っていた禍々しいパーツが砕け散った。
それと同時に樹はばったりと倒れ伏した。
「イツキ様！」
俺は樹の脈を測る。

死んではいないようだ。代償とか支払っていなきゃいいが……。
奴隷商に遮られた商人共が挙って樹の処遇を話し合っている。
あーもう……ヴィッチの奴はどこまでも面倒な置き土産をしやがるな！
今度こそ殺してやる。
いや、樹に擦りつけた借金をその身で支払わせてやるか！
話によると樹の仲間も結託しているようだしな。
ラルクがいつかやらかすと言っていたが、とんでもない連中のようだ。
「わ、私が——」
倒れ伏す樹を庇うようにリーシアが前に出て、樹の借金を背負う覚悟を見せようとしている。
「奴隷商、樹の借金は俺の名義で立て替えておいてくれ」
行商で稼いだ金もあるし、イグドラシル薬剤なども集めて売れば……どうにかできる。
足りない分は後払いにしてもらうしかない。
さすがに高騰する奴隷達を購入した時ほどの金額ではないしな。
「ナオフミ様……」
ラフタリアのホッとしたような表情を見ながら、俺はヴィッチの捜索を指示した。
リーシアが泣きそうな顔で俺に深々と頭を下げる。
「リーシア、錬を教育するエクレールと同じく、樹を徹底的に教育するんだぞ？　二度と暴走することのないようにな」
「は、はい！」

「あらー……やっぱナオフミちゃんは素敵よね」
「さすが尚文様ですわ！　愚かな弓の勇者の責任を肩代わりするそのお姿……とても男らしいですわ」
愚かな、とか……。言葉は選べよ、アトラ。こんなでも一応勇者なんだぞ。
結局、ヴィッチと樹の仲間達の消息を掴むことはできなかった。
だが、こうして樹を捕縛することに成功した。
かなりの出費はあったが、これで樹も大人しくなってくれるだろう。
隠れ家に行く前に樹にはパーティーの勧誘をしておいたから、ポータルで村に連行することができた。
錬みたいになってくれるといいんだがな。

そうして翌日の昼頃。
ヴィッチの捜索に失敗して若干苛立っている時に、やっと樹が意識を取り戻した。
樹はキャンピングプラントの家で寝ていた。
そろそろ起きるかと思って顔を出したところでリーシアが声を掛ける。
「イツキ様！」
ベッドから起き上がって樹は辺りを見渡していた。
俺は心配そうに駆け寄るリーシアを腕を組んで見守りつつ、万が一樹が暴れ出してもいいように
フィーロやアトラ、錬を外に待機させておいた。

「樹。昨日のことは覚えているよな？　一応俺が全部肩代わりしてやったからちゃんと借金を返すんだぞ」

「……」

樹は無表情で、しかも眠そうな目をしながらゆっくりと俺に顔を向け、沈黙している。

「……」

しばらく沈黙が支配した。

リーシアも樹が何か言うのを待っていたが一向にその様子が見られない。

「おい。なんとか言えよ」

「……なんとか」

っ……!?

コイツ！　いきなり俺に喧嘩を売るとはいい度胸だ！

「悪いなリーシア。どうやらお前との約束は破らねばならないようだ」

全く反省のない奴にこれ以上生きる価値はない。

やっぱりゼルトブルの商人共に売り払うとしよう。

「ふぇええ！　待ってください。イツキ様、ほら、ここは素直に謝ってください」

「……ごめんなさい」

無表情で樹はペコリと素直に頭を下げる。

なんだ？　樹ってこんな奴だったか？

「樹、一体どうしたんだ？」

「……わかりません。昨日のことが……？　なんで悲しんでいたのでしょう？」
「えっと……樹、もしかしてお前、自分が何者かわからないとかってやつ？」
まさかあのジャスティスボウとかいうふざけた武器の代償が記憶喪失というわけじゃないだろうな。
今までの例から考えてそういう状態になっても不思議ではない。
だとすると、かなり面倒くさいことになるんだが。
「いいえ、僕は川澄樹で、弓の勇者です。正義を志しましたが、負けて、しかも騙されてしまいました」
「……記憶喪失じゃないんだよな？」
「わかりません」
なんでわからないんだよ。
「隠し事はするなよ。何を企んでいる？」
「僕は何かを企んでいるのでしょうか？」
「知るか！　それを聞いてるんだよ！　質問に質問を返すな」
なんだこれ？　樹の奴、覇気がまるでない。
廃人になった……とも違うんだよな。
……さっき、俺は『なんとか言え』と言った。
すると樹は『なんとか』と答えた……？
「樹、逆立ちしたまま服を脱げ」

「はい……」
樹は俺の言う通りに逆立ちをして、服を脱ぐために片手でボタンを外し始める。
「イツキ様！　おやめください」
リーシアの言葉に樹は逆立ちをやめて棒立ちになった。
ちょっと待てよ。言われたことをそのまま実行してるのか。
「樹、自害しろ」
「はい……」
樹は弓から縄……弓の弦ではなく、俺の盾同様、取り出せるタイプの道具の縄を取り出して、首を吊ろうと引っかける場所を探す。
「ふぇえええええ！　やめてくださいイツキ様ー！」
「はい……」
「樹、お前は何をしたい？」
「何をしたいのでしょうか？　わかりません」
……おい。まさか樹の奴。
というか隠し癖のある樹がこうもペラペラ話しているなんて不気味だ。
「樹、心当たりはないか？　呪われた武器のスキルを使うと色々と代償を支払わされることになる」
なんとなく樹の全身に、俺や錬に酷似した嫌な感じのものが纏わりついている気がする。
「ゼルトブルの闇のコロシアムで……窮地に陥った時に特殊なスキルを何回も使いました……」
うわ。呪いの武器から解放されたからドカッと代償が樹に振りかかったってやつじゃないか。

とんでもない状態だぞ。
「とりあえずリーシアが面倒を見てくれるからじっとしていろ」
「わかりました」
樹はそう言った後、リーシアを凝視して……また俺の方を見る。
「何かすることはないのですか？」
「何かしたいのか？」
「えっと、何かしようかな、それともジッとしていようかな、動くと……」
やはり決断力が低下しているようだ。
代償は意志の喪失とかに近いモノなんだろう。
まったく、どうしてこうも俺のところに来る勇者って呪いに汚染されているのかね。
元康はいないが、アイツも変になっていたしな。
「樹、お前はこれからどうするのか、もう一度考えろ。借金は払え」
「わかりました……借金を返すために働きます」
「イツキ様。私はイツキ様と一緒に罪を償うために戦いますからね」
リーシアが樹に向けて言うと、樹は素直に頷いた。
お前も働いて樹の借金の補填をしろ。
「よろしくお願いします。リーシア、さん」
それから樹は、頬に僅かに涙を流しながらリーシアの手を握る。
「イツキ様？」



「……あれ？　なぜでしょう？　リーシア、さん。今まで……すいませんでした……」
そう呟いたあと、感情を全て吐き出してしまったかのように樹は無表情に戻ってしまった。
「はい……はい……はい……イツキ様……」
リーシアが泣いていた。
まあ、もはやこれは樹の形をした別人みたいだもんな。
誰かに言われたことに素直に応じてしまうようだし。
はぁ……樹から事情を聞き出すのは簡単だが、問題は山積みだな。
どうしたものか。なんか最近悩みっぱなしな気がする。
とりあえず、樹には強化方法を叩きこんだ後、カルミラ島にある呪いによく効く温泉にでも療養に行ってもらうのが……よさそうだな。
こうして……四聖の勇者全員にやっと強化方法が行き渡ることになるのだった。

十四話　秘密基地

「さあ、ナオフミちゃん！　今夜こそお姉さんと楽しいことをしましょう！」
「誰がするか！」
樹が村に来てから数日後の夜、俺は龍脈法を習得するためにサディナにレクチャーしてもらうことになった。

奴隷共もある程度トラウマを克服したのか手が掛からなくなってきたし。
「そうですよ。サディナ姉さん！　ふざけるのはいい加減にしてください！」
ラフタリアもやっと手が空いたのか俺の家で寝るようになっている。
なので、アトラが来たら撃退するように頼んである。
「そうそう、私だけじゃナオフミちゃんに教えきれないと思ったから、お姉さん、ガエリオンちゃんにお願いしたわよ」
サディナが窓で手招きすると夜空からガエリオンがやってきて、子竜モードで窓から家に入ってくる。
「ふむ……汝は龍脈法を習得したいのだな？　既に加護は……掛かっておるな」
「しゃべ――」
ラフタリアがガエリオンが喋っているのを聞いて絶句している。
「我はガエリオン、剣の勇者に殺された最弱の竜帝なり。以後よろしく頼む」
最弱と名乗るのもどうなんだろうな？
「あの魔竜に乗っ取られていたウィンディアの親で、子竜のガエリオンの中に同居してるみたいだな。話す暇はなかったが」
「本来はすぐにでも挨拶をすべきだと思っていたのだがな。ウィンディアが離れずにいて大変であった」
「ガエリオンちゃんも龍脈法が使えるから、お姉さんと一緒に教えればすぐよ」
「そうだといいな」

自主練習をしてはいたのだが、上手くいかずにいたんだ。
錬や樹は……普通の魔法すらまだ自力で習得していないので、別枠で習得を急いでいるところだ。
というかサディナとガエリオンがいれば強力な援護魔法を連発可能なんじゃないのか？
……ま、俺も覚えておいた方がいいか。
「尚文様ー！　ハッ!?　お兄様！」
「アトラ！　今夜こそ行かせないぞ！　修行の成果を見せてやる！」
「ふふ、お兄様風情が私を止められると思っているのですか？」
「今夜こそ止めてみせる！」
なんか外からバシンバシンという音と騒がしい問答が聞こえてくる。チラッと覗いてみると馬鹿二人が乱闘しており、それを奴隷共が楽しそうに見物している。
さっさと寝ろよお前等は！
「……あんまり集中できそうにないな」
「そうですね。すぐにアトラさんが来るでしょうから、今夜もあんまり魔法の勉強はできそうにないですね」
「どこか良い環境があればいいんだがな。この際、ポータルで城辺りにでも移動するか？」
「それも手ですが……城辺りだとアトラさんは追いかけてくるかもしれませんよ？　ヒヨちゃんを使って」
誰だそれ？　と思ったが、おそらくフィーロの配下一号だろう。
なんか奴隷達が撫でながらそう呼んでいた気がする。

ゼルトブルで……とも考えたが、あっちはあっちで騒がしいし宿泊費や奴隷商との交渉などの問題がある。

と、考えたところで窓から楽しそうに騒ぎを見ていたサディナが言った。

「じゃあお姉さんの秘密基地に案内してあげようかしら？」

「秘密基地？」

「そうよー。村の近くに離れ小島があって、そこがお姉さんの秘密基地なのよ。あそこならアトラちゃんも追ってこられないんじゃないかしら？」

「ふむ……あのハクコの娘が修行の邪魔であるなら静かな所へ移動した方がいいであろうな」

「……わかった。とりあえずラフタリア、絶対に俺から離れるなよ。お前が唯一の頼りだ」

サディナとガエリオンと一緒では俺の身に何が起こるかわからん。

主にサディナがな。

実質二人きりにでもされようものなら何をしてくるやら。

「ナオフミ様、怯えすぎです」

「あらー？　ナオフミちゃんは私とラフタリアちゃんのどっちに怯えているのかしらねー？」

どっちだと？　そりゃあラフタリアに決まっているだろうが！

お前と絡んでるとラフタリアが怖いからな。

「お姉さんに乗って泳いでいく？　それともガエリオンちゃんにお願いするのがいいかしらね？」

「ガエリオンでいいだろ」

何かあったらガエリオンをサディナに嗾けれげ逃げる時間くらいは稼げるだろう。

こうして俺達はガエリオンに乗ってサディナの秘密基地である島に出発した。

「へー……ここがお前の秘密基地か」

ガエリオンの背に乗り、三〇分くらい経った頃だろうか。

島が見えてきた。暗くてよく見えないが、そこまで大きな島ではない。

海外の写真で見たことのある浅瀬の三日月形の島とかそんな感じだ。

魔物も特に見当たらない。

元康じゃないが、月が映えるロマンチックな島だと思う。

島に着くと、サディナは俺達を島の端にある洞穴へ案内し、松明に火をつけた。

きちんと窓っぽい吹き抜けまである。武骨な……海賊のアジトみたいな内装っていうのか？

石を組んで適当に作ったテーブルに、木を単純に横切りにして作った椅子。

奥にはまだ部屋がありそうだけど暗くてよく見えない。

「さあ、ゆっくりしてってね」

「前にお父さんとお母さんと一緒に来てましたよね？　まだ小さかった私は大人になったら連れていってもらえるとベッドの中でわくわくしてました」

なんとなく気持ちはわかるな。

俺も小さい頃、親戚に、キャンプに連れていってやる、なんて言われてわくわくした記憶がある……ちなみに、実際にキャンプに行った記憶はない。

「あら？　ラフタリアちゃんも知ってたのね」

「はい」

「ここまではさすがのアトラも来ないだろうな」

「まあねー」

海を泳いでくるとか船に乗ってとかで来そうな気もするが。

「というわけでナオフミちゃん。まずは龍脈法の練習をしましょうか」

「頼む」

「資質がないと覚えられるものじゃないんですよね？　できたら私も使えるようになりたいです」

「我が加護を掛ければできなくはないであろうな」

「じゃあラフタリアも教えてもらえ。一緒に学べるならやった方がいいだろ」

ラフタリアが使えるならやった方がお得だ。

そこでサディナがラフタリアを見つめて、呻く。

「うーん……ラフタリアちゃんは難しいかしらね」

「できないのか？」

「なに？」

ガエリオンがラフタリアに手をかざす。

「……なるほど、何か加護が掛かっている。今の我の力では解くことはできそうにない」

「そ、そうなんですか？」

「刀の眷属器の所為とか……か？」

絆の世界の眷属器を持っている障害か。厄介な問題だな。

そういや絆達の世界の連中の魔法ってどんなのか詳しく聞くのを忘れてた。
なんかもらい物の資料にそれっぽいのがあった気がするが解読が面倒なんだよな。
リーシアに任せてみるか。
とはいえ、リーシアもリーシアでもらった古文書の解読に難儀しているから、そこまで期待はできない。そもそもリーシアには樹の面倒を任せている。
「ふむ……汝等が所持する異界の竜帝から知識を読み取れば我も教えられなくもないが……」
「逆に飲みこまれるってオチが容易く想像できるな」
「規格違いの竜帝であるから消されることはないのが救いであるがな。もし同じ規格であったら、我は一巻の終わりであったぞ」
「ふーん……」
同じ竜帝とはいえ規格の違いとかあるわけか。
核石から何かを読み取ることはできるが、深いところは同じではないということだろう。
魔竜とやらは絆が召喚される理由になったくらいの存在だからな。
きっと絆達は、俺達がこの前戦った奴よりも強いのと戦ったんだろう。
ガエリオンが水差しの水を指差す。
「あそこにある水から力を引き出す練習を始めるぞ。手本を見せよう」
そう言うとガエリオンは水差しに手をかざした。
『我ここに水の力を導き、具現を望む。地脈よ我に力を』
「アクアシール！」

パアッと水差しから力がガエリオンに移って、魔法として具現化した。
確か水の魔法膜を作り出す魔法だったか。
使い道は火属性の魔法の効果を弱めるとかだな。火事場に行く時に便利そう。
「魔法書とかはないんだな」
「この魔法は汝等が使う自らの力を定められた方法で具現化させるものとはわけが違う。なにしろ他者から力を借りて放つのだからな」
テリスの魔法と基本的な仕組みは同じように見える。
前にテリスから聞いた話だと、宝石の力を借りて発動させるとか言っていた。
「ドラゴンは自らの力を導いて魔法と成すが人間は他から借りるだけにしろ」
「なんでだ？」
「何分、自分だからな。加減しないと自らの力を全て吐き出してしまうことになる。死ぬぞ？」
うわ……何か嫌なリスクが付いてるな。
「むしろ自らの資質から魔法を発現させるのなら汝等が唱える魔法で十分だ」
ふむ……確かにな。
自分の力から引き出す魔法、他者から借りて発動させる龍脈法と覚えておけばよさそうだ。
「ナオフミちゃんはわかってると思うけど龍脈法ができれば魔法妨害も簡単よ。相手の力を読みとって魔法発動の邪魔をするんだから」
ん？　ああ、だから龍脈法というのは妨害とかができるのか。
他者と調和して行う難しい儀式魔法や合唱魔法を、簡略化できる……ということなのだろう。

それから二時間ほどガエリオンとサディナに教わりながら龍脈法の練習をしていた。
「だから魔力を込めるな！　見るだけで水におかしな魔力が入ったのがわかるぞ」
「見えるのか？」
「水が震えているではないか。しかも変に光っているであろうが！」
う……テリスと魔法練習をした時も同じことを注意された。
やっぱ似た規格じゃねえか。
「す、すごく難しそうです」
うんうん悩む俺をラフタリアが心配そうに見学していた。
「ラフタリア、覚えているか？　絆の世界の方の魔法も似た感じだったぞ？　もしかしたらテリスが使っていた魔法はラフタリアでも使えるかもしれない」
「が、がんばって再現できるように努力します」
「ナオフミちゃん、魔法を使う時のように魔力を放出しちゃダメよー。逆に空っぽにする感じで、水から力をもらうイメージ」
「それが難しいんだよな」
感覚的なものだから、難しいことこの上ない。
えっと、魔力で引き寄せるんじゃなく、水から力をもらう……。
って、水はうんともすんとも反応しない。
『オラ！　力を寄越せ』と意識してみる。
「だから魔力を出すな！」

魔力の流れが見えるようになったお陰か、ガエリオンやサディナが唱える時の流れを見よう見まねでできるようになってきた。

なんとなくだけどコツが掴めてきた。

と、四苦八苦しながら更に二時間経過した頃。

ここにも天才がいる。俺は天才じゃなくて努力型なんだよ。

こんなの両方できるサディナはまごうことなき変態だ。

ウィンディアが龍脈法しかできない理由がわかったような気がするぞ。

ああもう！　めんどくせー！

要するに頼み込む感じだ。

同時に自分の魔力に空洞を作る。後はそっと、手を伸ばすように魔力を水に触れさせる。

魔力を伝って水の清浄な流れがスーッと俺に入ってくる。

「そうだ。それでいい。思ったよりも上達が早くて驚いた」

「そうねー」

で、後はオストやサディナと魔法を唱えた時と同じようにパズルが浮かび上がってくる。

ここから先は慣れだ。

『我ここに水の力を導き、具現を望む。地脈よ我に力を……』

「アクアシール！」

ターゲットアイコンが出現したので、自身を指名する。

バシッと魔法が発動したのを確認した。

「ふむ、随分と早く習得したな。さすがは勇者といったところか」
「そうねー。ナオフミちゃん天才ね」
「ふざけんな。自主勉強をどんだけしたと思ってんだ」
できるようになったらあっという間って話だが、どれだけ努力したと思ってんだ。
オストから資質を授かって、テリス辺りからレクチャーしてもらった後はずっとだぞ！
ずっとウンウン唸りながら練習していたんだ。
「後は反復練習だ。精進せよ」
「ああ、ここまできたら、それしかないだろうな」
自転車の乗り方と一緒だ。
乗れるだけでは意味がないからな。
それこそ地球でいうところのプロ級を目指すくらいでないと。
「さて、そろそろお開きにして寝るか」
「そうだな、我も時を忘れてしまった」
「というわけでナオフミちゃん、お酒飲みましょうよ」
サディナは奥から酒が入った樽を持ってきて、ドンと置いた。
「どこからそんなものを持ってきたんだ？」
「難破した船から引き揚げたのよー。程よい熟成具合の品物よ」
ああ、そう。というか犯罪臭がする品だな。
まあ、だからこんな所に保管しているんだろうが。

「難破船から引き揚げたと言ったな」
「ええ」
「そういう品を流用していいのか？　この国じゃ」
「問題ないわー、法の及ぶサルベージ範囲から外れているし」
「サルベージ範囲？」
「引き揚げた人が七割、国が三割って決まりがあるわねー、あってないような法律だけど。範囲はメルロマルク領海内だけど、これ所有国のない海で引き揚げたの」
ま、誰が引き揚げたかなんてわからないもんな。黙っていれば誤魔化せそう。
「最近は波も高いし、メルロマルク近隣は海の流れも急だし、狙い目ね」
災厄の波の所為で海の波も危険か。
そういや、カルミラ島へ行く時の船長も似たようなことを言っていたような気がする。
「暇があったら宝探しもしてあげましょうか？　もう少しＬｖが高くないと危険なんだけど」
「お前のＬｖも大分上がっているからなぁ……任せられるのなら頼みたいところだな」
つーかお前の早すぎるＬｖアップの謎を追いたい。
水中の魔物って経験値が多いんだろうか？
海の宝って金になりそうな匂いがする。ま、サルベージがサディナの副業なのはなんとなくわかった。ゼルトブルでの活動資金や賭け試合以外だとこうして稼いでいたんだろうな。
「さ、みんなでパアッと飲むわよ！」
そうサディナは宣言した。

「ふむ……酒か、悪くない」
ガエリオンが酒と聞いて身を乗り出す。
「ほら、ガエリオンちゃんはこっちね」
と、サディナは一升瓶を出してガエリオンに渡す。
えっと、日本酒？　そんな形状の瓶だ。
過去の勇者が作り方を教えたってところか。
「では頂こう」
ラッパ飲みでガエリオンが酒を飲み始めた。
「おお……これはなかなかの銘酒ではないか？」
「そうよー。私の生まれた地方では竜も喜ぶ強いお酒なんだから」
「ほう……」
ガエリオンがご機嫌になって酒を飲んでいる。
「ラフタリアちゃんも飲むー？　ラフタリアちゃんの両親はお酒強かったからラフタリアちゃんもきっと強いわよね」
「は、はい」
確かにラフタリアは酒に強かったな。ラルクが泥酔気味だったのにほろ酔い程度だったし。
「ささ、二人も遠慮しないで飲んで。ナオフミちゃんにはルコルの実があるわよ」
と、サディナは俺とラフタリアに酒を勧めてきた。
別に俺はルコルの実が好物というわけではないんだがな。

まあいいか。こういう席で説明するのも無粋ってもんだ。
と、海の地図を片手に酒を飲みながら打ち合わせをする。
サディナがその合間にラフタリアに話題をちょくちょく振っていく。
「ラフタリアちゃんはナオフミちゃんのことをどう思っているのかしら？」
「私はナオフミ様のことを尊敬しています」
そうだったのか。いつも俺のする蛮行に呆れているから、そういうのは無いと思っていた。
自分で言うのもアレだとは思うが、俺はやることが色々と酷いからな。
「それは本心？」
「はい」
「結婚したいとか思っているんじゃないの？」
「そ、それは……」
え？　ラフタリアって俺のことを結婚したいとか、異性として見ている？
そりゃあ、俺のことを好きとか言われたら嫌な気はしないけど、もっと優先すべきことがあると思っているはずだ。
現に今、波の被害で自分と同じような境遇の不幸な子供を出さないように努力しているんだし。
「私は……その……えっと……」
ぐらぐらと目を回すようにして、ラフタリアは顔を赤くしている。
ラフタリアの実年齢はまだ低いんだ。本当はお酒を飲ませるのもいけないことだろうし、恋愛とか考える歳じゃない。

俺のことも、亡くなった両親の代わりとしてしか見ていなくて、異性としてどう思っているのかと言われて頭に血が上ってしまっているのだろう。

「なおひゅみ様をわひゃひは……」

ラフタリアの呂律がおかしい。飲んでも大丈夫な方じゃなかったのか？

「あら、ラフタリアちゃん？」

「わひゃひは」

バタンとラフタリアはテーブルに突っ伏してしまった。

「うぬ……我も……少し……」

ガエリオンもふらふらと首を振り、仰向けに寝転ぶ。

うーむ……酒に強いラフタリアを酔い潰して平然としているサディナと俺……なんか悲しくなってきた。

飲み会をする時に感じる疎外感が俺を襲ってくる。だから俺は酒があんまり好きじゃないんだ。みんな俺を置いて幸せそうに……酔い潰れる。

俺は、酒で酔うというのがよくわからない。乗り物酔いもしたことがないし、酔うというのはせいぜい何かに陶酔、ってわけじゃないけど遊んでいる時くらいだっただろうか。

勝利の美酒に酔うって意味では酔ったことは……あるが、それとは違うんだろうな。

誰だったか、ウワバミの化け物と俺を呼んだな。

化け物……か。

「あらあら、さすがは『竜殺し』と銘酒『狸』ねー……ちょっとラフタリアちゃんとガエリオンち

やんには強かったかしら」
なに!? サディナの奴、なんて言いやがった!?
「お前……謀ったな」
やばいぞ。どうやらサディナの奴、ラフタリアとガエリオンに効く酒を用意していたな。
このままじゃサディナが襲ってくるかもしれない。
最悪シールドプリズンを張ってポータルで逃げるか？
「というわけで飲むのを続行しましょう」
「いやだ。俺は帰る」
「まあまあ、ナオフミちゃんが帰ったらラフタリアちゃんとガエリオンちゃんをどうするのよ」
「ポータルで巻きこむ」
「そうでしょうねー。でもお姉さんとお話ししてからにしましょう」
「話？ 俺と肉欲の宴とかするつもりなんだろ？」
「違う違う」
サディナは陽気な様子で器の中の酒を飲み干す。
次の瞬間だった。
「ナオフミちゃんはラフタリアちゃんを本当はどうする気なのかしら？」
ふざけた様子をかなぐり捨てて、サディナは人型になって真剣な目で、俺に問いただしてきた。
「ラフタリアとガエリオンを酔い潰して、言いたいことはそれだったのか？」
サディナにとってラフタリアはどんな存在なんだ？

よく知らないけれど、どうもその辺りは触れてはいけないラインなのか、サディナもうやむやに誤魔化すんだよな。

少し前のことだ。

村作りと町の復興をしている最中、俺の右腕をしているのがラクーン種の亜人だと嗅ぎつけて、亜人の勢力……ラクーン種の連中がやってきたことがあった。

「盾の勇者様の右腕がラクーン種であるのなら、私達は家族も同然。ぜひ盾の勇者様の復興に力を貸したいと思って馳せ参じました」

俺はその時のラクーン種たちとラフタリアとの違いに驚いた。

恰幅がいいというか……一言で言うなら田舎くさいぽっちゃり系な連中というのが第一印象だ。

あんまりやる気がなさそうだ。盾の勇者の傘下にいれば楽ができる、なんて態度だったので断りたいと思った。

だが、ラクーン種ということで俺は断るに断りきれず、向こうも一目会えばどこの子なのか血縁関係を説明するからとしつこく迫ってきた。

いい加減、出ていけとでも言うか、と考えていた。

そんな所でサディナが普段は出さない殺気を放ちながらそいつらに銛を向けた。

「申し訳ないけど、ナオフミちゃんの右腕をしている子と貴方達とは赤の他人くらいには離れているから、血縁を理由に取り入るのは……やめてねー？」

その殺気を受けてラクーン種の連中は腰を抜かしていた。

「まあ、どうしても協力をしたいのなら町の方で復興作業を手伝ってくれ。仲間にするかどうかは後で判断する」

と、俺が締めてからラクーン種の連中には町の復興をやらせたわけだけど……その後は……。

思い出したぞ。確か配属三日目辺りでほとんどが夜逃げしたんだったか？

それ以外にもサディナは気になるような動きをする時があるんだよな。

村の中で誰もいない所を睨んでいたり、若干警戒しているような目つきをする時がある。

まるで誰かがそこに潜んでいるかのように。

ただ、隠蔽魔法の類はラフタリアが見抜けるはずだし、何も言わないからには気の所為である可能性が高いが。

「なあ、お前とラフタリアってどういう関係なんだ？」

なんていうか……ゼルトブルでこの村の奴隷を買い集めていた本当の目的はラフタリアの発見だったんだろう、くらいは俺にも推測できる。

もちろん、村の連中への対応から考えるに奴隷達の保護も半分は目的だったんだろうけどな。

「ナオフミちゃん。ラフタリアちゃんやそのご両親はね、私にとって生きる意味だったのよ」

「生きる意味って……」

どういう関係なんだよ？　ますますわからないじゃないか。

騎士道とか武士道とか、そういう文化が俺の世界にも昔はあったらしいが、それに近いようなことか？

「世界で起こった最初の波の時、私はラフタリアちゃんの両親を守り切れなかった。いいえ、波が起こった時、遠くにいて駆けつけられなかったわ。気を抜いていたのでしょうね」
サディナは後悔にも似た呟きを漏らしながら酒を飲む。
その様子は……間違っても、冗談を言っているようには見えない。
酔い潰れたラフタリアを簡素なベッドに寝かしつけて、サディナは話を続ける。
本気の話なら、二人きりでも別に邪険にする理由はない。
「……だけど波が起こってから数日後、やっとのことで帰ってきたら、村には誰もいなかった」
サディナは話を続ける。
「必死に捜したわ。きっと生きていると信じてね。でも亜人の私じゃこの国の暗部には近寄れなかった。だから奴隷を専門に扱うゼルトブルで戦闘奴隷となって捜したのよ。あそこは大きなコネクションがあるからお金を積めばどうにかできると思ってね」
「随分と遠回りだったな」
実際のところ、ラフタリアは捨て値同然で売られていた奴隷だ。
サディナが必死に捜したという割には、おかしな場所にいる。
「見た目ラクーン種の奴隷でラフタリアという名前だけじゃ時間が掛かりすぎたのよ。村の子を何人か見つけることはできたけどね」
「そういえば村の奴隷を守っていたんだったな」
「ええ。そして、ラフタリアちゃんと再会した時は驚いたわ。ナオフミちゃんと一緒にいて戦っているんだもの」

「波乱万丈だな。ラフタリアの人生は」

できれば世界が平和になった後、ラフタリアには穏やかに生きていってほしいと思う。

俺を信じてくれた子だからこそ、幸せになってほしい。

その気持ちは今も変わらない。

この世界なんて滅んでしまえと思うが、ラフタリアが生きる世界なら平和にするために尽力してもいいと思っている。

「見た目ラクーン種ってことはラフタリアは違うのか？」

「私がルカ種と間違われるようにラクーン種とは近いけど違う種よ」

「ほう……ま、何の種族だろうとラフタリアはラフタリアだけどな」

近いけど似た種類の動物は多い。固有種と外来種、みたいな。

「……そこがナオフミちゃんの良いところよね。ねえナオフミちゃん……ラフタリアちゃんを最後まで面倒を見るつもりがないなら……お姉さんで我慢してくれないかしら？」

「はぁ？」

「ラフタリアちゃんと関係を持つのなら相応の覚悟を持ってとお願いしてるの。覚悟がなくて、それでも我慢ができないならお姉さんで発散してとお願いしてるのよ」

何を言い出すかと思えば……。

「お前は俺が鬼畜か何かだと思ってんのか？」

ま、そういう自覚はあるけどさ。だが、女関係は死んでもいやだ。

そりゃあ、ラフタリアのことは信頼している。

好きか嫌いかと言われたら好きだ。
これは断言できる。本人に言えと言われても頷ける程度には。
だけど恋愛感情なのかと問われると……わからない。
俺にとってラフタリアは頼りになる相棒であり、苦楽を共にした仲間である、と同時に娘のような存在だと思っている。
そういう意味では元康のいう、お義父さんのつもりだ。
ラフタリアは世界が平和になるまで使命優先で色恋に興味はないだろう。一方、俺には親心がある……って、サディナのペースに飲まれたら負けだ。
サディナのいう最後までというのはおそらく、波が終わるまでではなく、ラフタリアが死ぬまでという意味だろう。
マンガやゲームでは異世界に永住する主人公も珍しくはないからな。
だが……俺はその意味では責任は取れないと思う。
世界が平和になった時、俺は元の世界に帰るつもりだ。
おそらくサディナは俺がラフタリアに手を出すことを懸念し、俺の人格を理解した上で茶々を入れていたんだと思う。
嫌がらせにも見えるアタックを繰り返せば、俺がラフタリアに何もしないと踏んでいるのだろう。
サディナは普段ふざけているが、なんだかんだで冷静に人の行動を観察して誘導する術を持っている。敵に回すと厄介なタイプだ。
ふざけた調子で言っているが、目が笑っていない。

「そこまで入れ込むのには何か理由があるんだろ？」
ラフタリアとどうこうなる気はないが、サディナの考えを把握しておきたい。
「あらら、じゃあ少しだけよ」
ラフタリアの髪を軽く撫でながらサディナは語り始めた。
「なんとなくわかるかもしれないけど、ラフタリアちゃんのお父さんは由緒正しい血筋で、私はその血筋に仕える巫女だったのよ」
「へー……シルトヴェルトとかシルドフリーデンか？」
「はずれ。詳しい場所までは話せないわ。これでも大サービスなんだからね」
亜人の国ではないのか。というかサディナってどんな役職だ？
「ラフタリアちゃんのお父さんは家を継ぐのが嫌で、お母さんと一緒に駆け落ちしたの。私はそれに同伴して国を出たのよ」
ふーん。なんか身勝手とも言えるような言えないような両親だったんだな。
亜人差別の激しいメルロマルクに来たのは何か意味でもあったのか？
「色々なものを失ったけど、それ以上に得たものも多いから不満はないわ」
「ラフタリアの父親の血筋と勇者はどっちが上だ？」
「あの地域じゃラフタリアちゃんのお父さんの方が偉かったわね」
「四聖勇者より？」
「勇者の伝承はないわねー、来訪の記述はあるけど。ただ……勇者とは呼ばれなかっただけだと私は思うわ」

どういう地域だよ。しかし、勇者とは呼ばれなかった？

聖武器の所持者とか……か？

でも、なんとなくラフタリアがどんな家の出なのかわかってきた気がする。

とある国で神の子とかって信仰されている血族の末裔ってやつなのだろう。

これまである様々な材料から推理してみよう。

ラフタリアが自身で編み出した必殺技の名前や雰囲気、そしてサディナの人間形態の容姿……。

どっちも和風なんだよな。

そこで和風というキーワードから武器屋の親父が前に言っていた東方の地が浮かんでくる。

「ラフタリアの父親が生まれた国……鎖国をしてないか？」

日本も昔は鎖国をしていた。

特別というわけではないが、その影響で他とは別の発達をした国というのは日本人なら理解できるだろう。

他に……霊亀が封印されていた地が鎖国していた、と聞いたな。

意外に鎖国している国は多いのかもしれない。

「わーナオフミちゃん凄いわね。そうよ。ずーっと昔からね。私達の国以外にもそういう国は沢山あるけど、そういった国々の中でも特に排他的な国よ」

「その国を懸念しているのか」

東の地で鎖国。

日本みたいな国があって、ラフタリアはそこの由緒正しい血を引いているわけだ。

下手にばれると追っ手が連れ戻しに来るとかそんな感じだろうか？

「半分は正解だけど、それくらいなら大丈夫。私が心配しているのはラフタリアちゃん自身の幸せかしらね」

「うう……」

呻くラフタリアの額に水で冷やした布を載せるサディナ。

「もうすぐ目覚めるわね。他に聞きたいことは？」

「なんでラフタリアに話さない？」

「ラフタリアちゃんのお父さんの方針」

これでラフタリアのお家騒動に巻き込まれるとか御免だけどな。

そういうのは世界が平和になってからにしろっての。

三勇教や貴族もそうだったけどさ。利権問題は本当に面倒臭いな。

「大丈夫なのか？」

「たぶんねー。あっちも余計なことをしない限りは来ないでしょ。ラフタリアちゃんがナオフミちゃんと関係を持つとかね」

「……お家騒動とか？」

サディナは黙って頷く。

ああ、やっぱりそこへ行きつくのか。

仮に俺がラフタリアに手を出して子供を作ったとする。

するとその血縁が、他国の神である俺との子供を宿したラフタリアがお家を狙っているのではな

いか、と余計な茶々を入れてくるかもしれない。
その可能性をサディナは警戒しているのだ。
「どうしてもラフタリアちゃんと子供が欲しいのなら、その一国を滅ぼして後顧の憂いを断ってからにしてね。お姉さんとの約束よ」
「過敏になりすぎなんじゃないか？」
あっちが全貌を理解しているとは考えられない。
もちろん、警戒するに越したことはないが。
「そうなんだけどねー。巫女や独自の能力を行使する連中を侮っちゃダメよ。私みたいのがごろごろいて、ラフタリアちゃんの命を狙ってくるかもしれないわ」
「……」
サディナクラスの連中が大量にいる国って……そいつらに世界を救ってもらえよと言いたくなる。
とはいえラフタリアはものすごく強いんだから、簡単に殺されることはないと思う。
だからといって、無責任なことはしないけどさ。
「実際のところはね。ナオフミちゃんの決意かしらね。女の子を泣かせるようなことをお姉さんはしてほしくないだけよ。お姉さんは女の子じゃなくて大人の女だからいいけど」
「いろんな理由を重ねてそれか」
「やーんお姉さん困っちゃう」
もちろん、家柄とかの問題もあるのだろうが、サディナは俺自身の気持ちを尋ねたかったのだ。
それは伝わった。

「うう……ナオフミ様？」
意識を取り戻したラフタリアが起き上がった。
「大丈夫か？」
「あ、はい。不思議とスッキリしてます」
色々と負担を掛けているからな。なんだかんだでストレスもあるかもしれない。
そういう意味では酒で発散するのも悪くない。
「それはよかったわねー」
「私が酔い潰れてしまった間に何かありましたか？」
「……いいや」
サディナはこの事実を話してほしくないのだろう。
余計な波風を立てる理由もないし、俺は何も聞かなかったことにする。
「そうだな。ラフタリアは娘みたいなものだと話してただけだ」
「はい!?」
声を裏返して驚くラフタリアと適度に問答をして誤魔化す。
ラフタリアを好きになるなら覚悟を示せ、ね……厄介な問題だな。
この世界に永住はしない。
少なくとも俺は、そう思っている。
「さてと……じゃあ酒盛りもこれくらいにして帰って寝るか」
「あらー」

「そうですよサディナ姉さん。飲みすぎです」
「む……寝てしまっていたか」
そこでガエリオンが目を覚ます。
「もう一杯」
「あらー、ガエリオンちゃんもやるわね。お姉さんと飲み比べしない？」
「悪くはない」
飲み友か？
翌日、ガエリオンは二日酔いになっていたな。
酒は程々にと注意するしかないな。

十五話　色即是空

なんて話をした翌々日のこと……朝食を終えて鍛錬をしていると、ガタガタと……本当に珍しい来訪客が俺の村へとやってきた。
「ん？　おお！」
武器屋の親父が馬車に乗ってやってきたのだ。
鉱石とかを運搬している馬車に相乗りしてる感じだった。
「よ！　アンちゃんの開拓してる村ってのを見に来たぜ」

武器屋の親父は村の様子に目を移す。

「ずいぶんと個性的な感じに開拓が進んでるみてぇだな」

バイオプラントの畑やキャンピングプラント、更に魔物舎辺りを見たあとでそう言われる。

「まったく言い返せませんね」

若干棘のある言い方でラフタリアは同意した。

「それが尚文様なのですわ！　ラフタリアさんもいい加減、認めるべきだと思いますわ」

「それもどうなんだろうな。しかしなんでお前はそんなに喧嘩腰なんだ？」

武器屋の親父にも言われるところを見ると俺の開拓は確かに変なんだろうなぁ。

まあ、バイオプラントの畑とかキャンピングプラントとか、おかしなところは多々あるしな。

特にキャンピングプラントが珍品であるのは否定できない。

どう考えてもメルロマルクの町や村から浮いている。

結構やらかしてる自覚はあったが改めて武器屋の親父に言われるときついな。

「鉱石採取のついでに寄ったってところか？」

「まあそれもあるが他に用事もあるぜ」

そう言いながら武器屋の親父は馬車に乗せた袋の中から一着の服を取り出して、ラフタリアに手渡した。

俺はそれがなんであるかを理解して、自分でも目が輝いているのを自覚しながら凝視する。

「なんでそんなに目を光らせているんですか！」

服を渡されたラフタリアの方は呆れ気味だ。

「おお……」

俺はラフタリアに持たせた……巫女服を確認する。

白虎の巫女服・俗
防御力アップ　衝撃耐性（小）　斬撃耐性（小）　四聖獣の力　魔力防御加工

俗？

なんだろうか？　というか前は目利きで見ることができなかったぞ？

「あ、ちょっと能力値が低めみたいですね」

「そうなのか？」

「はい」

「わりぃな。それが精一杯だったぜ」

「問題ない。むしろいい仕事をしてくれたと思っている」

「もっと普通の鎧で十分だと私は思いますよ？」

どうやら親父は俺の頼みを聞いて色々と試行錯誤をしてくれていたらしい。

まあ、この世界は絆達の世界みたいに布の防御効果を引き上げる研究とかがあんまり盛んではないからな。

ある程度技術流入で再現……できたってことか。

「アンちゃんのところで裁縫道具を使ってる奴がいるだろ？　アイツも手伝ってくれたから進んだ

みたいだぜ」

セインか？　武器屋の親父には会わせた覚えはないが……。

とは思ったが、セインは俺を監視しているんだったな。

そしてアイツは裁縫道具の眷属器を持っている。

異世界の技術とかを親父の知り合いに教えてくれたというところか。

「了解。じゃあラフタリアは今日からそれを着るように」

「その情熱はどこから来るんですか……」

俺はニヤッと笑みを浮かべる。

「似合うからだ。村の連中にも見せれば納得するだろう」

「聞きたくありませんでした。ああもう……今着てる鎧と性能が同格ですから別にいいですけど」

「研究を進めるのに援助は惜しまないぞ？　他に何が必要なんだ？」

俺は武器屋の親父に巫女服の開発の提案をする。

「ナオフミ様？　聞いているんですか？」

巫女服を持ったままラフタリアが抗議してきた。

「聞いている。とりあえず巫女服を着て村の連中に見せてみろ」

「そんな力の限り言われましても……」

「尚文様に服を買ってもらって羨ましいですわ！」

アトラがなにやらゆらっと嫉妬のオーラっぽいものを立ち昇らせる。

「いらないなら私がもらいますわ」

「サイズが合わないじゃないですか！」
「それでも私が着て尚文様の愛を勝ち取ってみせますわ」
「何を言ってんだお前は」
アトラの熱意に若干呆れるぞ。
「く……わかりましたよ。着ればいいんですね」
ラフタリアも諦めたように着替えに行く。
それから少ししてラフタリアは巫女服を着用して戻ってきた。
「ほお……」
親父も村の連中も揃ってラフタリアを凝視している。
ラフタリアは何か恥ずかしそうに刀の鞘を両手で持って俯いてるぞ。
「こりゃあすげえな。アンちゃんの言ったことも納得できる」
「ラフタリアちゃんすっげー！　なんか普段よりも更にカッコいい感じがすっぞ！」
キールがラフタリアを見て意見を述べる。
そうだろうそうだろう。やはりラフタリアには巫女服が一番だ！
「カッコいいって……」
「いや、可愛いでしょ。すごーい……」
みんながみんな唖然としてラフタリアを見るもんだからラフタリアの顔がドンドン赤くなっていく。
恥ずかしいのか？　絆の世界じゃ当たり前のように着てたじゃないか。

「いやぁ……目の保養にはいいな」

可愛い娘の初姿ってわけじゃないが、ラフタリアには不思議なほど巫女服が似合う。絆の世界で着物や袴を着た姿も見たことがあるが、やはり巫女服が一番だ。

不思議なくらい……まるでパズルのピースが合うように巫女服が合っている。

こう、普段着ている西洋の皮鎧だと違和感があるくらいにな。

「というわけでラフタリアは巫女服着用でいくぞ」

「どうしてそこまでこだわるのか理解できませんが、わかりました」

若干溜息交じりにラフタリアは応じてくれる。

「で？　親父はこの後どうするんだ？　ルーモ種の連中に手伝いを頼みに来たなら応じるぞ」

「そうだな。じゃあアンちゃんの言葉に甘えさせてもらうとするか」

なんて感じにラフタリアに巫女服を着せて俺達はその日の業務と修行を再開した。

更にエクレールが領主としての業務に音を上げて俺にヘルプを要請してきたので、隣町へ手伝いに行った。

今晩は親父が村で一泊することになり、ついでに村の奴隷達に使わせている鎧の整備をしてくれるという話だ。何から何まで気前のいい親父に感謝の言葉しか出てこない。

日が沈み……晩飯の時間になりかかった頃。

「ナオフミちゃーん。ただいまー」

サディナが村へと戻ってきた。

近海でのサルベージと食料用に魚を取らせている。

今日は大量だったのか籠に魚をたっぷり入れて背負っている。
「お魚を取ってきたわよ。今日は豪勢に行くわよ！」
「あああはいはい。とりあえず焼き魚で――」
なんて感じにサディナが取ってきた魚の調理方法を思案しながら話していると。
「あ、サディナお姉さんお帰り――」
なさいと言う前にサディナがドサッと魚を入れた籠を落とす。
「おい。落とすなよ」
俺の注意も聞かず、サディナはヨロヨロとラフタリアに近づいて、手を伸ばして服を脱がせようとする。
「わ、なんですかサディナ姉さん！」
「なにやってんだ飲んだくれ！」
「ナオフミちゃん！　早くラフタリアちゃんに着せている服を脱がせるのよ！」
「だからふざけんな！　なんで脱がせなきゃならないんだよ！」
せっかく作った巫女服をなぜ脱がせなければならない。
ラフタリアとサディナが揉み合いになって奴隷達が騒ぎ始める。
「な、尚文、大丈夫なのか？　止めた方がいいか？」
錬が恐る恐るといった様子で俺に尋ねてくる。
「そうだな。とりあえずみんなの前でラフタリアの服を脱がせようとするなんてふざけた奴は仕留めないとな」

なんて怒り始めたところで、俺はサディナの表情がずいぶんと緊迫したものであることに気付いた。

「おい。なにをそんなに焦ってんだ。事情を説明しろ」

「ナオフミちゃん。お姉さん言ったわよね？　覚悟してって」

ん？　そういや一昨日の夜にサディナがラフタリアと結婚するなら覚悟しろとか言ってたよな。お家騒動的なものに巻きこまれかねないって。

「それがどうかしたのか？」

「関わりがあるから早くこの服を脱がせなきゃダメよ！」

「な、なんの話ですか！」

まあ、ラフタリアはその時酔い潰れて寝ていたしなぁ。

知らないのも無理はない。

が、ラフタリアが巫女服を着ることと何の関係があるんだ？

「わかったわかった。ラフタリア、着替えてこい。じゃないと酔いどれ女が脱がそうとしてくるみたいだしな」

「わ、わかりました」

ということでラフタリアは着替えに行った。

で、やっと大人しくなったサディナはラフタリアが着替えに行った家を凝視してる。

「一体どうしたんだ？」

「あのねナオフミちゃん。ラフタリアちゃんにあの服を着せることがどういう意味かわかってる

の？」

「知らん。あれは異世界から持ってきた優秀な装備を改修したものでしかない」

そんな地雷的な何かがあるなんて全く聞いちゃいないぞ！

サディナは半ば呆れるように額に手を当てて珍しく苛立ちを見せる。

「ナオフミちゃん。じゃあ説明するわ。ラフタリアちゃんに、あの服……を着せるっていうのはね、この前話したことよりももっと重い意味となる、あの国にとって王位継承の――」

ハッとなってサディナが駆けだす。

その数秒後、いきなりラフタリアが着替えに行った家に火柱があがる。

「な、何!?」

「遅かった!?」

サディナが速攻で獣人形態に変身して素早く魔法の詠唱に入る。

「ラフタリア！」

ガラガラと崩れおちる家から、所々に煤を付けた巫女服を脱ぎかけのラフタリアが飛び出して刀を振りかざす。

なにやら金属音が響いてきて……。

ラフラリア目掛けて何か飛んできている!?

目を凝らすとクナイのような……鉄串のような何かだ。

更にどこからともなく現れた集団がラフタリアに斬りつけてくる。

「く……」

斬撃を受け流したラフタリアが反撃するが、紙一重で避けられてしまう。
「……覚悟！」
幸いなのは僅かにラフタリアの方が能力的に上なので、攻撃をかわすことはできているということか。
相手の武器はなんだ？
……小太刀か？
ラフタリアの刀を受け止めて鍔迫り合いに持ち込んだ直後、背後に現れた別の相手が隙ありとばかりに斬りつける。
が、ラフタリアは素早くもう一つの刀を抜いて受け止める。
ラフタリアには二刀流というスキルがあるからな。
「剛刀・霞十字！」
強引にスキルを発動させて斬り捨てようとしたのだが、ラフタリアの刀は今一歩届かずに火花を散らせるだけだった。
相手はかなりの実力者だ。
「は！」
「させません！」
ラフタリアが幻覚魔法で相手の目を騙して攻撃をかわす。
いる場所を僅かにずらしただけなので結構危なく見えた。
俺達が近寄る僅かな時間でこれだけの猛攻ができるってどれだけの熟練者なんだよ。

ラフタリアは眷属器の所持者なんだぞ？
いくら呪いで能力が低下していても、この世界の上限であるＬｖ１００の連中に劣るはずはない。
それくらいの強さは持っているはずだ。
「エアストシールド！　セカンドシールド！　流星盾！」
急いで防戦一方のラフタリアを守るように俺が前に立つ。
「ドライファ・サンダーボルト！」
サディナの魔法が完成して辺りに降り注ぐと、隠れていたと思しい敵が姿を現す。
な、なんだ？　サディナみたいなシャチ獣人やウサギ獣人……か？
それぞれ忍者みたいな服装で俺とラフタリア、そしてサディナを取り囲んでいる。
「一体何者だ？」
亜人獣人がラフタリアを攻撃した？
亜人の国であるシルトヴェルトやシルドフリーデンの連中……にしては俺を相手にしても敵意が相当あるように見える。
「敵か!?」
「うわ！　家が燃えてる！　兄ちゃん達と一緒に復興させた家が！」
「キュア!?」
錬やキール、そして村の奴隷、更には魔物達が騒ぎ始める。
「ふぇええ！　イツキ様！　応戦しましょう」
「わかりました」

もちろんリーシアや樹も出てくる。
「なんだなんだ!?」
「一体何が起こったのでしょうか?」
フォウルやアトラだって突然の事態に驚いてんぞ。
これだけの人数がいる中でも敵は撤退する気配がない。
敵は敵でそれぞれ、無言で視線を向け合う。
「天命の継承を放棄した者の娘よ……その宣告、我が国はしかと見届けた! こちらも全力をもってお前の天命継承を阻止する! 覚悟せよ!」
「なに!?」
何を言っているんだ? 俺はラフタリアに視線を移す。
「何のことを言っているんですか? 私には身に覚えがありません!」
「ナオフミちゃん、ラフタリアちゃん、もう手遅れよ。この子達、聞く耳は持ってないわ」
そこでサディナは目を細めて殺気を放ち、突如現れた忍者風の敵の集団に銛を向ける。
……なんだろうか? 敵の中にサディナとよく似た姿のシャチ獣人が結構混じっている。
そしてこの前の話……。
俺の脳裏を嫌な予感が過る。
「どういうことだ?」
「あのねナオフミちゃん。ラフタリアちゃんに着せてた服、巫女服って呼んでるみたいだけど、一番の原因はそれ。わかるわよね?」

まあ、サディナの反応を見ればわからなくもない。
一体どういう経緯で襲撃されたのかわからないが、サディナの話から推測するにラフタリアの出生とかに関わり合いがあるのだろう。
「ラフタリアちゃんにとって別の意味になる服なのよ」
「それくらいは察せる。ちゃんと理由を説明しろ」
「精霊具の所持者か……監査武器の抜刀許可！　元・水竜の巫女はお前等が処理せよ！」
「「は！」」
チャキッと各々……なんだ？　青白い炎のようなエネルギーを纏った武器を、敵がそれぞれ取り出して構える。
「訳を聞いている余裕はないな。とりあえず撃退するぞ」
サディナと同種っぽいシャチの連中がサディナが動くよりも先に思い切り……棒で突き飛ばす。
ずいぶんと強力な突きだったのかサディナは大きく弾き飛ばされて崖の方へ……更に捨て身の特攻とばかりに組み突かれて海へと落ちていった。
「サディナ姉さん！」
ラフタリアの叫びに応じるかのように敵が武器を振りかぶる。
「……はぁ！」
……大槌を振りかぶった先頭の攻撃を俺は受け止める。
速度はかなり速い。本気の……ゼルトブルで戦ったサディナとほぼ変わらない速度だ。
警戒すべきは防御比例攻撃。もしくは防御無効攻撃だが、相手が所持しているか不明。

そう思って流星盾で受け止めようとしたが、バキンと、まるで飴細工を蹴破るかのようにいとも容易く破壊された。

ウソだろ？　いくらなんでも俺の流星盾がこんな簡単に破壊された……？

魔竜や勇者共ならまだわかるが、見たところただの異世界人だ。

しかも壊れ方が今までと少し違っていた気がする。

なんというか……流星盾の結界を無効化するかのように、あっさりと破壊されたのだ。

「く！」

敵の横薙ぎを盾の部分で受け止める。それだけでガツンと衝撃が腕を伝ってくる。

ダメージは無い。比例攻撃ではないし防御無視でもない。

にもかかわらず俺の流星盾を容易く突破した？

しかも現在装備している魔竜の盾の反撃効果が発動しない。

同様に最近付けたアクセサリーでの反射もだ。まったく効果が作動しない。

「ナオフミ様！」

俺の背後にいるラフタリアに他の敵が襲いかかる。

くそ！

「ドリットシールド！」

ラフタリアを守るように三枚目の盾を出現させる。

「無駄だ」

ラフタリアに襲いかかろうとしている敵は……ソードブレイカータイプの短剣を使っている。

出現させた盾がやはり容易くスパッと切り裂かれる。
龍脈法(りゅうみゃくほう)を習得して、更になんとなくだけど魔法に対して感覚が鋭敏になっている俺は、魔法による能力低下の類(たぐい)を察知できるくらいにはなってきている。
念のためにさっと自身の能力を見る。
……低下系の魔法を受けている様子はない。
つまり、単純な威力で俺の防御を突破した……のか？
だが能力では俺達が勝っている。
「兄ちゃんを守るんだ！」
「待て、お前等！　気を付けろ」
俺の制止を振り切ってキール達がなだれ込んでくる。
このままじゃ村の連中に死人が!?
とは思ったが上手(うま)く連携して立ち回っているのか、キールを含めて相手に大きな隙は見せていない。ならば、せめて少しでも被害を減らすべくツヴァイト・オーラを唱える。
相当の熟練者がいるようだが、人員ではこちらの方が上……だったようで敵も攻めあぐねているようだ。
だが、問題はそこじゃない。
鍔迫り合いをしているキール達の武器が切られていないという点だ。
「尚文！　く……」
近寄ろうとする錬やリーシアを遮るように敵が立ちはだかる。

「錬！　樹でもいい！　援護を頼む！」
「わかりました！」
「尚文、耐えてくれよ！」
錬と樹が各々スキルを放つ。
「ハンドレッドソード！」
「アローレイン！」
それに合わせて俺は相手を突き飛ばし、盾を上に掲げる。
「流星盾！」
結界を生成して錬と樹の援護射撃からラフタリアとサディナを守るように身を固める。
「く……」
俺達を囲っていた敵は、呻きながら各々の武器で錬と樹のスキルを叩き落としていく。
一体どんな武器なんだアレは！　というか何者だよ！　コイツ等は！
「お前等、なんのつもりだ！」
錬が怒鳴り散らしながら敵に向かって斬りつけるが、やはり決定打になりえていない。
いや……ステータスの面で言えば若干圧している。
だが、相手がくさりかたびらか何かを着けているのか、剣で斬りつけても相手の防御を突破できない感じだ。
「なんなんだコイツ等は!?」
「まか――スパイダーネット！」

そこでスッとセインが姿を現し、周りに蜘蛛の糸を張り巡らせる。
敵は思わぬ伏兵に糸で体を縛られて動作が遅れる。それが命取りだった。
「行きます！　剛刀・霞十字！」
「はあああああああああ！」
「行きますよイツキ様！」
「はい」
俺達の仲間の中で戦闘力の高い連中がその僅かな隙を衝いて攻撃した。
「ぐ……だが、ここで引くわけにはいかない！」
「なんて硬い鎧を着てるんだ」
「ええ……」
ラフタリアや錬、樹の攻撃で、やっとのことで相手の鎧とくさりかたびらを突破して斬りつけることができたが、それでも致命傷には程遠い。
不気味なくらい錬度の高い連携と洗練された動きによる無駄のない攻撃。
ステータスこそ俺達の方が高いが、技術的な面では負けているぞ。
「く……」
「桜天命石の設置許可を！」
「今回の作戦では持ってきていない！　玉砕覚悟で挑むのだ！」
「「は！」」
この台詞、他にも隠し玉があるらしいな。

が、今はそれどころじゃない！
「邪魔ですわ！」
アトラが隙を衝いて拳を敵の懐にぶちこむ。
「うぐ！」
ん？　アトラの攻撃で相手の防具が破壊された？
で、錬や樹は攻撃が通らないと愚痴っていた。
ラフタリア、錬、樹の攻撃の効きが悪い。俺のスキルは容易く破壊された。
何か共通点がある。

——勇者か？

だが、それを考えるよりも早くやらねばならないことがある。
とにかく、これだけ動きの良い敵を相手にしているんだ。
セインが作った糸も既に千切れて、効果を成していない。
どうにかしてサッサと敵を倒す方法はないか？
「ラフタリア！」
一か八かだ！　俺はラフタリアに意識を集中させるように視線で合図をする。
コクリと頷いたラフタリアに背中を預けるようにして、前方で相手の攻撃を受けたまま、魔法詠唱に入った。

ぶっつけ本番、ただ願うのはこの場所で……ラフタリアの得意とする幻覚で相手を惑わすこと。
それに応じるようにパズルのピースの形が浮かび上がってくる。
「できるか？　ラフタリア」
「努力します！」
俺の唱えるベースの魔法はオーラではなく、ガード……覚えはしたがオーラの習得を機に戦闘では使用しなくなった援護魔法だ。
初めての合唱魔法で戸惑うラフタリアだが、俺よりも飲みこみが早いのか拙い中でも上手く組み上げている。
『二つの力、敵を惑わす幻覚の力を込め、敗北への運命を覆し勝利への未来を紡ぐ力を……』
よし！　詠唱が上手くいっている。
何だろうか。ラフタリアと力を合わせるというのはサディナと一緒に魔法を唱えるよりも速くできる気がする。
もちろん、俺が唱えた魔法自体の難易度が低いということもあるだろうが。
とにかくやるしかない！
魔法を唱えながら敵の猛攻を受け止める。
ここ最近、アトラやラフタリアと稽古していたことが活きている。
アトラの本能的な猛攻に比べたら、動きは良いが型があるこの敵の方が対処しやすい。
そして魔法を組み立て終える。
『龍脈よ我等の願いを聞き届けたまえ。力の根源たる我らが願う。真理を今一度読み解き、我が敵

を惑わす幻を見せよ！』
「『色即是空！』」
ターゲットマークが俺の視界に浮かぶ。
それは俺が敵と認識した全てに向かって作動しているようだった。
迷わず、素早く発動させる。
バシッ！と音を立てて、俺とラフタリアの唱えた魔法はこの場にいた敵全てに掛かった！
「は！」
と、相手が思い切り攻撃を外しながら見当違いの所へ移動していく。
ぼんやりとだが、俺達の幻が敵と善戦しているように見える。
「な、なんだ!?」
「合唱魔法を唱えた。少しの間、コイツ等は隙だらけだ！」
「どうやら幻覚によって五感を惑わせることができたようです。ですが気を付けてください！　なんとなくわかるのですが攻撃が当たれば解けますし、すぐに気付くと思います！」
「じゃあどうするんだ!?」
「効果時間もそこまでありません……やることは……」
そう言ってラフタリアは……見覚えのある構えを取る。
「スキル等の攻撃に関して、どうやら強力な耐性があるように見えます。ナオフミ様も他の勇者の方々もそれは感じているかと」
「まあな」

「レンさんもイツキさんも力を込めて……この隙を最大限利用してください」
「わかった！」
「はい」
「ふぇぇぇ……」
「タイミングを逃すんじゃないぞ」
俺は唱えられる範囲でできる限り能力が高い奴を優先しながらオーラを唱えていく。
時間にして一分にも満たなかっただろうな。
ラフタリアは魔力を充電し終えてから錬や樹、村の連中に合図を送る。
「流星剣！」
「イーグルピアシングショット！」
錬と樹を筆頭に敵に向かってスキルや思い思いの大技を放つ。
アトラは……ドスッと相手の胸に拳を叩きこむ。
が、殺気を悟ったのか戦闘経験なのか、敵は咄嗟に防御の構えを取った。
「行きます！　はぁあああああああ！」
ラフタリアの刀の刀身が輝き、スキルではない……一撃が辺りに展開される。
「八極陣、天命剣！」
すごい勢いの居合い斬りみたいになっていたが、みんなわかっていたのかラフタリアの一撃を屈んで避けた。
惑わされて立っていた連中のほとんどにズバッと光の筋が命中し、陰陽の文様が浮かび上がって



吹き飛ばされていった。

「ぐあああああああ!?」

　思わぬ一撃に敵は揃って戦闘は不可能となった。

「……魔力と気の同時攻撃ですか。さすがは尚文様の剣を自称するだけありますね。私も負けませんわよ」

　アトラがそう分析しながら倒れた敵を踏みつけてラフタリアに勝利のポーズを見せる。

　それとほぼ同時だっただろうか。

　海岸に極太の雷が幾重にも降り注いで海面からサディナが飛び出してきた。

「まったく……この程度でお姉さんを止められると思ったら大間違いよ」

「すっげー強かったな、この人達」

　キールが興奮気味に倒れている敵を短剣の鞘で突く。

「あらー？　ナオフミちゃんが守ってくれたのかしら？」

「一応はな。というか締めはラフタリアがやってくれたよ」

「す、凄かったな」

「はい。ところでこの方々に僕達の武器やスキルの効きがとても悪かったのですが……？　効くの……ですか？」

　相変わらず樹は迷いっぱなしだな。

「できれば吐かせたいところだな」

　というところで俺は倒れた敵を蹴って裏返す。

パチッと眼を見開いて起き上がろうとしたので、思い切り踏みつける。
「戦闘継続はできないと思え？　さあ、白状してもらおうか！」
「ふ！　お前達に語ることなど……ない！」
と、答えると同時に俺が踏みつけた奴を含め、その場にいた連中の体から光が漏れる。
「天命の継承放棄をした者の娘よ。お前の宣戦布告、我が国は確かに受け取った。既に国へと報告隊を向かわせた！　次々と我が国からの刺客が来るだろう。安穏の日々を迎えられると思わないことだ！　ハハハハハ！」
「ナオフミちゃん！」
「ぜ、全員下がれ！」
「天命様に栄光あれ！」
俺の声で全員が倒れた敵から距離を取るとほぼ同時に、敵は自爆して吹き飛んだ。
「敗北と同時に自爆……？　なんなんだコイツ等は」
というか、凄くグロい。
死体が飛び散って血なまぐさい。火薬のにおいもするし。
誰が掃除すると思ってんだ！　くそ！　挙句建物にも火の手があがってるし。
「とりあえず、消火活動を急げ！　被害を最小限に抑えるんだ！」
そんな感じで戦闘を終えた俺達は建物の消火をしてから改めて集まった。

幸い消火はあっさり終わった。

そもそもキャンピングプラントは植物だし、燃えづらいんだ。
壊れたとしても代わりはいくらでもある。
などと考えていると。
「こ、この武器は……」
武器屋の親父が敵の持っていた……自爆の影響で壊れてしまった武器を調べて言葉を失っている。
「どうしたんだ？」
「い、いや。なんでもねえよ」
「そうか？」
なんか親父の様子がおかしいな。まあ、話してくれないならしょうがない。
「悪かったな。せっかく村に来てくれた晩にこんなことに巻きこんじまって」
少し離れていたが武器屋の親父も善戦してくれていた。
礼どころか謝罪をしなくちゃいけない。
「いいってことよ。ところでアンちゃん、もう少しこの武器を調べさせてくれやしねえか？」
「ん？　ああ、妙な能力を持っていたみたいだし、調べてくれるなら丁度良い」
勇者の力に対して、妙に効果があった気がする。
親父に調べてもらって謎が解けることを期待してしまうな。
「さてサディナ、理由を説明してくれないか？」
「そうね。ナオフミちゃんに説明しようとしたら邪魔されちゃったしね。もう隠しきれそうにないわね」

亜人形態に戻ったサディナ諦めたかのように肩を軽く上げて応じる。
「今まで内緒にしていたけれど、ラフタリアちゃんはとある国で……この国でいうところの王の血族なのよ」
「え!?」
驚いたようにラフタリアが自身を指差す。
「そうだったのか。尚文の仲間であるラフタリアが……」
「驚きですね……そうですよね？　リーシアさん」
「は、はい。イツキ様」
とまあ、その場にいる連中がざわざわとざわめき始める。
「そんなに驚くことではありませんわ」
そこで声を上げたのはアトラだ。
どういうことだ？　もしかしてラフタリアに高貴な部分でも感じていたのか？
「私にとってラフタリアさんは尚文様を独占するための障害であることには変わりありませんもの」
あ、なんか呆れてる奴が多数。俺も呆れた。
「お前はぶれないな」
考えてみればクズの親戚でシルトヴェルトの長の血族なんだから、フォウルもアトラも王族みたいなものか。
「話を戻すぞ。で？　それと巫女服が何の関わりがあるんだ？」
サディナは困ったように巫女服を着ているラフタリアを見つめた後、髪を梳いて俺に視線を向け

る。
「そうね。さっき戦った子達が天命様と言っていたのが王様の位置だと思って」
「ああ」
「ナオフミちゃんが巫女服と呼んでいる服はね。ラフタリアちゃんの両親の国……クテンロウという国だと女性天命様にしか着ることが許されていない衣装なのよ」
……ああ、なるほど。
錬も樹もリーシアも、アトラやフォウルやこの場にいる連中が揃ってなんとなく察した。
「つまり巫女服が不自然に似合うのは、種族的な意味もあって似合って当然。しかも着ることは王であることを意味する」
「そうよー」
「で、ラフタリアの父親は王になるのが嫌で王族の権利を放棄し、駆け落ちしてメルロマルクに来た」
サディナは何度も頷く。
「その国の奴等からしたら、辺境で亜人の神と呼ばれる盾の勇者の、配下であるラフタリアが王族の服を着ている。これは王になる気だ。我が国への宣戦布告だ。お命頂戴……ってオチか？」
「ナオフミちゃん。凄く察しがいいわね。お姉さん驚いちゃうわ」
「わからないでか！　挙句、報告を受けたその国は、ラフタリアへと次々と刺客を送ってくるってことだろ！」
ああもう！　どんだけ厄介な問題が俺のところへなだれ込んでくるんだよ！

やっと錬と樹と元康に強化方法を共有させることができたと思ったのに……まあ元康は消息不明だが。

後は勇者共の呪いでも解いてサッサと七星勇者とやらに謁見したいと思ったらこれか！

ふざけるのも大概にしろ！

「お姉さんも刺激しなければ大丈夫だと思ったのよ。まさかナオフミちゃんがあの服をラフタリアちゃんに着せるなんて思わなかったの」

く……どうしてこうなるんだよ。

可愛い娘の晴れ姿を目の保養にしたかっただけなのに！　くそ！

「つーかサディナ。時々誰もいないところを見ていたのはあいつ等が潜んでいたのを察知していたからだな」

「そうよ。独自の隠蔽技術を持っていて、私でも見つけるのに苦労するわ」

「監視はいつからあった？」

サディナは俺の問いに対して若干厳しい目つきで答える。

「ラフタリアちゃんの両親が国を出てからずっと、よ」

「そうか」

つまり先ほど俺達が戦った連中は、この村が波に襲われ、被害に会った挙句、ラフタリアの両親が死んだ時も、ラフタリアが死にそうになってつらい奴隷経験をしている時も、助けもせずに黙って見ていたということに他ならない。

要するに自分達の国の王族に関する問題だけにしか興味がなかったわけだ。

親をなくして悲しむラフタリアを見ても、奴隷となって鞭打たれるラフタリアを見ても、その上勇者に使役され、その後も俺の所為で散々な目にあってるのを見ていても、だ。

なにが天命様だ！　その天命の血筋を蔑ろにしておきながらふざけるのも大概にしろ。

ずっと見張ってたとか気色悪いんだよ！

「ふ……ふふふふふふふふふふふふふふふ」

「な、ナオフミ様？　あの……」

「いい度胸だ。奴等がラフタリアの命を奪うために乗り込んでくるというなら、報いを受けさせてやろうじゃないか。サディナ、国を一つ潰す覚悟と俺に言ったよな？　いいだろう。お前のその言葉、乗ってやる。その国を……俺自ら直々に潰してやる！」

「あらー」

なんでウットリした表情をしてんだよ！

「やるのか？」

錬の問いに俺は思い切り頷く。

「ああ、俺はこういうふざけた奴が大っ嫌いなんだ。わかってるだろ？」

「まあ……な。やられたらやり返す。このままこの問題を放置していても碌なことにならなそうだ」

「全ては尚文さんがラフタリアさんに巫女服を着せた所為だと——もが」

樹を睨みつけるとリーシアが樹の口元を押さえている。

ふん。今は怒りの矛先が決まっているから見逃してやる。

その分……奴等に報いを受けさせるために強くなれよ。

がっくりとしたように肩を落とすラフタリアに目を向ける。
「嫌か？」
「いえ……ずっと付きまとってくるならやらねばいけないと思います。その、すいません」
「いいや、ラフタリアに巫女服を着せるための通過点ならしょうがない。どうせ避けて通れないなら……全力でぶち抜くまでだ」
そうだ。
ふざけた奴が俺の開拓した村に攻め込んでくるのなら、応戦するしかない。
これはもう避けられない戦いだ。
敵が来るのに脅えているよりも、敵に一矢報いてやる！
いや、一矢どころか百倍にして返してやろう。
「そうと決まればすぐに行動に移す。サディナ、敵の居場所を教えろ」
「わかったわ」
こうして俺は、ラフタリアの出生に関わる国、クテンロウという鎖国した国へ乗り込むことを決意したのだった。

盾の勇者の成り上がり 12

発行　2015年9月30日　初版第一刷発行

著者　アネコユサギ
発行者　三坂泰二
発行所　株式会社KADOKAWA
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
0570-002-001（カスタマーサポート）
年末年始を除く平日10:00～18:00まで
印刷・製本　株式会社廣済堂
ISBN 978-4-04-067787-3 C0093

Printed in JAPAN
http://www.kadokawa.co.jp/

企画　株式会社フロンティアワークス
担当編集　今井遼介／大原康平（株式会社フロンティアワークス）
ブックデザイン　ragtime
イラスト　弥南せいら

本書は小説投稿サイト「小説家になろう」（http://syosetu.com/）初出の作品を加筆の上書籍化したものです。

ファンレター、作品のご感想をお待ちしています

宛先
〒102-0071　東京都千代田区富士見 2-13-12
株式会社 KADOKAWA　MFブックス編集部気付
「アネコユサギ先生」係「弥南せいら先生」係

二次元コードまたはURLご利用の上
本書に関するアンケートにご協力ください。

http://mfe.jp/shu/

●スマートフォンにも対応しております（一部対応していない機種もございます）。
●お答えいただいた方全員に、作者が書き下ろした「こぼれ話」をプレゼント!
●サイトにアクセスする際や、登録・メール送信時にかかる通信費はご負担ください。


MFブックスの超話題作が書籍から漫画化──!!
ただいま発売中!
MFC
楠本 弘樹
原作:Y.A
キャラクター原案:藤ちょこ
八男って、それはないでしょう!①
ネットで1億5000万回読まれた物語の書籍がシリーズ累計25万部突破!待望の漫画化!!
MFコミックス フラッパーシリーズ
無職転生 ~異世界行ったら本気だす~③
フジカワ ユカ
原作:理不尽な孫の手
キャラクター原案:シロタカ
『このWeb小説がすごい!』2015年第1位を獲得!!
超話題の「詰んだニート人生」を本気でやり直す転生ファンタジー、第3巻!
MFコミックス フラッパーシリーズ
PV数、2億5000万回突破! 絶望に叩き落とされても這い上がる成り上がり召喚ファンタジー、第4巻!!
盾の勇者の成り上がり④
原作:藍屋球
アネコ ユサギ
キャラクター原案:弥南 せいら
KADOKAWA 発行:株式会社KADOKAWA B6判 定価:各552円(税別)

「こぼれ話」の内容は、
あとがきだったり
ショートストーリーだったり、
タイトルによってさまざまです。
読んでみてのお楽しみ！

モバイルアンケートに答えて 著者書き下ろし 「こぼれ話」を読もう！

よりよい本作りのため、
読者の皆様のご意見を参考にさせて頂きたく、
アンケートを実施しております。
ご協力頂けます場合は、以下の手順でお願いいたします。
アンケートにお答えくださった方全員に、
著者書き下ろしの「こぼれ話」をプレゼントしています。

この二次元コードから
アンケートページへアクセス！

http://mfe.jp/shu/

このページ、または奥付掲載の二次元コード(またはURL)に
お手持ちの携帯電話でアクセス。

↓

アンケートページが開きます。

↓

最後まで回答して頂いた方全員に、著者書き下ろしの「こぼれ話」をプレゼント。

●スマートフォンに対応しております(一部対応していない機種もございます)。
●サイトにアクセスする際や、登録・メール送信時にかかる通信費はご負担ください。

MFブックス　http://mfbooks.jp/